

来たる艱難期：黙示録の歴史

第4部:

大艱難期

黙示録 11 章 15 節～15 章 8 節

ロバート・D・ルギンビル博士著

内容

I. 第七のラッパ（第三の災い）。黙示録 11 章 15-19 節.....	3
II. 女と龍 黙示録 12 章 1-6 節.....	9
III. 天での戦い 黙示録 12 章 7-12 節.....	11
IV. 龍は、イスラエルの信者たちを迫害する 黙示録 12 章 13-17 節.....	23
V. 海から出た獣：黙示録 12 章 18 節-13 章 3 節.....	36
1. 海から出た獣の聖書的シンボル.....	36
2. 獣の王国：ヨハネの黙示録 13 章 2 節後半-3 節.....	39
1. 反-キリスト教の宗教とその世界的拡大: ヨハネの黙示録 13 章 4-10 節.....	48
2. 偽預言者: ヨハネの黙示録 13 章 11-15 節.....	67
3. 獣の刻印 黙示録 13 章 16-17 節.....	74
4. 獣の数 黙示録 13 章 18 節.....	79
VII. 大迫害 ヨハネの黙示録 14 章 1 節-15 章 8 節.....	82
1. 144,000 人の殉教。ヨハネの黙示録 14:1-5.....	109
2. 三つの天使の宣言 ヨハネの黙示録 14 章 6-13 節.....	113
a. 救いの道の宣言：黙示録 14 章 6-7 節.....	113
b. バビロンへの裁きの到来を宣言する。黙示録 14 章 8 節.....	115
c. 迫害における不屈の精神の必要性が宣言されています。黙示録 14 章 9-13 節.....	116
3. 殉教者の収穫 ヨハネの黙示録 14 章 14-16 節.....	122
4. 迫害者たちの刈られる時：ヨハネの黙示録 14 章 17-20 節.....	123
5. 殉教者のあがない：黙示録 15 章 1-8 節.....	124

序論： 七年間の艱難期間の中間点まで反キリストの経歴を調べた後、ヨハネの黙示録に戻り、黙示録の歴史を節ごとの研究に再び戻ります。悪魔を父として導きと支援を

受け、この世の実効支配者として獣が確立し、神の神殿でエルサレムに座し、自らを神であると称する([第二テサロニケ 2 章 4 節](#))時点で、艱難期の最初の段階が終了します。反キリストのこの「出現」により、私たちは世界史上最も恐ろしい時期である大艱難期の入り口に立たされます。

…また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの**悩みの時**があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。(ダニエル 12 章 1 節 b)

その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような**大きな患難**が起るからである。(マタイ 24 章 21 節) ([マルコ 13 章 19 節](#)参照)

大艱難期は疑いなく地球上の全住民にとって壊滅的な経験となるでしょうが、特にイエス・キリストを信じる人々にとって大きな試練となるでしょう。なぜなら、その時代の主要な、そしてまさにその名にふさわしい出来事、すなわち、その三年半を特徴づける激しい苦難は、教会に対する前例のない迫害と、それに伴う殉教だからです。彼の世界帝国を確固たるものにする鍵となるのは、獣の疑似宗教です。歴史的ローマでは、いくらか程度は低かったものの、支配者へのカルト的崇拝への忠誠が国家への忠誠の試金石とされていました。しかし、ローマ皇帝がこの明らかに邪悪な手段を主に権力の強化という現実的な理由で利用したのに対し、反キリストとその父である悪魔は、信仰を持つ人々を排除することで、信仰をこの世から根絶しようと意図しています。これは常にサタンの計画の中心的な意図でした。なぜなら、神が約束された人々すべてが(死や背教によって)取り除かれてしまうと、神の約束は失敗に終わらざるを得ないからです。キリストが再び戻ってくるべき人が誰もいなくなれば、悪魔の勝利です。これは、サタンの全く歪んだ考え方です。全世界が反キリストの支配下に置かれ、地上の全住民が獣の悪魔崇拝宗教に強制的に改宗させられることは、理論上可能であるだけでなく、悪魔にとっての完璧な最終解決策でもあります。改宗を拒む者はすべて死刑にされるため、いずれにしても信仰は地上から消滅することになります。そして、そのような運命が私たちを待ち受けているでしょう。しかし、神の慈悲、善良さ、そして力があれば、それは避けられます。神は、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの再臨によって、私たちを救いに来てくださいます。

その日、人は言う、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう」と。(イザヤ 25 章 9)

節)

あなたがたは弱った手を強くし、よろめくひざを健やかにせよ。心おののく者に言え、「強くあれ、恐れてはならない。見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、神の報いをもってこられる。神は来て、あなたがたを救われる」と。(イザヤ 35 章 3-4 節)

私たちは常に、その究極の解放を待ち望まなければなりません。しかし、大艱難期という名称がふさわしいものであることを覚えておかなければなりません。また、艱難期の前半の期間に背教によって多くの人々が倒れるように、最後の三年半の期間にも殉教によって多くの人々が倒れるでしょう。私たちは、良い理由あって聖書が私たちに前もって蓄えてくれている教訓をよく学び、覚えておかなければなりません。そして、どのようなことが起こってもよいように、霊的に備えるためにあらゆる努力をしなければなりません。

I. 第七のラッパ(第三の災い)。黙示録 11 章 15-19 節

(15) 第七の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、大きな声々が天に起って言った、「われらの主とそのキリストの世の王国は(今)到来した。主は世々限りなく支配なさるであろう」。(16)そして、神のみまえで座にしている二十四人の長老は、ひれ伏し、神を拝して言った、(17)「今いまし、昔いませる、全能者にして主なる神よ。大いなる御力をふるって支配なさったことを、感謝します。(18)諸国民は怒り狂いましたが、あなたも怒りをあらわされました。そして、死人をさばき、あなたの僕なる預言者、聖徒、小さき者も、大いなる者も、すべて御名をおそれる者たちに報いを与え、また、地を滅ぼす者どもを滅ぼして下さる時がきました」。(19)そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた。また、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、大粒の雹が降った。(英文からの訳：黙示録 11 章 15-19 節)

1. [第七のラッパ\(黙示録 11 章 15 節 a\)](#)：第七のラッパが鳴ると、大艱難期が始まります。7 は完全と完成の数で([詩篇 12 篇 6 節](#), [119 篇 164 節](#); [箴言 6 章 16 節](#); [9 章 1](#)

[節](#) 参照)、¹ このシリーズの第 3 部 A で見たように、前半の六つのラッパは艱難期の前半に強さと長さを増す警告の裁きを予告し開始しますが、七番目のラッパは最も長くて厳しい警告を伴う裁き、つまり大艱難期そのものを開始します。大艱難期は、神に会う準備をするようにという究極の警告です。というのは、最後の三年半の終わりに、神は征服者メシアとして来られ、ご自分の民に救いをもたらすと同時に敵に報復されるからです([第二テサロニケ 1 章 3-12 節](#)を参照)。ですから、この段落の[黙示録 11 章 15-19 節](#)にある他のすべての出来事や宣言は、第七のラッパの音と大艱難期の開始をその輝かしい未来の日に直接結びつけているのです。というのも、これまで見てきたように、大艱難期は全体として主の大いなる日の薄明かりであり、その夜明けは、世の真の光である朝の星、メシア、私たちの主、救い主イエス・キリストの再臨によって輝かしい栄光のうちにやってくるのです([民数記 24 章 17 節](#); [マタイ 2 章 2-10 節](#); [第二ペテロ 1 章 19 節](#); [黙示録 2 章 28 節](#), [22 章 16 節](#); 参照. [ヨハネ 1 章 4-9 節](#), [3 章 19-21 節](#), [8 章 12 節](#), [9 章 5 節](#), [12 章 36 節](#), [12 章 46 節](#))。 ²

2. [王国の宣言](#)([ヨハネの黙示録 11 章 15 節 b](#)):この節の伝統的な訳「この世の国は、われらの主とそのキリストとの国となった」は、著者がよく知る主要なすべての訳本に共通しており、ヘンデルの「メサイア」によって広く知られるようになりました。しかし、言語学のおよび神学的観点から見ると、これはあり得る訳ではあるものの、非常に可能性の低いものです。言語学的には、伝統的な訳文は「われらの主とそのキリストの」という属格句を文の述語とみなすことにしています。これは不可能ではありませんが、やや珍しく、ヨハネの文章のスタイルとは明らかに異なります。しかし、最初の属格句「この世のもの」の直後の特定の語順では、そのような意味を導き出すのは、後代のギリシャ語散文に近く、ヨハネのスタイルとはまったく不調和です。一方、上記の「われらの主とそのキリストの世の王国は(今)到来した」という訳は、ヨハネのヘブル語の属格の扱い方と完全に一致しています。(一見したところ、二つの訳の間には大きな意味の違いがないように思われるかもしれませんが)こちらの訳は、神学的な観点からも好ましいものです。なぜなら、救世主の到来による天国の即時的な到来は、ヨハネの黙示録の中心テーマですが、その天国の到来は、現在の悪の世界と同等であると捉えることは正しくないからです。サタンの地球支配は決して絶対的なものでも、無条件のものでもありません。二つの王国を同等に扱うことは(従来 of 翻訳では必然的にそうなる

¹ さらに詳しい参考文献および議論については、J.J. Davis 著『[聖書の数秘学](#)』(Grand Rapids 1968 年)116 ページ以降を参照してください。

² 「主の日」の象徴性については、本シリーズの[第一部、IV.1.b「主の日」パラダイム](#)参照。

わけですが)間違いです。簡単に言えば、悪魔の悪の王国がメシアの王国に「なる」という意味はありません。サタンの王国は、メシアの千年王国の出現によって完全に**置き換えられる**ところであり、いかなる意味でも「変容」するということではありません³。主が再臨され、天の王国が栄光のうちに到来するとき、サタンの王国は終わりを迎えます。それは消滅以外、何者にも「なる」ことはありません。ここで私たちが目にしているのは、権力の移行ではなく、古いものが新しいものに完全に**置き換えられる**ことです。この宣言は、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストが現れる時に起こる「生身」の王国の間近に迫った到来(今すでに霊的には活動中)を告げ知らせるものであり、その支配は永遠に続くということです([黙示録 12 章 10 節](#)以下の非常に類似した表現で述べられているのと同じ主張です)。⁴

3. [天使の長老たちの礼拝\(黙示録 11 章 16-18 節\)](#): 第七のラッパこそ、大艱難期であり、悪魔の支配の黄昏(たそがれ)時であり、まもなく、主が戻られ、エルサレムで千年間支配されることで、明けの明星の夜明けの輝かしい光によって解消されるものです。[黙示録 11 章 15-19 節](#)の各セクションは、それぞれに追加の詳細を加えつつも、この同じ中心的なテーマについて語っています。[15 節](#)後半の宣言は、第七のラッパの根本的な意味、すなわち、世界に対する差し迫った裁き、その悪、そして現在の悪の支配者に対する主の勝利の帰還を言葉に表しています。この最後の 42 か月の期間の終わりに、キリストは、キリストに敵対するために集まった諸国に対して裁きを下すために戻って来られ、キリストの教会を迫害し、キリストの民イスラエルを圧迫したすべての人々に対して報復されます。したがって、24 人の長老による賛美で描かれた総観図では、第七のラッパが告げている大艱難期の後で、間近に到来する王国の設立(「**大いなる御力をふるって支配なされた**」)、再臨の際にハルマゲドンで諸国が滅ぼされること(「**諸国民は怒り狂いましたが、あなたも怒りをあらわされました**」; 参照 [詩篇 2 篇 1-2 節](#)) また、最後の裁きにおける歴史の集大成(「死者が裁かれる時」)では、新たに樹立された千年王国で復活した教会が報われることが強調され、その直前の大艱難期の暗黒の日々を耐え抜く人々への励ましとなっています(「あなたの僕たちに... 報いを与えるため」)。最後に、大迫害に加担した者たちに下される報復について、特に言及しておかなければなりません。キリストの再臨は、「地を滅ぼす者たち」の文字通りの滅亡をもたらします。この表現は、主に道徳的、霊的な意味合いを含み、特にイエスに忠実であり続けた人々の殉教に、責任のあるすべての人々を指しています

³ 『サタンの反乱:艱難期の背景』の第 5 部「裁き、回復、そして置き換え」IV「起ころうとしていること:裁き、回復、そして置き換え」II、III を参照。(印刷本「サタンの反乱」の場合は 468 頁参照)

⁴ すなわち、私たちの主は、十字架上の勝利によってすでにこの世界の真の支配者なのです([マタイ 28 章 18-20 節](#)参照)。詳細は、『サタンの反乱:艱難期の背景』の第 4 部「サタンの世界システム」II.8「サタンは今、守勢」参照(印刷本「サタンの反乱」の場合は 234 頁参照)。

(地球そのものに対する物理的、環境的な損害のみを指しているわけではありません。参照:[黙示録 19 章 2 節](#)、娼婦バビロン「その姦淫で地を汚した者」つまり、道徳的・精神的な意味で地を汚した者。参照:[イザヤ 14 章 18 節](#); [ハバクク 2 章 17 節](#); [黙示録 6 章 7-8 節](#))。これには、バビロン、獣、悪魔、その天使たち、国々、そして、地上から忠実な者たちとイスラエルの子孫を根絶やしにしようというサタンの邪悪な計画に加担した国々やその国民が含まれます。ですから、私たちは、七つの封印の書が開かれ、大艱難期の始まりを象徴する([黙示録 5 章 8-10 節](#))以前に彼らがそうしたように、ここでは、24 人の長老たちが七番目のラッパの重要性を記念して特別な賛美歌を歌っています。このラッパは大艱難期の始まりと、主の日が明ける時に、神の民を擁護する王国とその王の到来を告げるものでもあるのです。

4. [契約の箱の出現](#) ([黙示録 11 章 19 節 a](#))。これまで何度か見てきたように、地上の契約の箱はモーセの監督下で造られた「慈悲の座」とともに、戦車の形をした神の御座の象徴です ([エゼキエル 1 章 4-28 節](#), [10 章 9-22 節](#); [詩篇 132 篇 7 節](#)参照)⁵ 地上の箱はもはや存在しませんが ([エレミヤ 3 章 16 節](#)参照)、ここに天上の箱が現れることは非常に意味があることなのです。神殿が開かれるとき、この神の戦車が出場することは、メシアが神の民のために戦い、神の敵すべてに報復を与えるために戻ってくるのが間近に迫っていることを象徴しているのです。先に見たように、神の箱はそれ自体がイエス・キリストの象徴であり(アカシアの木が金で覆われているのは、真の人間性<木>と輝かしい神性<金>をそれぞれ表しています)、ここにあるのは、聖徒のあがないとその敵を滅ぼすために天の軍勢の先頭に立って地上に戻ってこようとする征服者メシアの強力なシンボルなのです。ですから、神の箱の出現の背後にあるメッセージは、第七のラッパの音、[15 節後半](#)の天の宣言、二十四人の長老の賛美歌のメッセージと実質的に同じなのです。これらの出来事や象徴はすべて、主が栄光のうちに敵を打ち負かし、勝利のうちに地上に千年王国を樹立するために戻って来られるハルマゲドンの裁きに、私たちの注意を向けさせてくれるからです。

この同じ本質的な点を四重に強調していることは、間違いなく私たちが特に注意しなければならないことを意味しています。大艱難期の始まり(この最後のラッパの音で知らされる)は、その三年半の間に生じる恐ろしい苦しみがありますが、実は、悪魔による地球支配の終わりと再臨における神の子の栄光と決定的な勝利が始まる支配の前奏曲に過ぎないのです。このことは、特に暗黒の時代に耐えなければならないすべての人々にとって、非常に重要なポイントです。人類の歴史の中で最も暗い時代、最も大きな悪魔の迫害の時代は、神の視点から見れば、地上の悪と闇の支配の終わりと、

⁵ 特に、このシリーズの[第 2 部 B「地上の幕屋と神殿は天上の神殿の型である」](#)をご覧ください。

人の子、真のあけぼのの星、私たちの祝福する主、救い主イエス・キリストの人としての真実と光の支配の始まりを告げるための短い序曲に過ぎないからです。

5. 天からのしるし([黙示録 11 章 19 節後半](#))。第七のラッパが鳴り、艱難期の最終段階である「大艱難期」が始まると、明らかな神よりの一連のしるしが起こり、サタンの地上支配のこの最終段階の始まりと、メシアの千年王国への置き換えが差し迫っていることを強調することになります。これらのしるしは、艱難期の始まりを告げるしるし([黙示録 8 章 5 節](#)参照)、ハルマゲドンの戦いの前夜にキリストの再臨が近いことを告げるしるし([黙示録 16 章 18 節](#))とほぼ同じものです。しかし、これら三つの天のしるしは、それぞれ雷と稲妻と世界的な地震を含んでいますが、終わりが近づくにつれて、さらに激化するという要素があります。大艱難期の入り口に、世界的な雹の嵐が加わり、強烈な影響をもたらします([黙示録 11 章 19 節](#))。ハルマゲドンに先立って、第七の鉢の裁きの一部として起こる地震は、前例のない大きさになり、雹はさらに大規模になり、その影響は壊滅的なものになります([黙示録 16 章 18-21 節](#))。雷、稲妻、地震、雹は、大艱難期の到来を告げるものであり、獣の支配下にあつて、警告を受けようとする大多数の人間にも、恐ろしい試練の時が来たことを地球上のすべての人に知らせるものです。

6. 大艱難期の特徴： このシリーズを読んでいる人は、これまでの内容と聖書の研究から、主の再臨前の最後の7年間の後半、主ご自身が「大艱難期」と呼んでおられるこの期間が、人類の歴史上前例のない苦しみと災害の時代になると理解しても間違いのないでしょう([マタイ 24 章 21 節](#); [マルコ 13 章 19 節](#); [ダニエル 12 章 1 節](#)参照)。

この期間を「大艱難」と呼ぶには、世界的な問題と艱難のレベルが非常に高くなることが、私たちが以前学んだ艱難期前半の傾向と大艱難期の傾向を比較することで明らかになります(以下の研究で取り上げます)。

艱難期の傾向

(比較表)

最初の三年半

	サタンによる		神による
霊的領域:	大いなる背教 <>		世界的福音宣教
この世の領域:	反キリストの台頭 <>		世界的な警告の裁き

大艱難期

	サタンによる		神による
霊的領域:	大迫害	< >	殉教者の世界的な証
この世の領域:	反キリストの支配	< >	世界に対する怒りの裁き

艱難期の前半と後半のテーマ的な違いは、上の二つの図表を比較すれば一目瞭然でしょう。地上的には、前半の三年半は悪魔の計画の序章に費やされ、大艱難期の最終段階では、反キリストの地上の支配の成就と、この世から信仰と信仰者を根絶やしにしようとする厚かましい試みが、究極の目的の論理的な延長線上にあります。神の側からも、怒りの裁きは警告の裁きよりも厳しくならざるを得ないので、大艱難期はより厳しい段階となるでしょう。そして、イエス・キリストを信じる真の信者は、大背教の間、反キリストの罠にかかった仲間から激しく排斥されることも苦痛ですが、大艱難期の最終段階における大迫害期における迫害と殉教は、間違いなく、より耐え難いものになるでしょう。

大艱難期の傾向について第二に注目すべきことは、この四つのすべてが、その最後の期間の中心的なテーマ、すなわち教会の大迫害を中心に展開されていることです。サタンが反キリストを立てて、その世界的支配を促進する第一の目的は、まさに地上の信仰の残党を排除することであり、それによって、信じる者達に対する神の約束を挫き、神が嘘つきであることを証明しようと考えているからです(こうして、天使と人間の事柄を巡る争い、すなわち人類が創造されたそもそものきっかけとなった反乱に関して「勝利」することになるのです)。この迫害によって引き起こされる大規模な殉教と、それに続いてそれがもたらす不信者に対する神の怒りは、何が起ころうともイエス・キリストに忠実であり続ける人々をこの世から根絶やしにすることを目的とした、反キリストが実行する悪魔の主要な計画の結果です。しかし、この極度の試練の期間は、神ご自身がその合図(すなわち、第七のラッパ)を吹くまで始まらないこと、そして、人類の歴史に起こった他のすべてのことと同様に、この最も恐ろしい時でさえ、神の意志を達成するために設計されていることを、信者は心にとめておかなければなりません(参照:[イザヤ 45 章 4 節](#), [46 章 11 節](#); [エゼキエル 38 章 4 節](#))。私たち信者は、そのような暗黒の日々を耐え忍ぶよう求められるかもしれませんが、大艱難期のような試練でさえ神の恵みを示すために用いられること、また私たちが神への信仰と神の御子、私たちの主、救い主イエス・キリストへのゆるぎない愛を示す機会でもあることを決して忘れてはなりません。そして、その最大の機会が、信仰と真理が人類の歴史上かつてないほど悪魔の力に直接的に攻撃されることになる大迫害期における迫害と殉教の時に訪れるのです。

兄弟たち[信者たち]は、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼[悪魔]にうち勝ち、死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。(黙示録 12 章 11 節)

大艱難期の間、大迫害の坩堝(るつぼ)の激しさの中で、最初の 3 年半の策略がすべて露わにされ、悪の本質が完全にむき出しになります。しかし、特に私たちがこれらの出来事に巻き込まれても、この悪魔の最後の怒りは、神の力と恵みに完全に委ねられ、神が裁き、置き換え、回復のうちに御心を働かせ、それが私たちの王イエス・キリストの再臨という頂点を迎えることになることを見失ってははいけません。マラナ・タ! 私たちの主よ、帰ってきてください!(私たちは祈ります)。(第一コリント 16 章 22 節)。

II. 女と龍 黙示録 12 章 1-6 節

(1)また、大いなるしるしが天に現れた。ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた。(2)この女は子を宿しており、産みの苦しみと悩みとのために、泣き叫んでいた。(3)また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた。(4)その尾は天の星の三分の一を掃き寄せ、それらを地に投げ落した。龍は子を産もうとしている女の前に立ち、生れたなら、その子を食い尽そうとかまえていた。(5)女は男の子を産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。この子は、神のみもとに、その御座のところに、引き上げられた。(6)女は荒野へ逃げて行った。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養われるように、神の用意された場所があった。(黙示録 12 章 1-6 節)

この聖句に登場する「女」はイスラエルを象徴しており、家父長時代から大艱難期の初期(現在、取り扱っているこの時代)までたどる歴史が、息を呑むほど美しい形で要約されています。書かれた神の言葉と生きている神の言葉の両方の起源として、女は昼と光の象徴である太陽をまとい、夜と闇(悪と悪しき者の時間と領域:[ルカ 22 章 53 節](#); [第一テサロニケ 5 章 4-10 節](#))を支配する月が、彼女の足元に服従して横たわっています。彼女の頭の冠にある十二の星は、イスラエルの十二人の息子とそこから生じた部族を象徴しています([創世記 37 章 9 節](#); [創世記 15 章 5 節](#), [22 章 17 節](#), [26 章 4 節](#)を参照)。しかし、イスラエルの最も重要で輝かしい子孫は、メシアご自身、すなわ

ち私たちの救い主イエス・キリストであり、アブラハム、イサク、ヤコブを先祖とする血統の持ち主です(ローマ 9 章 5 節;ローマ 9 章 7 節を参照)。イエスは女の子孫であり(創世記 3 章 15 節)、アブラハムの真の種であり(ガラテヤ 3 章 16 節)、鉄の杖ですべての国々を支配するように定められたダビデの子です(詩篇 2 篇、ローマ 1 章 3 節、参照:イザヤ 4 章 2 節, 11 章 1 節, 53 章 2 節; エレミヤ 23 章 5 節, 33 章 15 節; ゼカリヤ 3 章 8 節, 6 章 12 節)。したがって、真のキリストである、救世主は、女くが象徴するイスラエルの息子であり、この原型的女性の歴史的苦悩、苦痛、目的は、唯一救いをもたらすお方である、神の子であり、人の子である、原型的息子イエス・キリストの誕生を、焦点とし、それに集中し、それにおいて頂点に達します。(創世記 3 章 16 節; ミカ 5 章 3-5 節; 第一テモテ 2 章 15 節を参照)。

神であるイエス・キリスト、メシアの誕生が間近に迫っているのに対して、私たちは次に、墮天使の長であるサタンを表す別のしるしを空に見ますが、ここでは大きな赤い龍(ギリシャ語でドラコン、δράκων)として象徴的に描かれています。原語のギリシャ語で「龍」は蛇を意味します(創世記 3 章 1-15 節参照)。そして、「大きい」と「赤い」という形容詞が加わって、この姿は怪物的な性質を際立たせています。⁶ この龍は、さらに七つの頭と十の冠を持ち、救世主がその地位を継承することになる悪魔の世界支配を象徴的に示しています。具体的には七つの頭と十の冠は、サタン(と反キリスト)が長い間追い求めてきた、世界支配への最後の足がかりとなる復活したローマ帝国を表しており、第七のラッパで予告された大艱難期において、ついに達成されます(参照: 黙示録 13 章 1 節, 17 章 3-9 節)。⁷ 女の場合と同様に、ここで述べられている龍の行動は、悪魔の歴史を象徴しています。サタンの最初の反逆と、天の星である天使の三分之一(大背教の時に神から離れて獣に従う信者の三分之一も予告しています)⁸を誘惑したことに始まり、その後すぐに、神のご計画をあらゆる面で実現することになるメシアを滅ぼそうとして、神に真っ向から対立する立場へとすぐに移行します(マタイ 2 章 1-15 節, 4 章 1-11 節; ルカ 22 章 3 節; ヨハネ 13 章 27 節 参照)。メシアを滅ぼして神の計画を阻止しようとするサタンの試みが失敗し、主が天に昇られた後(そこで、この最後の大艱難期の終わりに主が栄光を持って戻られる時に、敵が主の足台とされる

⁶ 血の色である赤(ギリシャ語の形容詞 *pyrros* が使われている黙示録 6 章 4 節; イザヤ 63 章 2 節も参照)は、特に血なまぐさい殺人の罪を暗示しています(イザヤ 1 章 15-21 節、NIV スタディ・バイブル のイザヤ 15 章 18 節の注釈を参照)。

⁷ 『来たる艱難期: パート 3B: 反キリストとその王国』III、「獣の王国」参照。印刷された「来たる艱難期第3部 B」では 58 頁参照。

⁸ この箇所の、背教した信者と墮天使としての星の象徴と解釈については、『来たる艱難期: 第3部 A: 第七の封印から二人の証人まで』III.1.a「大背教: 定義」を参照してください。また、『サタンの反乱: サタンの世界システム』の第4部、III.3「位階の称号: 2) 長老たち」も参照。

まで父の右でお待ちになっているのです。[詩篇 110 篇 1 節](#); [エペソ 1 章 20-23 節](#); [ヘブル 10 章 12-13 節](#); [第一コリント 15 章 25 節](#)参照)、龍は女と「神の戒めを守りイエスの証を固く守る」そのすべての霊的子女の破壊に力を注ぐでしょう([黙示録 12 章 17 節](#))。

したがって、ここで概観したものは、サタンとその反逆に対する神の勝利の計画の主要な展開であり、その背景には、その計画に反対し、妨害しようとする悪魔の努力があります。サタンの有史以前における墮落天使たちへの誘惑から、救世主の初臨に対するサタンの敵対、そしてサタンが最後に行く、救世主に忠実な人々をすべて滅ぼそうとする試みまで、これらの聖句は大艱難期と、それを体現する大迫害が始まる地点まで私たちを導きます。したがって、これらの節は大艱難期の出来事(すなわち、神の千年王国前の計画の最終段階を告げる第七のラッパが吹き鳴らされると、七年間の半ばに達した後に起こるすべての出来事が起こります)の導入部および序章として、特に、霊的な意味でその最後の数年間を支配する出来事である「大迫害」の導入部および序章として記されています。

III. 天での戦い 黙示録 12 章 7-12 節

(7)さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも【応戦】したが、(8)勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる[避難する]所がなくなった。(9)この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。(10)その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、

「今や、われらの神の救と力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえて彼らを訴える者は、投げ落された。(11)兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼[悪魔]にうち勝ち、死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。(12)それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちはわざわざである。悪魔が、自分の時が短いを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」。

(黙示録 12 章 7-12 節)

艱難期の地上の出来事の目に見える原動力である反キリストは、上記の節でも、12章の他のどの箇所でも言及されていません。その代わりに、歴史的に、特に大艱難期の間、神の計画と民の敵として明らかに見られるのは、龍であるサタンです。女と龍の寓話が人間のすべての出来事を支配している目に見えない本当の争いに注意を向けさせたように、大艱難期の始まりに、その恐ろしい三年半の間に起こるすべての出来事を中心に天使の出来事があることが分かります。サタンがその従者とともに天国から追い出されることは、サタンの神に対する反逆の歴史における決定的な転換点となります。その時点から、対立の力学は根本的に変わり、人類史の他のどの時期にも匹敵するものはないでしょう。このことが、神の視点から見ると、大艱難期が主の再臨によって終結する「主の日」と分けて考えることはできない理由なのです。サタンが神の民に対する最後の猛攻撃に全力を注いだら、神の怒り、神の裁き、神の解放までは、もう長くは続きません。

天国の戦争：ミカエルとサタンとその軍勢の戦いは、サタンとその天使を天国から追放することになり、大艱難期の最初の出来事となります。⁹ この節で「戦争」が始まったと書かれていることは、「ミカエルとその天使たち」がこの攻撃を開始すること、そして確かなことは、彼らが神の権威に基づいてこの敵対行為を開始することです。ある人たちは不思議に思うかもしれませんが、人類史のこの時点まで悪魔が天の会議に姿を現し、選民に対して告発し続けることを神は許していました([ヨブ 1 章 6-12 節](#), [2 章 1-7 節](#); [ゼカリヤ 3 章 1 節](#); [第一ペテロ 5 章 8 節](#); [黙示録 12 章 10 節](#))。明らかに神は、直接的な方法であれ、ここにあるように、選ばれた天使の代理を通してであれ、いつでも悪魔を天から追い出す力を持っています。しかし、天と地で起こったことはすべて、神の避けられない御計画に従って起こったのです「そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい」([ローマ 11 章 33 節](#))。被造物の反逆によって引き裂かれた宇宙の道徳的綻びを修復する神の御計画は、常に一方では被造物に真の自由意志を与えることと、他方では神の正義と神聖さ、そして完全に聖なる善と愛の御性格を否定しようのない形で示すことの両方を含んでいたのです。サタンに与えられたすべての時間と機会、そして悪魔による正しい人々へのすべての攻撃において、神の意志は常に勝利を収め、人間と天使を問わず被造物によって行われたすべての悪は、神を選択した人々の信仰の真価と、彼らが信仰を置いた方の誠実さと慈悲を示すことに役立ってきました。人

⁹ 「女、イスラエルが飛んで行く」ことは、悪魔が地上に投げ落とされた後まで起こりません。以下の節が明らかにしているように(特に[黙示録 12 章 13 節](#)を参照)。したがって、[黙示録 12 章 6 節](#)は将来起こる出来事として理解すべきであり、モーセとエリヤの働きに応答したイスラエルの人々が砂漠に逃れる様子を予告しています。詳細は[黙示録 12 章 13-17 節](#)で説明されています。

類の歴史の中で、裁き、回復、置き替えのプロセスは急速に進んできましたが¹⁰、真の「終わりの始まり」を示す最後の警告である第七のラッパの音と共に([黙示録 12 章 10 節](#)参照)私たちは神の御計画の新たな段階、正確には第二段階に入ります。そこでは、神が地上の悪魔の王国を**裁き**、地球を祝福に満ちた環境(すなわち、千年王国)に**回復**されるのです。そして、この世の事実上の支配者を、神ご自身が油注がれた方、すなわち真のメシア、私たちの主、救い主イエス・キリストに**置き換え**られるのです¹¹。

したがって、第七のラッパが鳴った直後、サタンが天国から追放されると同時に始まる大艱難期の期間は、本質的に、その直後にある主の日と区別が付きません。なぜなら、これは、キリストの千年王国と支配による**回復**と**置き換え**によって答えられる**裁き**の始まりだからです。サタンとその天使が投げ落とされたことで、警告の最後のしるしである七つのラッパが与えられた直後に、裁きのプロセスが始まるのがわかります¹²。それに続く大艱難期のすべての動向は、裁きのプロセスの一部(すなわち、七つの怒りの鉢の裁きとバビロンに対する残りの一連の七つの大いなる裁き、ハルマゲドンにおける裁きなど)、あるいは挑発された反抗(すなわち、反キリストの冒濫的な支配と大迫害)ですが、本質的には、強力な浄化の風が腐敗したものすべてを一掃して、メシアの千年王国における義の清く明るい新しい日の到来を告げるときに直ちに続く祝福された回復と置き替えのことなのです。

したがって、サタンの支配の最後の三年半は、夜明け前に訪れる最後の闇であり、その夜明けと共に、輝く星が昇り、神の御臨在と真理の栄光に満ちた光が地を照らすこととなります。[黙示録 12 章 7 節から 12 節](#)に書かれているのは、このプロセスにおける最初のステップです。すなわち、サタンとその墮落した天使たちを天から追放し、地上に幽閉するというこの最後の恐ろしい期間は、人類のテストと苦しみとなる、裁き、回復、置き換えのプロセスの最初の段階です。

大艱難期がこれほど恐ろしいものであり、人類の歴史上、他に類を見ない時であるのは、悪魔に与えられた残りの期間、悪魔が地球上に制限されていることが少なからず関係していることは確かです。([ダニエル 12 章 1 節](#); [マタイ 24 章 21-22 節](#))。サタンは天と地の間を行き来して、手下が地上で私たちを攻撃している間に、主の御前で

¹⁰ これらのテーマは、「サタンの反乱」シリーズで詳しく取り扱われています。特に第 5 部「裁き、回復、そして置き換え」を参照。

¹¹ 『サタンの反乱: 艱難期の背景』の [第 5 部「裁き、回復、そして置き換え」](#)の [第 IV 章「来るべきもの: 裁き、回復、そして置き換えの第 II と第 III」](#)を参照。

¹² すなわち、これは、サタンのクーデターに対する神の宇宙への最初の裁き以来続いてきた「休戦」の終わりです。 [サタンの反乱シリーズの第 4 部、III.1「現時点での天上の休戦」](#)を参照。

兄弟姉妹を非難するという事は、もはやありません。これからの悪魔の努力はすべて地上に集中します。それは、悪魔とその意志は、主の大いなる日が彼らを一掃するまで、この地上に閉じ込められているからにはほかなりません。ですから、大艱難期の「凄さ」には、聖霊による阻止がなくなって不法状態が出現することや、反キリストの一国支配とそれに続く人間の抑制の崩壊など、多くの要因がありますが、サタンとその手下が地上に制限されていることが、大艱難期が完全に恐ろしいものとなる大きな要因の一つなのです。¹³

「それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちはわざわざいである。悪魔が、自分の時間が短いを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」。(黙示録 12 章 12 節)

それにもかかわらず、ミカエルの勝利と悪魔の追放は、大きな喜びをもたらすものです(黙示録 12 章 12 節前半)。それは、イエス・キリストの十字架上の勝利によって可能となり、今、悪と悪魔の恐怖の支配の終わりの具体的な始まりを示すことになる、最終的な栄光の段階に入るものだからです。

そして、[神は、十字架によって、]もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。(コロサイ 2 章 15 節)([ローマ 16 章 20 節](#)、[ヘブル 2 章 14 節](#); [第一ヨハネ 3 章 8 節](#)後半参照)

サタンが天国から追い出されたことは、やがて来る正義の住む永遠の王国からすべての悪を排除するための目に見える最初のステップであり、そのことは聖書の他の預言の箇所にもよく記されています。

(12)黎明の子、明けの明星よ、**あなたは天から落ちてしまった**。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。(13)あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、(14)雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。(15)しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる。(イザヤ 14 章 12-15 節)

¹³ 前者<聖霊による阻止がなくなって不法状態が出現すること>については本シリーズのパート 2B を、後者<反キリストの一国支配とそれに続く人間の抑制の崩壊>についてはパート 3A と 3B を参照。

あなたは創られた日から不義が見つかるまでは、すべての道において完全であった。あなたの広範な陰謀の中で、あなたは邪悪に満たされ、罪を犯した。それでわたしはあなたを冒涇者として神の山から追い出し、火の石の間から[あなたの記憶]を消し去った、おおいのケルブよ。あなたの心はその美しさのゆえに傲慢になり、[そのために]あなたはその輝きのゆえに知恵を滅ぼした。それで、**わたしはあなたを地に投げ捨て、王たちの前であなたを見世物にした。**(英文からの訳 エゼキエル 28 章 15-17 節)

七十二人が喜んで帰ってきて言った、「主よ、あなたの名によっていただきますと、悪霊までがわたしたちに服従します」。彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た。(ルカ 10 章 17-18 節)

ミカエル:ミカエルとその天使たち、そしてサタンとその天使たちとの戦いについて、ここで短い余談が必要かもしれません。聖書は天使の領域について多くのことを語っており、私たちが知りたいと思うほどにはありませんが、知る必要のあることはすべて語られています。¹⁴ 人間のような肉体を持たない天使は、明らかに傷つけることも殺すこともできません(監禁されることはあるかもしれませんが)。ですから、第七のラッパが鳴ったときに起こる戦闘の正確な性質と詳細は、私たちの理解を超えるものなのです。私たちに与えられているのは、悪魔とその軍勢が完全に敗北し、天界から完全に排除されるという結果だけです。私たちは以前、救われる人類の最終的な数は墮天使の二倍(前半は教会、後半は千年王国時代の信徒層)と仮定しました¹⁵。したがって、このような膨大な数と勝利と敗北の完全性は、特に天使たちの持つ並外れた力を考えると、この戦いが莫大なものとなることは確かです。さらに、墮天使が天地の再創造と人類の創造以前から持っていた「領地」から追放されることの意義は計り知れません。この出来事は実際に起こることであり、私たちがそれを見ることができず、その具体的な内容を把握するのが難しいからといって、その意義が小さくなるわけでは決してありません。天使の世界にとって、この変化は勝者にとっても敗者にとっても重大なものであり、もちろん地球と人類にとっても重大な影響がないわけではありません。

この選ばれた天使たちと墮落した天使たちの決戦について推測できることは、参加

¹⁴ このような問題については、以前にも幅広く扱いました。特に聖書の基本をご覧ください：パート 2A: 天使論、および [「サタンの反乱」シリーズの第 4 部、III「サタンの戦闘序列」](#) 参照。

¹⁵ [『サタンの反乱』第 5 部参照：艱難期の背景「裁き、回復、置き換え」II.7「人類史の七日間」](#)。

する天使の数は膨大ですが、天使の部族すべてが参加するわけではないということです。ミカエルは大天使であり、七人の「総司令官」の一人です¹⁶。選ばれた「軍」の総数を各司令官の指揮下に均等に配置されていると推測すると、ミカエルはサタンの全軍の3分の1以下の規模で(すなわち、全天使の3分の2のうちの7分の1が、3分の1の悪魔の軍勢に)、当たることになります。多くの悪霊どもが地上の活動に関与するようになることは確かですが、少なくともミカエルの軍勢にもある程度は同じことが言えるでしょう([ダニエル 12 章 1 節](#)参照)。つまり、選ばれた天使たちが圧倒的な数を味方につけて簡単に戦うのではなく、ミカエルの勝利には並外れた戦略と戦術、そして並外れた勇気と勇敢さが必要だということです。この勝利は[黙示録 12 章 7-9 節](#)で二千年近く前から預言されていましたが、選ばれた天使たちの数においては劣勢でありながらの果敢な攻撃と、自分たちの敗北の驚異は、悪魔とその仲間には驚きであり、この屈辱はその後サタンに残された短い時間の中で世界に対して「怒り」をぶちまける要因になるでしょう([黙示録 12 章 12 節後半](#))。私たちは詳細を知ることはできませんが、ミカエルの最も印象的な勝利から明確な原則が浮かび上がってきます。この預言を武器に、ミカエルとその軍勢は今でさえ、来たるべき不平等な戦いに備えて割り当てられた時間を使っており、この勤勉さの直接的な結果として、明らかに数が優勢であることから誤った自信を引き出して自己満足に浸っている敵の不意打ちに、驚異的な成功を収めることとなります。詰まるところ、このような点から、ミカエルの軍隊は選り抜きの戦士である天使の精鋭隊である可能性が非常に高いです(私たちは、天使の種類の中で「海兵隊」または「レンジャー」と考えることができます)。前に見たように、墮落しなかった天使の部族の数は七つではなく、六つで、¹⁷各天使部族が大天使(四人の長老に加えて)を所有する一方で、ミカエルはこれまでの反乱との戦いで武勇、勇気、誠実さ、主への熱意で際立ったエリート戦士からなる特別司令部を保持していると仮定することは、文脈と天使の組織について我々が識別できる他の要素と確実に合致します(ダビデの特筆すべき勇士たちと比較してください):[サムエル記下 23 章 8-39 節](#); [歴代誌上 11 章 10-37 節](#); [サムエル記上 22 章 1-2 節](#)を参照)。イエス・キリストの忠実な信者である私たちは、私たちが従事している霊的な戦いにおいて、主のために何をするかが極めて重要であることを忘れてはなりません。ですから、ダビデの勇士たちのように、またミカエルの精鋭たちのように、私たちもまた、自分が従事している霊的な戦いでの卓越した行為によって、主の勇士の巻物に自分の名前を書き記す絶好の機会があるのですから、互いに励まし合い続けましょう。そして、最も暗い時代が待ち受けていたとしても、大迫害の戦場は、そこで戦う人々に、イエス・キリストの栄光をたたえ、

¹⁶ [「来たる艱難期」の第3部Aを参照：第七の封印から二人の証人まで、第1.1節「七つのラッパと七人の大天使」](#)。

¹⁷ [「サタンの反乱」第4部参照：艱難期の背景：サタンの世界システム、III.3、「聖なる天使の組織」](#) 参照。

不朽の栄光の冠を勝ち取るための前例のない機会をも提供してくれることを忘れないでください。(第一ペテロ 5 章 4 節。参照: 黙示録 12 章 11 節)。

勝利の宣言: 神の「救と力と国」が今到来したことを意味する天からの宣言は、私たちが上に述べたこと、すなわち、神の観点からは、メシアの再臨と勝利がこの時点で非常に近く、確実に、ほとんど現実のものとなっていることを確証しています。神の視点からは、悪魔の最後の攻撃から信徒を救い出すことと、この救出を達成するキリストの再臨における神の力の発揮と、その後確立されるメシアの祝福された王国とを区別しようとするのは、無益で無意味なことです。サタンがイスラエルに始まり、教会全体に拡大する大迫害を開始することは、それに続く裁きと解放を保証するものであり、それと切り離すことはできないのです。[10 節](#)の宣言に綴られたこれらの勝利の要素はすべて神から来たものであり、その「救と力と国」の三つは次の「キリストの権威」というひと言に集約されています。なぜなら、イエスは全能の父なる神に委任された権威(ギリシャ語 エクソシーア ἐξουσία, exousia)で活動する真のメシアとして、解放を成し遂げ、王国を打ち立てられるからです。今、大艱難期の始まりを熟考する私たちがそれを経験するすべての人々は、これから起こる恐ろしい出来事をこのように天の光で見る権利があり、実際にその必要があります。なぜなら、信仰と忠実な人々を地上から絶滅させようとする悪魔の攻撃は、かつてないほど激しくなっていますが、それによって神の民は、神の御子の全能の力によって、祝福された新しい日と、私たち自身の主であり救い主であるイエス・キリストによって、完全な義のもとに支配される輝かしい新しい王国に守られ、個人的に解放されることが保証されるからです。ですから、私たちはこの見通しを恐れたり、実際の経験の重さにうめきたい誘惑にかられますが、悪魔とその勢力がどれほど大きく、その時に仕掛ける迫害がどれほどひどく過酷であっても、神の力は単なる被造物の力とは比較にならないことを覚えていなければなりません。

訴える者は、投げ落された: ギリシャ語の接続詞ホティhoti(「なぜなら」、「ために」)は、[10 節](#)前半の勝利の宣言と後半の「告発者」が投げ落とされることの繋がりを意味しています。つまり、サタンが追い出されることは御国の到来の**前触れ**なのです。これが[ルカ 10 章 17-18 節](#)でイエスが指摘したことで、72 人の証人の宣教のすぐ後に来ます(ちょうど、<サタンとその使いたちとが>投げ落とされることは 14 万 4 千人の宣教の直後に起こります)。悪魔が地上に閉じ込められることは、そこに住む者達にとっては恐ろしいことですが、それは驚異的な御国が間近になった紛れもないしるしです。さらに、悪魔が神に対して反逆することを許されてきた基本的なルールが、ここで重要な変化を遂げることがわかります。この時まで、サタンは神の御座の前で信者を中傷すること

が容認されており、それは明らかに日常茶飯事でした(ヨブ記 1-2 章参照)¹⁸ 結局、聖書で彼がディアボロス(ギリシャ語の δ ι α β ο λ ο ς、「中傷する者」「非難する者」、参照:ヘブル語ではサタン、שָׂטָן「敵対者(告発者)」)と呼ばれているのには意味があるのです¹⁹。しかし、地上に閉じ込められたことによって、悪魔はもはや神の前で信徒を中傷することができなくなり(ユダ 1 章 9 節参照)、これは非常に大きな転換点となります。サタンが大昔に神に対して行った反乱の全行程は、今や全く新しい(そして最後の)段階に突入したのです。間違いを犯した信者に対する神の処遇に影響を与え、人間の自由意志に挑戦しようとするサタンへの神の寛容は、もはや限界に達しています。このことから、一般的な意味での寛容の終わりも推定することができます。エデンの園に侵入して以来、悪魔は人間の心を試し、ねじ伏せてきました。神はその計り知れない知恵によって、その全知全能のご計画の範囲内でサタンに人間を観察させ、試練を与えさせ、責めさせ、しかも滅ぼさないようにしておられました。一方では悪魔の告発に対する神の聴聞は終わり、他方では地上から信仰を破壊しようとする悪魔の試みに多くの抑制がなくなったことは、この大艱難期の最後の三年半の終わりに、そのような活動がすべて終了することを鮮明に証明しています。サタンのクーデターに対する神の裁き以来続いてきた天上の休戦は、今や終わりを告げたのです。悪魔とその従者たちは、キリストの再臨によって人類への干渉から完全に排除されますが、それに至るまでの間、信じる者達を地上から根絶やしにしようとしており、敵対行為は最終段階に入ります。この時点で、神の御計画は三つの明確な段階を経て機能していると思えることができることを思い出すとよいでしょう(「[サタンの反乱](#)」第 4 部参照)。この三段階のプロセスは、それぞれ第一段階、第二段階、第三段階の「裁き」「回復」「置き換え」からなり、本質的には、サタンとその反乱に完全に勝利するための神の計画を戦略用語で説明したものです。

第 I 段階: 形成期

永遠の勝利のための土台の「おおかた」が築かれる段階。

- 裁き I: 創世記<1 章 1 節と 2 節の間>のギャップの裁き: サタンとその天使に審判が下され、悪魔の本拠地であった原初の地球は荒廃し、最初の宇宙は闇に包まれる。
- 回復 I: 地球が居住可能な環境に復元される(再創造の 7 日間)。
- 置き換え I: 最初のアダムが誕生し、人類の始まりとなる(サタンとその天使にとっては最終的に置き換えられるための始まりとなる)。教会が置き換えのた

¹⁸ 「[サタンの反乱](#)」第 4 部参照: 艱難期の背景「[サタンの世界システム](#)」、V.5「[【サタンの】信者への非難](#)」を参照。

¹⁹ 「[サタンの反乱](#)」第 4 部: 艱難期の背景「[サタンの世界システム](#)」V.1、「[悪魔の名前](#)」参照。

めに召し出されることができるよう、最後のアダムであるイエス・キリストの十字架上の働きを通して、墮落後の人類の救いに必要な恵みが与えられます。

第Ⅱ段階：完成期

歴史的勝利によって永遠の目的を「さらに」実現していく段階。

- 裁きⅡ: 大艱難期: 悪魔の王国と地上で悪魔に仕える者に対する神の裁き。サタンとその使いらは天国から追放され、後に獄に入れられる。
- 回復Ⅱ: 千年王国: 地球は祝福された環境に回復される。
- 置き換えⅡ: 王であるキリストがサタンに代わり、事実上の地上の統治者となる。教会は復活して悪魔の手下どもと一対一の置き換えがなされる。

第Ⅲ段階：完結期

勝利の栄冠を、永遠の超越した祝福で飾る「究極の」段階。

- 裁きⅢ: 最後の審判: サタンとそれに従う天使は、不信心な人類とともに火の池に移される(大いなる白い御座の裁きの後)。
- 回復Ⅲ: 新しい天、新しい地、新しいエルサレムによって、比類のない永遠の完全な祝福の環境が提供される。
- 置き換えⅢ: 父なる神の降臨: キリストとともに、地上で永遠に支配される。教会は、二倍の数の至福千年時代信者によって補完される。

このように、大艱難期の開始とともに、私たちは神の御計画の第二段階、すなわち、獣とその人間に従う者たちとともに、サタンとその天使たちを裁く艱難の過程から始まる偉大な「主の日」の開始を目撃することになるのです。悪魔が投げ落とされることに、この裁きのプロセスの始まりを見ることができ、それはメシアの再臨に関連する一連の七つの裁きで終了します([本シリーズ第6部](#)参照)。

このことは、復活の第二陣、すなわち悪魔の墮天使どもの最初の置き換えとなる教会の完成にも関係しています。神が許容し用いた標準的な悪魔からの試練が終わり(大艱難期の間は、最も厳しい悪魔との直接的対決に取って代わられる)、アダムから再臨までの信者の一団である教会が完成したことを示しています(したがって、標準的な試練はその目的を果たしたことになります)。モーセとエリヤの後援による144,000人の宣教活動も大艱難期の開始とともに終わり、最後の三年半は伝道と真の教会の数を増やすための時間ではなく、信仰を公言していた多くの人々が背教に陥り、最後まで忠実だった多くの人々がイエスキリストのために殉教するので、耐久と精錬の時となるのです。

悪魔が自らの壮大な戦略の中で、艱難期と世界の支配者としての反キリストの登場を自らの計画の要として推進してきた一方で、(彼が天国から追放されるという形で、それほど遠回しではない形で予兆されていた)彼の完全かつ最終的な敗北は、皮肉にも、非常に現実的な意味で、このすべての神の基本的な規則の違反が必然的に引き起こす反作用の結果であるのです。反キリストを父とし、彼のために一國支配を確立し、イスラエルとすべての信者を地上から排除しようとするのは、神が決して許さなかったし、これからも許されない行動であることは明らかです。大艱難期は、サタンが天国から追放されることによって始まりますが、それは神の御計画の第二段階の始まりであり、そこでは、完全な王の完全な世界支配が、歴史上最も反神的な支配者の最も恐ろしい支配に取って代わり、それと直接並置されるのです。後者の比類なき恐怖と前者の比類なき祝福の対比は、神とイエス・キリストにおける神の勝利をよりいっそう讃えることになるでしょう。

殉教者らのあかし： [11 節](#)では、天の声が、大艱難期の主要な傾向を予見するこの美しい讚美歌を続けています。メシア王国の到来という神の究極的な勝利([10a 節](#))から始まり、敵を投げ落としたことについての合唱([10b 節](#))をもって勝利を強調し、そして大迫害の戦火の中で悪魔の倍加した努力によって試される地上の信仰者に目を向けています。反キリストの側につくことを拒否し、多くの艱難の圧力においても萎縮して大背教に陥らないこれらの勇敢な信者は、悪魔に打ち勝ったと言われています(ギリシャ語ではニカオ νικᾶω)。つまり、彼らは「小羊の血によって」(つまり、信仰によって義とされたので、悪魔の非難は神の正義の御座の前で受け入れられない)悪魔に「勝利した」のです(ギリシャ語の語源 nik-における中心概念;ニケ Nike を参照)。この勝利は信仰の勝利であり、あらゆる圧力や挑戦にもかかわらず、イエス・キリストへの信仰と忠誠を維持することです([ローマ 8 章 37 節](#), [12 章 21 節](#); [第一コリント 15 章 57 節](#); [第一ヨハネ 2 章 13-14 節](#)を参照)。

なぜなら、すべて神から生れた者は、[悪魔の]世に勝つ(ニカオ)からである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか。(第一ヨハネ 5 章 4-5 節)

上記の箇所では、私たちの主であるイエス・キリストを信じ、忠誠を誓い続けるだけでなく、この腐敗した世界の支配者に忠実に反抗し続けることによって、信仰の勝利が定義されていることがよくわかります。[黙示録 12 章 11 節](#)にある艱難期の信者は、「彼」、つまり地上に投げ落とされた告発者サタンに勝利すると言われています。艱難

期、特にその最後の三年半の間、悪魔とその暗黒の勢力と死闘を繰り広げる信仰の現実は、実際的によりいっそう目に見えるものとなるでしょう。

子たちよ。あなたがたは神から出た者であって、彼ら(すなわち、反キリストの先駆者たち、1-3 節参照)にうち勝った(ニカオ nikao)のである。あなたがたのうちにいますの(すなわち、御霊)は、世にある者(すなわち、反キリスト的な偽預言者に代表されるサタン、究極的には反キリスト自身)よりも大いなる者なのである。(第一ヨハネ 4 章 4 節)

[黙示録 12 章 11 節](#)の文脈で見られる勝ち抜く信仰のテーマは、聖書の他のどの箇所よりも黙示録に顕著に表れていますが、それには正当な理由があります。大艱難期とそれに伴う大迫害の間、信者が耐えなければならない試練のつぼのようなものは、他には決してないからです([ダニエル 12 章 1 節](#); [マタイ 24 章 21 節](#); [マルコ 13 章 19 節](#))。信仰生活は、最高の状況下でも真剣で困難な戦いですが、大艱難期の間は、私たちの「信仰の戦い」の現実と重要性は、かつてないほど高まるでしょう。サタンが最も抵抗する時期に勝利することが、最大の勝利となります。

勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう』。(黙示録 2 章 7 節)

勝利を得る者は、第二の死によって滅ぼされることはない』。(黙示録 2 章 11 節)

勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほかだれも知らない新しい名が書いてある』。(黙示録 2 章 17 節)

勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。(黙示録 2 章 26 節)

(2) また、私は、火の混じったガラスの海のようなものを見た。獣とその像と、その名の数字とに[打ち勝つために戦っている]者たちは、神である主の豎琴を手に、ガラスの海の上に立っていた。(英文からの訳 黙示録 15 章 2 節)

勝利を得る者は、これらのもの(すなわち、新しいエルサレムの栄光)を受

け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。(黙示録 21 章 7 節)

この文脈にある艱難に遭う信徒たちは、信仰に忠実であることによって、特に「小羊の血と(忠実に守られた)あかしのことばとによって」、告発者である「彼」に勝利すると言われています。 [黙示録 12 章 11 節](#)に記されている勝利の手段は、このように二つあり、それぞれ信仰の対象であるイエス・キリストの御姿と御業、そして信仰によって生み出されるもの、すなわち世における証しの業を表しています。この勝利の賛歌の最後の言葉である「彼らは自分の命を死に至るまで惜しかなかった」は、この時期の信仰に対する主な挑戦、すなわち大迫害を暗示しており、大艱難期の信仰の勝利には、肉体の命よりもイエス・キリストとの関係を大切にすることが絶対に必要であることをはっきりと示しています。その最後の三年半の間、多くの信者は、殉教によって命を失うという、私たちの主のための究極の証しをするよう求められるからです。また、その期間を生きるすべての人は、自分が信じていることのために、いつでも殉教させられるという脅威と共に生きなければならないからです(大迫害の日々の虐待に耐えなければならないことは言うまでもありません。)

喜びと災い： 大患難期全体を包括するこの賛美歌の最後の部分は、サタンが投げ落とされた結果、天における新しい現実と地上の新しい現実との極端な対比に関係しています。神の御前では、もはや敵対者がその卑劣な存在と中傷的な非難によって義人の集まりを悩ませることがなくなり、すべてが喜びと歓喜に満ち、悪魔が今や地上に追放されたという事実は、メシアの王国が到来する前兆なのです。この時、天界にいるすべての者は、時が本当に短いことを知り、まもなく到来する栄光の時を祝福された期待のうちに待ち望むことでしょう。

しかし地上では、状況は逆転しています。サタンもまた、今は自分の時間が短く、もはやどんな手段を用いることも、どんな規則も尊重する理由もないことを知っているのです。悪魔は怒りに燃えて、イスラエルとイエス・キリストにある忠実な人々に自分が投げ落とされたことの代償を払わせるために、あらゆる犠牲と努力を惜しみません。ですから、天が再臨の期待に燃えている間、地上はその時、悪魔の攻撃を受けて、歴史上かつてないほど苦悩することになるのです。大艱難期は地上に住むすべての人に影響を及ぼしますが、救われた者であれ救われていない者であれ、イスラエルの子孫に最も重くのしかかり、イエス・キリストを選び、どんな犠牲を払ってもイエス・キリストに忠実であろうと決心しているすべての人に影響を及ぼします。

IV. 龍は、イスラエルの信者たちを迫害する 黙示録 12 章 13-17 節

(13) 龍は、自分が地上に投げ落されたと知ると、男子を産んだ女を追いかけた。(14)しかし、女は自分の場所である荒野に飛んで行くために、大きなわしの二つの翼を与えられた。そしてそこでへびからのがれて、一年、二年、また、半年の間、養われることになっていた。(15)へびは女の後に水を川のように、口から吐き出して、女をおし流そうとした。(16)しかし、地は女を助けた。すなわち、地はその口を開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。(17)龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。(黙示録 12 章 13-17 節)

13 節から、大艱難期の最初の地上での出来事が書かれています。サタンによる神の民に対する最初の攻撃は、先に学んだ天の賛美歌(黙示録 12 章 11-12 節)の最後の箇所です。暗黙されているように、地上で最も集中しているユダヤ人信者、特にモーセとエリヤと 14 万 4 千人の働きに応えた人々、そしてその時イスラエル国内に住んでいる人に対する全面的な攻撃なのです。前にも述べたように、聖書は明確に述べてはいませんが、12 章で悪魔の怒りの対象として述べられているイスラエルに存在する新しい信仰のレムナント<残りの者たち>は、イスラエル国民の中から生じたのでも、彼らの大多数を占めるのでもないことはほとんど確実に言えます(ローマ 9 章 27 節; イザヤ 10 章 21-22 節参照)、144,000 人の働きによって(このシリーズの第 3 部 A で見たように、モーセとエリヤの働きによって彼らがエルサレムに引き寄せられて)世界の他の地域から集まるのです。

さらに上記の聖句は、ユダヤ人の先祖を持つ信者が現在のユダヤ国家に移住する傾向が、ユダヤ人特有の現象であることも示しています。バビロン以外の国の異邦人信者は、この新しいユダヤ人の残りの者たちを排除しようとするサタンの計画を神が挫折させた後、自国での迫害に直面します(大迫害の始まりを示す黙示録 12 章 17 節を参照)。現代の状況を知る限り、艱難期の前半に起こるであろうユダヤ人のイスラエルへの移民の波の規模を考えると、これまでユダヤ人以外の移民を特に歓迎してこなかったイスラエルが、モーセとエリヤの足元で学びたいと願う相当数の異邦人信者を受け入れる可能性は極めて低いように思われます(特に新参者が福音派キリスト者だった場合)。異邦人である私たちは、この事実を過度に嘆くべきではありません。私たち一人一人には、それぞれに与えられた賜物があり、使命の場があり、神によって定められ、意図され、力づけられた特定の奉仕の有用性があります。(第一コリント 12 章 4-6

[節](#))。たとえ多くの場合、それが激しい迫害と殉教をもたらすとしても、(また、そうであるからこそ、)私たちが自分の場所にとどまり、自分の国の人々に宣教し、証することは、明らかに神が私たちに意図しておられることなのです。

バビロンは特別なケースです。前にも述べたように、この激しい迫害の時期には、獣の原動力であるバビロンが比較的、安全な場所となることが聖書から読み取れます。ただし、安全性は相対的なものとして理解する必要があります。[\(黙示録 18 章 8 節参照\)](#)。バビロンが滅びる前の数日間、すべての信者に「バビロンから離れ去れ」という呼びかけがあります(これについては、このシリーズの第 5 部で詳しく述べます)。この事実自体が、多くの信者がまだバビロンの境界内に住み、その時点まで繁栄しているわけではないにしても、事実上生き延びていることを示唆しています。

黙示録のこの部分の詳細な釈義を始める前に、この 12 章に書かれているユダヤ人信者が荒野に逃れる直前に起こる一連の出来事を振り返っておくとよいでしょう。第 7 のラッパが吹き鳴らされ、大艱難期が始まる前に、私たちは<起こることになる>次のような事柄を確認してきました。

- ・反キリストが南部同盟に対する第二の作戦で完全な勝利を収める([ダニエル 11 章 29-30 節前半](#); [11 章 40-43 節](#))。
- ・反キリストとその軍隊、そして彼の帝国に対して、世界中に残っていたすべての組織的抵抗が崩壊する([黙示録 13 章 3-4 節](#))。
- ・第二次作戦の終わりにおける反キリストの最終目的であるエジプトの富の略奪([ダニエル 11 章 43 節](#); [エゼキエル 29-32 章参照](#))。
- ・反キリストに対する暗殺計画の失敗([ダニエル 11 章 30 節後半](#))。
- ・その後、反キリストは大きな軍隊を率いてイスラエルに戻る([ダニエル 11 章 30 節後半](#); [ルカ 21 章 20-24 節](#))。
- ・反キリストによるイスラエルとの条約の破棄、モーセとエリヤへの戦争([ダニエル 9 章 27 節](#); [11 章 30 節後半-31 節前半](#); [黙示録 11 章 1-13 節](#))。
- ・(霊的な)荒廃をもたらす忌まわしいものを建設、アンチキリストの神の宮で着座、自らを神と主張([ダニエル 11 章 31 節 b](#); [12 章 11 節](#); [マタイ 24 章 15-16 節](#); [マルコ](#)

[13 章 14 節; 2 テサロニケ 2 章 4 節](#)

- ・その父である悪魔を崇拜の対象とする新しい世界的な宗教を強制的に拡大する(黙示録 13 章; 下記 VI.1 節「反キリスト教的宗教とその世界的拡大」参照)。

天から追放された龍の反応:この時点で第七のラッパが鳴り、サタンとそこにいる天使の軍勢が天から追い出され、艱難期の間、地上に閉じ込められます。このように信仰を地上から排除し、その代わりに目に見える物理的な世界王国を建設して、その住人がサタンとその反キリストを普遍的に崇拜することによって、神の計画を挫折させようとするサタンの壮大な計画を最終的に実行しようとする上記の劇的な手順は、直ちに同じような劇的な結果をもたらします。それは天と神の前に出る機会を絶たれることであり、サタンがこの時点まで続けていた天へのアクセスを終了させます。²⁰ このすべての中に、神のご計画の実行と悪魔の対抗する策動がはっきりと見て取れます。サタンは自分の願望を実行に移そうとしている矢先に、地上に投げ出されましたが、それはサタンがその計画を実現するために取った行動(反キリストの誕生、一国支配の確立、神殿の中庭での荒廢の忌まわしいものの設置、神の神殿における着座は、彼とその仲間がこれまで活動を許されていた基本規則に対する明らかな違反です)のせいであることは間違いありません。そして、悪魔の地上荒らしの激化の影響は、史上最大の背教の波となり、まもなく信者への最大の迫害を引き起こすこととなりますが、これらの最も悲惨な出来事が、いかに神がずっと意図しておられたことの成就をもたらすのに役立つかが、まもなく明らかにされることとなります。それは、艱難期の最後の戦いの頂点にメシアが再臨し、神の敵をすべて倒し、残りの信者を救出し、イスラエル民族を解放し、キリストの千年王国統治の間、サタンとその従者を天からだけでなく地からも追い出して、光と正義の王国を建設するとき起こるのです。

最後に、この点では、龍であるサタンが天から追放された直後に起こる女への迫害の主演とみなされていますが、この迫害の地上の主体は悪魔ではなく、反キリストです。悪魔とその子の行動が一致していることは、聖書がこの二つを描写する際に見られる類似性からわかります。この聖句とその直後の 13 章冒頭の聖句を比較すると、龍と獣はともに「赤い」ものであり、ともに「七つの頭」を持ち、ともに「十本の角」を持っていることがわかります。この象徴の様々な側面については、以下の V.1 節で論じますが、悪魔と反キリストのそれぞれの計画と実行が完全に一致し、継ぎ目のないことが、この意図的な象徴の類似によって効果的に引き出されていることについては、これで十分で

²⁰ 教会の数が満ちることの神の計画にとっての重要性と、このプロセスを阻止しようとする悪魔の試みについては、[『サタンの反乱』の第 5 部、第 2 節「人類史における神の計画」と第 3 節「サタンの対抗戦略」](#)をご覧ください。

しょう。

悪魔は、地上での長い間の計画をついに達成しようとしている寸前に、天から追放されたことに苛立ち、その報復として女を追います。そして、前述のように、この文脈では、女は真のイスラエルを象徴していますが、その将来の時点におけるイスラエル国民の大多数ではなく、**信者**であるイスラエルを表していることを理解することが非常に重要です。(そしてこの信者のレムナントは間違いなく少数派でしょう。[ローマ 9 章 27 節](#); [イザヤ 10 章 21-22 節](#); [ヨエル 2 章 32 節](#); [ローマ 10 章 13 節](#) 参照)。これらは 144,000 人の証人とモーセとエリヤの働きの帰依者です。彼らは、艱難期の前半のユニークな伝道活動(このシリーズの 2B と 3A で取り上げています)に応じて、国々から集まったイエス・キリストを信じるユダヤ人たちなのです。この「女であるイスラエル」の信者が龍に追い出されると言われているのは、悪魔の目的が単に彼らをイスラエルの地から追い出すことではないことに注意すべきです。もしそれが可能であれば、悪魔の父からの命令の下、反キリストは、この時点でこのユダヤ人を滅ぼそうとします。しかし、世界中のイエス・キリストにある多くの兄弟姉妹は、実際このような殉教の運命を辿ることになるものの、この場合は、それに続く聖句に述べられているように、ただ神の介入によって彼らは救われるようになるのです。

鷲の翼：この寓話の象徴性にしがたって、女の救出は同様に暗喩的な言葉で表現され、「鷲の翼」は、脱出のための奇跡的な神の助けを表しています²¹。この救出(反キリストはパロの反型として機能します)の予型となる、主がイスラエルをパロから救い出す奇跡的な出来事においても、この喩えが同じように使われています。([申命記 32 章 11 節](#); [イザヤ 40 章 31 節](#) 参照)。

あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたことを見た。(出エジプト 19 章 4 節)

過去に主がイスラエルをパロから奇跡的に救い出し、荒野で支え、約束の地に安全に連れて行かれたように、今、主はイスラエルの信者達を反キリストの手から救い出し、大艱難期を通して荒野で支え、わたしたちのメシアが帰ってきて約束の地に千年王国を建国するまで支えてくださるのです。鷲の翼は、地上の問題を超えて雄大に舞い上がり、目の前の危険から素早く逃げ出すというイメージを鮮明に伝えています。時が来れば、主は女をドラマチックで奇跡的な方法で救出するので、黙示録のこの箇所

²¹ 勝利し、帰還するメシヤを表す「鷲のケルビム」([本シリーズの第 2 部 B、第 1 節](#)、「[四つの生き物](#)」を参照)と比較してください。鷲の言及はまた、主が再臨を「鷲の集まり」に例えたことを思い起こさせます。

は、このように意図的に、イスラエルの子らがエジプトから脱出し、パロの手から離れるという劇的で奇跡的な出エジプトになぞらえているのです。

1. 警告のしるし：解放には、躊躇のない従順さが必要です。聖書は、この迫害が間近に迫っていることを十分に示し、主が以下で預言された条件が満たされたら、ただちに迅速かつ即時の脱出が絶対必要であることを疑いの余地のないものとしています。最初のしるしは大地震で、モーセとエリヤが天に召された直後に起こります([黙示録 11 章 13 節](#))。このような激しい災害の後の動揺は、間違いなく信者の最初の出発を気づかないままにさせるでしょう。主ご自身が言及された第二のしるしも、同様に紛れもないものでしょう、それは、いわゆる「荒らす憎むべきもの」、つまり、神殿の中庭に設置される反キリストの像の建立です：

(15) 預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)、(16)そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。(17)屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりるな。(18)畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。(19)その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。(20)あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。(21)その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである。(マタイ 24 章 15-21 節参照：[ルカ 17 章 31-32 節](#))

(14)荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。(15)屋上にいる者は、下におりるな。また家から物を取り出そうとして内にはいるな。(16)畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。(17)その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。(18)この事が冬おこらぬように祈れ。(19)その日には、神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような患難が起るからである。(マルコ 13 章 14-19 節)

反キリストの忌まわしい偶像が神殿の中庭に見えるようになったら、町に残っている信者は遅れずに逃げなければなりません。そのとき、すぐに、急いで逃げなければならないので、上着や必需品を取りに行くために少し遅れただけでも、獣の網に捕まるかもしれません。さらに、この緊急出発は「一日限り」であり、その日が(移動の妨げになる)悪天候や(移動が人目につく)安息日でないことを祈るようと、関係する者たちに告げられています。この時点まで町に残っていた者は、龍とその反キリストの意図する

迫害に巻き込まれないためには、これ以上躊躇することなく出発せよという主の命令に厳格に従うことが絶対条件となります。エルサレムに残っていた信者たちは、迅速な対応によってのみ、この時、荒野に無事脱出することができるのです。

この迫害から救われる絶対的な最後のチャンスは、その時までエルサレムに留まっているユダヤ人信者の立場から語られているのです。反キリストが南方同盟を征服してエルサレムに戻り、モーセとエリヤを殺し、神殿の儀式を停止させた後、神殿の中庭に偶像崇拜の自分の像、いわゆる「荒らす憎むべきもの」(すなわち、「(物質的にも霊的にも)荒廃させるもの」、3部B第8節1参照)を建て、これがエルサレムの信者にとって安全に街を離れる最後の機会の合図となるのです。なぜなら、龍はそこを離れようとするユダヤ人信者たちを直ちに追跡し、留まることを選んだり、急ぐようにという主の命令を無視したりする者は、窮地に陥ることになるからです。

あなたがたのうち、だれがこの事に耳を傾けるだろうか、だれが心をもちいて後のためにこれを聞くだろうか。(イザヤ 42 章 23 節)

マタイとマルコの箇所は、エルサレムにいる信者の視点からこの問題を取り上げていますが、ルカ福音書では、主はエルサレムの郊外にいる信者を対象として、より早期の警告のしるしを与えています。

(20)エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたとさとりなさい。(21)そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。(エルサレムの)市中にいる者は、そこから出て行くがよい。また、いなかにいる者は市内にはいってはいけない。(22)それは、聖書にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ。(23)その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。地上には大きな苦難があり、この民には[大いなる]み怒りが臨み、(24)彼らはずるぎの刃に倒れ、また捕えられて諸国へ引きゆかれるであろう。そしてエルサレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられているであろう。(ルカ 21 章 20-24 節)

上記の軍隊は、獣の南方に対する第二次作戦の勝利の結末に、エジプトを略奪して帰ってきた反キリストの軍隊のことです。この第二次作戦の間、反キリストの軍隊は、マハディの軍隊の後方への奇襲的な海戦と関連して、初めてイスラエルに大挙して押し寄せることが予想されます。この時、イスラエルは手荒く扱われ、不愉快な思いをすると預言されていますが、これは来たるべき事態を確実に示しています([民数記 24 章](#))

[23-24 節](#))。しかし、反キリストの軍隊がイスラエルの地に戻り、エルサレムを「包囲する」のは、南の王が倒された後でなければなりません。第二次作戦の遂行中、彼らの動きはマハディの軍隊を打ち負かすことに集中されるからです。反キリストがその軍を北に進めるのは、その〈南方同盟の〉敗北の後であり、モーセとエリヤを排除して神殿に自ら着座するという明確な意図を持っているのです。このように、ルカとマタイとマルコにおける主の言葉には、信者が安全な山や砂漠に避難するためにイスラエルを脱出するための警告の期間の始まりと終わりの両方が与えられています。反キリストが最初にエルサレムを包囲することが逃亡の始まりであり、神殿の中庭に偶像礼拝の像を建てるのがその終わりです。その前だと、モーセとエリヤはまだ宣教しているので、そのような逃亡は時期尚早でしょう。しかし、この時期が終わる頃までエルサレムとイスラエルに残っている人々は、神の保護の下でユダヤ人の残りの信者が、安全な避難所に退避する機会を逸してしまうことでしょう。龍と獣の怒りとその後が始まる大迫害からの保護をのがすことになるでしょう。

この点に関する主の命令に注意深く耳を傾ける必要がある理由は、上記の節で十分に明らかにされています。このシリーズでは、艱難期、特に大艱難期が神の裁きによって特徴づけられることを以前に示しました(先に挙げた 1.6 の図表参照)。艱難期の後半、特にその終わりには、これらの裁きは、不信仰な世界に注がれる特別な神の怒りという形を取ります(上記の[ルカ 21 章 22 節](#)に言及されている「報復」)。信者はこれらの裁きの直接的な影響から守られることが期待できますが、それでも、逃げきった信者が導かれることになる保護された場所の避難生活は、ハルマゲドンの戦い、そして再臨という究極の怒りの審判の中心地であるイスラエルにおいてその暗黒の日々を過ごすことに比べれば、はるかに負担が少ないことは明らかです([黙示録 16 章 12-21 節](#), [6 章 12-17 節](#), [19 章 11-21 節](#)を参照)。第二に、この点に関してさらに重要なことは、以下に詳述するように、艱難期後半は、その決定的な出来事である大迫害(すなわち、艱難期の後半を特徴づけるものです。このとき、何らかの理由で主の命令に従って逃げるができなかったイスラエルの信者は、龍と獣が地上から信仰と忠実な人々を根絶しようとすることによって生じる苦しみに、ある程度は巻き込まれることになるのです。

それはキツテム(すなわち、西の「バビロン」)の船が、彼(すなわち、反キリスト)と共に攻撃し、[彼が勝利するように]なるからです。それから、彼は打ちのめされ[死んだように]なりますが、復活します。そして、彼は聖なる契約に対して憤り、[はるか南方からイスラエルに]帰るときに、事(すなわち、犠牲を終わらせ、忌まわしいものを設置し、神殿に自分の座を占める)を行うでしょう。彼は帰って行って、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう。(31)彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し(=モーセとエリヤの働きを終わ

らせ)、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。(32)彼は契約を破る者どもを、巧言をもってそそのかし、そむかせるが、自分の神を知る民は、堅く立って事を行います。(33)民のうちの賢い人々は、多くの人を悟りに至らせます。それでも、彼らはしばらくの間、やいばにかかり(=殉教)、火に焼かれ(=殉教に至る拷問)、捕われ(=投獄)、かすめられ(=財産没収)などして倒れます。(34)その倒れるとき、彼らは少しの助けを獲ます。また多くの人々が、巧言をもって彼らにくみするでしょう。(35)洞察のある者たちのうちの中から、終りの時まで、自分を練り、清め、白くするために倒れる者があるでしょう。終りはなお定まった時の来るまでこないからです。(英文訳 ダニエル 11 章 30-35 節)

適切な時期に逃げ遅れた者であれ、上記の節に示され暗示されているように獣の略奪の結果信者になった者であれ、イスラエルに住む信者へのこのような圧力と迫害は、異邦人支配の期間、つまり 42 ヶ月間の大艱難期が続き、主の再臨とハルマゲドンの戦いで反キリスト勢力が減ぼされるという勝利で終わります([ルカ 21 章 24 節](#)と[黙示録 11 章 2 節](#)比較)²²。

2. 飛んで行く<避難する>ための神よりの保護: イスラエルにいるユダヤ人信者が脱出の警告に従うと、この箇所、黙示録 12 章、そして聖書の他の箇所から、その脱出のために十分な神の備えがあることが分かります。第一に、獣がモーセとエリヤに打ち勝った後、悪魔とその息子は、イスラエルの領土にいる者を始めとして、世界中の真のキリスト教指導者を捕らえて始末することを最初の任務とすると考えてよいでしょう。教会の迫害は、反キリストがその地に住むユダヤ人信者を絶滅させようとした後に行われ、その試みの挫折によって龍が「怒り」、「女の残りの子ら」([黙示録 12 章 17 節](#))に目を向けるため、キリスト教指導者が次のターゲットになるのは当然でしょう。その際、モーセとエリヤの次に重要な指導者が 144,000 人であることは疑う余地もないでしょう。彼らは二人組となって世界中に分散するようになりますが、前に述べた理由から、イスラエルの地に不釣り合いなほど多くの人数がいるようになると考えられます(このシリーズの[第 2 部 B の V.「144,000 人の封印」](#)参照)。[黙示録 14 章 1-5 節](#)(大迫害と主を愛する者と主に敵対する者の相反する運命を主題とする 14 章全体の文脈)から、144,000 人が殉教者の第一陣であることが分かります。この点で、144,000 人はその時イスラエルにいる一般の信者の逃亡を「援護」する役割を果たし、隠れることも臆す

²² 「異邦人の時」とは、具体的には反キリストがエルサレムを支配する 42 ヶ月間のことで、この期間中、神殿の山全体が支配されるわけではありません。[「来たる艱難期: 第 3 部 A: 艱難期の始まり」](#)、[V「二人の証人」](#); [「来たる艱難期: 第 3 部 B: 反キリストとその王国、VIII「荒らす憎むべきもの」](#)参照。

ることも、逃げることも拒否し、使徒 7 章で殉教する前のステパノのように、迫害者に徹底した証をするでしょう(参照:[マタイ 10 章 17-20 節](#); [ルカ 21 章 12-15 節](#))。

第二に、すでに見たように、黙示録 12 章における出エジプトとの類似性は、聖霊によって意図的かつ明白に描かれているので、この「第二のパロ」の手から逃れることになる「第二の出エジプト」のユダヤ人信者への備えも同様に奇跡的で十分であると結論づけることができるでしょう。最初の出エジプトでは、強力で有能な指導者、具体的な神の導き、具体的な物質的支援、強力な神の保護など、民が必要とするものはすべて神が提供されました。というのも、最初のエジプト出国の命令はあまりにも突然で、民はパンを発酵させる時間さえありませんでした(それが過越の祭りで種無しのパンを記念する由来となりました。[出エジプト 12 章 11 節](#); [12 章 33-34 節](#)参照)、しかし、彼らはその咄嗟の出発であっても何の支障もなかったのです。今、私たちが理解しなければならないのは、主の「上着を取るために戻ってもいけない」という命令も、上着がないことが深刻な苦難をもたらすものではないということです。この命令に素直に従う者には、あらゆる物質的な必要が満たされ、提供されるのです。主がモーセとアロンに民を導かせ、雲と火の柱で昼夜を問わず案内させたように、獣の魔の手から逃れるために必要な指導と導きに不足はないと確信できます([詩篇 77 篇 20 節](#)を参照)。そして、最初の出エジプトに参加した人々の靴がすり減らず、足が腫れなかったように([申命記 8 章 4 節](#); [ネヘミヤ 9 章 21 節](#))、私たちの主によって、安全な脱出のために必要なさらに多くの物質的手段と個人の健康の強化は、忠実かつ奇跡的に、これらの逃れる民を危険から守る「鷲の翼」として与えられると確信できます。第一回目の脱出の際は敵の領地の中で主から注がれた神の恩恵によってエジプトを「略奪」したように([出エジプト 12 章 36 節](#); [3 章 21-23 節](#); [11 章 2-3 節](#)参照)、将来の信仰者が安全なところへ逃れる際に接するすべての人々から、同様の好意が与えられることを期待できます([イザヤ 21 章 13-15 節](#); [イザヤ 48 章 20-21 節](#)参照)。

第三に、この箇所と反キリストの勝利した軍隊が非武装の市民隊にもたらす明白な脅威から、これらの逃れようとする人々は超自然的な保護がなければ全く勝ち目がないことが明らかです。[黙示録 12 章 16 節](#)では、地が逃げる女を追いかける反キリストの軍勢を飲み込んで、女を助けると描写されていますが、これは最初の出エジプトでパロとその大軍を海が飲み込んで逃げるイスラエルを「助けた」こととの明らかな類似性を見てとることができます。どちらの場合も、主はイスラエルの子らのために超自然的な解放を実現させる方であることは明らかです。これから起こる後の場合においては、信者の脱出を攻撃するサタンの見えない軍勢に対して、天使の直接的な助けが見受けられます。この安全な退却のためにミカエルと彼の勝利した天使たちが果たす役割については、ダニエル書に具体的に言及されています。

その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時(大艱難期)があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者(現在と将来の信者)は皆救われます(英訳:脱出する)。(ダニエル 12 章 1 節)

この文脈は大艱難期の始まりですから、これらの出来事の経緯から、ミカエルがサタンを天国から追い出した後、直ちにイスラエルを保護することが分かります([黙示録 12 章 13 節](#)の舞台裏で行われていることが明らかです)。ミカエルとその軍隊は、悪魔の軍隊を打ち破った後、荒野に向かうユダヤ人信者たちにサタンが怒りをぶつけるのを防いで助けるのです。

3. **避難場所:** [黙示録 12 章 6 節](#)で、女は「荒野に」逃れ、そこに「神が用意された」場所があるとされました。この点は、[黙示録 12 章 14 節](#)に詳しく述べられています。荒野の聖域に、大艱難期の全期間を耐えるに十分な場所が用意されていることがわかります。これは、旧約聖書のいくつかの預言が部分的に成就するものです²³。

主はこう言われる。「民のうちから剣を免れて生き延びた者は、私がイスラエルを休ませるために来る時(すなわち再臨の時)に[先立って]、荒野で恵みを見出すだろう。」(英文直訳:エレミヤ 31 章 2 節)

それゆえ、見よ、わたしは彼女(すなわち、イスラエル)をいざなって、荒野に導いて行き、ねんごろに彼女に語ろう。(ホセア 2 章 14 節)([ホセア 2 章 15 節](#)は出エジプト記との比較参照)

共観福音書では、主が「山へ」逃げるようにと命じているが([マタイ 24 章 15 節](#); [マルコ 13 章 14 節](#); [ルカ 21 章 21 節](#))、これは矛盾するどころか、むしろ逃亡の経過について追加情報を提供してくれています。大まかに言えば、歴史的なイスラエルの土地はヨルダン渓谷の裂け目(聖書ではしばしばアラバと呼ばれる)で南北に分断されています。この広い谷の東側には、北はレバノンから南はアカバ湾まで、途切れることなく山々が連なり、地溝から中央台地へと上昇している。主の時代以前にも、この地域とその向こうの高原は、私たちが使う両方の意味で「荒野」、つまり乾燥した人を寄せ付

²³ また、主が再臨の際にイスラエルを再び集め、まず荒野に連れて行き、麦ともみ殻を分けるという出来事にも、この箇所が当てはまります([エゼキエル書 20 章 32-35 節,36-38 節](#)参照)このシリーズの第 6 部、セクション 1.6「イスラエルの再集結と浄化」を参照。

けない土地であり、同時にほとんど人が住んでいない場所でした。ですから、「山」と「荒野」は互いに排他的な言葉ではありません。しかし、黙示録 12 章やここで検討している関連箇所文脈に照らし合わせると、主の言葉から、ヨルダン渓谷の向こう側にある山々が、逃げ出す信者の最初の目的地であることが分かります。²⁴ この遠隔地の最初の安全が得られると、人間、天使、神の様々な手段によって、難民は集められ、神から与えられた指導、供給、保護の下に、さらに砂漠の聖域に連れて行かれ、完全に安全に艱難期の暗い日々を過ごすことになるかと考えてよいのです。

(40b) そして、[獣]は[南の同盟の]土地に侵入し、[それらに]みなぎり、[それらを]一掃し、(41) 美しい国(すなわち、イスラエル)へと進んで行くでしょう。さて、多くの土地が彼の前に倒れますが、エドム、モアブ、そして、アモンの子らの最初の[領土の一部](すなわち、エドムとモアブに隣接する歴史的アモンの南半分)は彼の支配から逃れるでしょう。(英文からの訳:ダニエル 11 章 40 節後半-41 節)

ダニエルのこの箇所は、逃亡の北限がエルサレムとほぼ平行になることを示しています(つまり、聖書のアンモンの北部は安全ではありません)。つまり、エルサレムからエリコまでの通路が最北の脱出ルートとなり、多くの逃れる者達は死海を横断するか、死海からネゲブを通して、聖書のモアブとエドムに向かう道路を利用して、より南側のルートを選択することが予想されます。残った者達がここまで来たら、「鷲の翼」、つまり彼らの旅に必要なすべての不特定の神の備えは、砂漠の南東に向かって、神が彼らのために「用意」した特定の場所まで連れていくでしょう([黙示録 12 章 6 節](#), [12 章 14 節](#))。

(13)アラビヤについての託宣。デダンびとの隊商よ、あなたがたはアラビヤの林にやどる。(14)テマの地に住む民よ、水を携えて、かわいた者を迎え、パンをもって、逃げのがれた者を迎えよ。(15)彼らはずるぎを避け、抜いたづるぎを避け、張った弓を避け、また激しい戦いを避けて、逃げてきたからである。(イザヤ 21 章 13-15 節)

デダンとテマは、アラビア砂漠の数百マイル離れたところにある集落です。北のドマ([イザヤ 21 章 11-12 節](#), [イザヤ 42 章 11 節](#)参照)と共に、エドムの最東端の境界を構成しています([エゼキエル 25 章 13 節](#)参照)。したがって、避難所の一般的な領域は、

²⁴ [ルカ 21 章 21 節](#)で、主がユダヤの丘の真ん中に位置するエルサレムに入らないように命じていることを比較してみましょう。これは、これらの丘が「山」を意味しているのではないことを示すものです。

少なくとも 2～3 万平方マイルの平行四辺形で、北はエリコの反対側の山から、南はネゲブ中央部から、南東方向にアラビア砂漠まで 200～400 マイル(あるいはもっと遠いかもかもしれません)伸びる領域と仮定することができます。これは聖書のケダルのおおよその位置です([イザヤ 42 章 11 節](#); 参照. [イザヤ 21 章 13-17 節](#))。

4. 荒野における神の備え: 出エジプトの時、主は天からマナを、固い岩から水を与えられたように、主は艱難期の逃れた民の必要を奇跡的に満たしてください。

(18)「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、また、いにしへのことを考えてはならない。(19)見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる。(20)野の獣はわたしをあがめ、山犬および、だちようもわたしをあがめる。わたしが荒野に水をいだし、さばくに川を流れさせて、わたしの選んだ民に飲ませるからだ。(21)この民は、わが誉を述べさせるためにわたしが自分のために造ったものである。(イザヤ 43 章 18-21 節)

上記のイザヤ書の節([43 章 16-17 節](#)参照)は出エジプト記と比較されていますが、砂漠での四十年の代わりに、この信者たちはわずか三年半を耐えて、主と私たちの輝かしい再臨の時に復活することになるのです。以前の世代は、主が忍耐を失うまで、主を「十回」試みましたが([民数記 14 章 22-23 節](#))、これらの信者は、本当に「地の塩」となり、主の言葉によって困難から離れ、艱難期の最も暗い段階を通して主によって準備された場所に完全に安全かつ完璧な神の備えの下に留まり、「蛇の前から離れて」安全に守られます(すなわち、悪魔から:[黙示録 12 章 14 節](#))から遠ざけられ、獣とその勢力から守られ、苦難の時がついに終わるのです([イザヤ 40 章 3-4 節](#)を参照:エリヤの隠れていた年月とエジプトにおける私たちの主の幼児期を参照のこと)。

さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない(すなわち、信者への迫害が罰せられる)([イザヤ 26 章 20-21 節](#)) [参照:[第二ペテロ 3 章 10 節](#)後半]。

地が水を飲み干すこと : ユダヤ人の逃亡者を追い詰める任務を負った反キリストの軍隊の破壊を象徴するこの言葉は、聖書の他の箇所でも明確に使われており、またある程度は類似しています。例えば、[ダニエル 9 章 26 節](#)では、軍隊が洪水の水のよう

に散るというイメージが見られますが、この文脈では、ハルマゲドンに言及しています(同じヘブル語の単語、シテフ、**טש**は、[ダニエル 11 章 26 節](#)でも同じように使われています;[ダニエル 11 章 22 節](#), [11 章 40 節](#); [ナホム 1 章 8 節](#); [イザヤ 8 章 7-8 節](#), [28 章 15-17, 18-20, 21-22 節](#), を参照してください)。いずれの場合も、洪水の水は印象的で勢いがありますが、送られた目的を達成することなく、無に帰してしまいます。例えば、コラとその反抗的な信者を大地が飲み込んだり([民数記 16 章 30 節](#))、シセラの軍と「星が戦った」のは、カナン人の戦車部隊を妨げた豪雨という形で神の介入を示唆します([士師 5 章 20-21 節](#))。しかし、やはり、出エジプト記が最もよく類似しています。イスラエルの子らがシナイに退却した時、パロの軍隊はもちろん紅海で溺れました。この文脈では、反キリストの軍隊は大地に「飲み込まれる」のですが、退却するイスラエルの子供たちにとって脅威となるものは奇跡的に取り除かれるのです。「地が女を助けた」という事実以外に、これらの勢力がどのように滅びるかは詳しく書かれていませんが、文脈上、主の手によって完全に滅ぼされることが明らかであると言えるでしょう。このような状況下で、サタンと獣がこの時点で追跡をやめた理由は容易に理解できます。新しく獲得した世界帝国を強化する必要があったため、エジプトに勝利したばかりの大勢の精鋭部隊を失い、簡単に交代できないことは、彼らがすぐに繰り返したくないことであることは確かです。悪魔とその反キリストがこの愚行を繰り返すのは、ハルマゲドンの戦いの時であり、その時は、帰ってきたメシアと戦うために全力を結集する最も壮大なスケールとなるでしょう([詩編 2](#))。

龍による女の残りの子らに対する戦い: [黙示録 12 章 17 節](#)のこの預言は、大艱難期の特徴である「大迫害」の始まりを意味します。「女」、つまりイスラエルの残りの信仰ある人々を滅ぼそうとして憤慨し、挫折したサタンである龍は、「女の残りの子」、特に「神の戒めを守り、イエスへの証を保っている人々」に注意を向けさせます。なぜなら、彼らは聖化(すなわち、神の戒めを守ること)についても、生産(すなわち、イエス・キリストを証すること)についても神の御心に従っており、これらは私たちの主を信じ、忠実である人々の二つの特徴であるからです。この点に関する悪魔の努力は、[黙示録 12 章 17 節](#)に、イエス・キリストを信じる者たちに対する「戦い」と表現されていますが、その困難な時代に悪魔の怒りの対象となりうる私たちにとって、大迫害が何をもたらすかをこれ以上短く表現したものはないでしょう。伝統的な用語で言えば、この「戦い」は完全に一方的なものです。なぜなら、私たち信者は、父の命令で私たちを滅ぼそうとする獣に対抗するために、積極的な手段を用いることはほとんど許されないからです。私たちの武器は信仰と忍耐であり、私たちの目的は、死に至るまであらゆることに忠実に耐えることを通して、主のために最大の栄光を得ることです。この原則を理解することは重要です。なぜなら、私たちはこの問題の両側で、抵抗するよう求める声と妥協するよう求める声の両極端に対処しなければならず、どちらかの誤ったアプローチに屈するわけ

にはいかないからです。私たちは、死と殉教によってであろうと、主の時宜を得た再臨によってであろうと、「命の書に名をしるされた者は皆救われる」([ダニエル 12 章 1 節](#))ことを慰めとしなければならないのです。

V. 海から出た獣：黙示録 12 章 18 節-13 章 3 節

(12:18) そして、竜は海辺の砂の上に立った。(13:1) また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々な名があった。(2) 私が見たその獣は豹に似ていて頭は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。(3) その頭のうちの一つは打たれて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。全地は驚いて、その獣に従い、(新改訳IV12 章 18 節-13 章 3 節)

上記の聖句は、本シリーズの第 3 部 B で反キリストについて考察した際に、獣の初期の経歴と性格への適用について扱ったものです。ここでは、まず、大艱難期の始まりの時系列に沿ったこの箇所幅広い聖書的象徴性、次に、南の同盟を打ち破り、エルサレムの神殿に即位した後の反キリストの権力強化に対するこの箇所の意味について考察します。

1. 海から出た獣の聖書的シンボル

女イスラエルとその敵である龍サタンの寓話は、竜が海から獣を呼び出すことで一応の決着を見ます。この出来事によって、寓話が転換され、それまでの艱難の出来事が象徴的に圧縮され、残りの三年半がより厳密に時系列的に扱われるようになります。上の節では、黙示録の本文で初めて、獣が艱難の出来事に関与していることが示されています。悪魔によるこの象徴的な「召喚」の直後、反キリストの行動が地上で起こるすべての悪の焦点となります(反キリストに対抗し、最終的に彼とその従者を滅ぼす天の行動と裁きとは全く対照的です)。簡単に言えば、この聖句は、獣とその世界的支配に私たちの注意を向けさせ、その行動は、艱難期の恐怖の中でも最も重要な「大迫害」、つまり大艱難を「大いなるもの」(予想やそれまでの人間の経験を超えた恐ろしいものという意味で)として際立たせるものです。寓話では、龍は女を滅ぼすことができなかったことに対する怒りと欲求不満のために、女の残りの子らと戦いをしようとしています([黙示録 12 章 17 節](#))。ですから、龍が獣を呼び出すとき、信者を迫害することを第一

に考えていることは明らかです(この結論は、[黙示録 13 章 7-10 節](#)で聖徒に対してすぐに行われる「戦い」によって再確認されています)。サタンが反キリストの一国支配を確立する第一の目的は、このように、信仰と忠実な人々を地上から排除することなのです。最後に、もともと神の被造物の中で最高位であり、おそらく最も知的であったサタンが、そのような計画を挫折させる神の能力を約 6000 年間経験した後でも、信じる人類をすべて滅ぼすというむなしい希望を抱いていることは、傲慢さの盲点をよく表しているのです。

海から甦る獣：獣が竜(サタンの代表)によって海から呼び出されたという事実は、12 章の寓話がここで続いていること、そして、この箇所にかかれているのは文字通りの記述ではなく、象徴的な記述であることを決定的に示しています。世界の海について個人的にどう思うかは別として、聖書の象徴体系の中で、海は一般的に死や冥界と同一視され、決して肯定的なものではないことは否定できません([創世記 1 章 2 節](#); [ヨブ 26 章 5-6 節](#); [イザヤ 27 章 1 節](#), [51 章 9-10 節](#); [ダニエル 7 章 2-3 節](#); [ルカ 8 章 31 節](#); [第二ペテロ 2 章 4 節](#); [ユダ 6 節](#); [黙示録 9 章 1-11 節](#), [17 章 8 節](#), [20 章 1-3 節](#), [21 章 1 節](#))²⁵。聖書の象徴の中で、海、深淵、死、シェオルと黄泉は本質的に同義です(深淵から獣が出てくる [17 章 8 節](#)を参照)。したがって、海からの獣の出現は、死からの上昇を意味し、より具体的には、悪を象徴する場所からの上昇を意味する。これは二重の意味で、復活した獣のローマ帝国と、個人的な獣である反キリストの両方に等しく当てはまり、それぞれ別の形で、ごく短い間であっても、最も恐ろしい悪と荒廃を永続させるための新しい命が与えられているのです。

ダニエルは述べて言った、「わたしは夜の幻のうちに見た。見よ、天の四方からの風が大海をかきたてると、四つの大きな獣が海からあがってきた。その形は、おのおの異なり、(ダニエル 7 章 2-3 節)

ダニエルがこの節で描写した四つの獣のうち、最後の獣はもちろんローマです([ダニエル 7 章 7 節](#))。そして、歴史上のローマだけでなく、「小さな角」、すなわち反キリストの支配下にある復活したローマも含まれます([ダニエル 7 章 8 節](#))。このように、獣を呼び出す龍のイメージは、悪の一世界帝国の建設とその皇帝の権能付与という点で、反キリストの支配の責任者がサタンであることを示すものです([黙示録 13 章 2 節](#)後半参照)。天は神の場所であり、地は人類の歴史の多くを説明する神と悪魔の対立が繰り広げられる場所なので、悪魔と反キリストの象徴的領域としての海(またはアビス)の

²⁵ この点については、[『悪魔の反乱』第2部の II.3 節「創世記の空白期、海」](#)で網羅しているので、ここでは詳細を繰り返しません

姿はより鮮明であると言えるでしょう。そして、この象徴的な領域も、メシアが再臨するときには、メシアの足下に置かれることになる(再臨を予言する天から降りてくる天使が、片足を海の上に、片足を地の上に置いているのを参照。[黙示録 10 章 1-3 節](#))。サタンの象徴的な領域として、またあらゆる種類の極悪非道な怪物のいる場所としての海([ヨブ 3 章 8 節](#), [9 章 13 節](#), [26 章 12-13 節](#), [41 章 1-34 節](#); [詩篇 74 篇 12-14 節](#), [87 篇 4 節](#), [89 篇 9-10 節](#); [イザヤ 27 章 1 節](#), [51 章 9-10 節](#); [アモス 9 章 3 節](#))から人類史上最も恐ろしい悪魔の獣、反キリストが出現しても不思議はないでしょう。

この聖句、[黙示録 13 章 1-3 節](#)における獣の具体的な描写は、本シリーズの前の回(第 3 部 B:「反キリスト」)で反キリストについて十分に説明したとおりです。ここでは、この箇所に関して、そこに書かれている詳細の解釈を思い起こすだけで十分でしょう。

- ・[海](#): 獣の邪悪な起源を示唆し、帝国とその皇帝の死からの蘇生を表している。
- ・[七つの頭](#): 七つの頭は主に、復活したローマの七人の支配者で、反キリストが台頭した当初から同盟を結んでいたことを表している。[黙示録 17 章 9-11 節](#)では、七つの頭は二次的な象徴的意味も持っていることがわかる。それは、七つの頭は元のローマの六人の皇帝を表し、反キリストは復活したローマの七番目の皇帝であることです。七つの頭の第一の解釈では、反キリストは「八番目」([黙示録 17 章 11 節前半](#);すなわち、彼も「頭」ですが、彼自身の王国の「主」であり、主要な「頭」)、七つの頭の第二の解釈では、反キリストは「七人の一人」([黙示録 17 章 11 節後半](#);すなわち、ジュリオ＝クラウディ家の六番目で最後の皇帝ネロ、紀元 69 年に権力から失墜した後が生じる次の有力皇帝)である。
- ・[王冠を持つ 10 本の角](#): そのうちの三人は密かに反キリストを支持し、艱難時代の中頃に南方同盟が敗北した後に、復活したローマの王国の一部となる。
- ・[七つの頭の上にある\(単一の\)冒瀆的な名前](#): 第 3 部 B で見たように、「冒瀆の名」とは、七つの頭に分散して書かれた七文字のギリシャ語 Χ ρ ι σ τ ο ς(すなわち「キリスト」)であり、反キリストが、メシアとしての地位を冒瀆し偽って主張している。七つの頭部に書かれているのは、獣が「キリスト」であるという偽りの主張を受け入れ、広めることに、獣が全面的に加担していることを示している。
- ・[豹に似ている](#): [ダニエル 7 章 6 節](#)で豹が翼を持つことから、速さだけでなく、裏切りや凶暴性も示されている。獣は、南で勝利した後、抵抗された場合、非常に速いスピードと無慈悲な力で一国支配を強化する。(ダニエル書の)四つの翼は、おそら

くアレキサンダーの帝国の四つの象限を表し、その延長として、世界の四つの象限と反キリストの世界支配への迅速な昇格に当てはめることができる。

・熊のような足：[ダニエル 7 章 5 節](#)の熊はペルシャ帝国のことで、その巨大な動員力によって熊のように引き裂く力を持ち、ここでの熊の足は獣の帝国が展開する軍事力の巨大さを表している。

・ライオンのような口：[ダニエル 7 章 4 節](#)の翼のあるライオンは、ネブカドネザルとそのバビロン帝国のライオンのような「噛みつき」を指しています。したがって、ここでのライオンの口（複数）は、獣が世界支配を強化する際の恐ろしい攻撃力を適切に表現しています。

・致命的な傷は奇跡的に癒やされたように見える：獣の頭の致命傷は、ローマの復活と反キリストの蘇生を意味する。新ローマは多くの重要な点で歴史的ローマとは異なり、反キリストは生き返ったように見えるだけだが、これらの一見「奇跡」と見えることに世界は驚かされる。傷口が一つの頭にあるという事実は、その外傷を反キリストに個人化することができると同時に、艱難期のこの時点で、獣は復活したローマ帝国の元の七王国のうちの一國、すなわち主にイスラエルと同一視され、神殿に座を占め、自分を神と宣言していることから、今後その本拠地となるであろうことを示しているに過ぎない。最後に、獣自身について言えば、「頭に」傷があるという事実は、神が獣に最終的な裁きを下す([創世記 3 章 15 節](#))ことを明確に予見しており、[創世記 3 章 15 節](#)の予言を覚え、信じるすべての人のために、これはキリストではなく、反キリストであることを示している。

2. 獣の王国：ヨハネの黙示録 13 章 2 節後半-3 節

[黙示録 13 章 2 節](#)によれば、大艱難期の間、悪魔は反キリストに、アダムの墮落以来今現在も限定的ではあるが、サタンが支配している諸国民に対する「権力、王座、大いなる権威」を授けます。[\(ルカ 4 章 5-7 節; 参照: マタイ 4 章 9 節\)](#)。真のメシア、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストは、再臨されるとき、祝福と正義と繁栄の王国において、千年間世界を支配されるでしょう。千年王国が終わるとき、新しいエルサレムが天から降りてきて永遠の状態が始まり、父なる神に「王国を渡される」のです([第一コリント 15 章 24-28 節; 黙示録 21 章 1 節](#))。これとは対照的に、獣の世界支配は、人類史上最も厳しい呪い、不正、窮乏によって特徴づけられ、真のメシアの再臨によって、ごく短期間で突然に終結するのです。こうして反キリストは、悪魔がキリストに申し

出て主がきっぱりと拒否し([マタイ 4 章 10 節](#); [ルカ 4 章 8 節](#))、その結果、真のキリストが支配する世界と、偽メシアである反キリストの支配下にある世界との違いがはっきりと証明されるのです。

私たちの知る限り、悪魔を父として常に一心同体であった獣が、この時点で悪魔に憑依されるかどうかは未解決の問題です。聖書は明確には述べていませんが、天から地上に追放されたサタンが、この時点で獣とその王国にかつてないほどの力を与え、「力と王座と大きな権威を与える」([黙示録 13 章 2 節](#)後半)までになることは十分明らかで、聖書の描くところによると、悪魔とその反キリストが完全に一致した意思を持っていることを強調しているのです(参照。[黙示録 16 章 13-14 節](#))。さらに、龍が海から獣を「呼び出す」ことは、かなりの支配力を示しているようです²⁶。いずれにしても不信仰な世界は、この二つの間に大きな区別がなく、反キリストをメシアとし、悪魔を神として崇拝することは確かです([第二テサロニケ 2 章 4 節](#), [黙示録 13 章 4 節](#), [13 章 11-17 節](#), 参照。[ダニエル 11 章 38-39 節](#))。獣が世界全体から驚嘆と畏怖の念を持たれることは、南方同盟を驚異的に敗北させた後、世界に対する支配権を急速に強化することを少なからず説明するものです。あらゆる反対勢力が消失する時、反キリストが以前から持っていたカリスマ性と成功は、指数関数的に拡大するのです。世界中の不信仰者の目には、この「神」のような人物への抵抗は愚かなことに映り、反キリストが世界の残りの王国を占領することは子供の手をひねるようなものに思えるでしょう。

その角(=「小さな角」、反キリスト)はまた真理を地に投げうち、ほしいままにふるまって、みずから栄えた。 (ダニエル 8 章 12 節後半)

その(反キリストの)勢力は盛んであって、恐ろしい破壊をなし、そのなすところ成功して…(ダニエル 8 章 24 節前半)

[その期間]この王(反キリスト)は、**その心のままに事をおこない、すべての神を越えて、自分を高くし、自分を大いにし、神々の神たる者にむかって、驚くべき事を語り、憤りのやむ時まで栄えるでしょう。**これは定められた事が成就するからです。(ダニエル 11 章 36 節)

…そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、

²⁶ 反キリストについて述べている[創世記 49 章 17 節](#)が、サタンについて述べている[創世記 3 章 15 節](#)を比較のこと。パート 3B で指摘した、反キリストと悪魔に取り付かれたユダ(創世記 3 の蛇も同様にサタンに取り付かれている)との聖書における類似点も考慮してください。

「だれが、この獣に匹敵し得ようか。**だれが、これと戦うことができようか**」。(黙示録 13 章 3 節後半-4 節)

聖書は、南方同盟を破った後の反キリストの世界支配の正確な経過について詳しく述べてはいませんが、上記の聖句が明らかにしているように、この支配は完全なものとなるでしょう。反キリスト的世界的な王国の建設にこれ以上真剣に抵抗するものがあれば、バビロンでの最初の権力獲得と復活したローマを支配するために用いられたのと同じ種類の手法を、無慈悲に実施することが予想されます。これまで見てきたように、ダニエル書 8 章と 11 章には、反キリストの欺瞞と陰謀に関する記述が多く、そこに示されている記述に、過去に獣が有利に働いた非対称戦の継続(つまり、獣の支配)を見るのに、大きな飛躍は必要ありません。(テロリズム、潜入、第五列隊(スパイ)、技術的妨害工作、狡猾な裏取引、奇襲、非道な手段、契約違反および不意を突くこと、戦時国際法違反、指導部を攻撃して国家と軍の指揮構造を無力化するなど)重要なことに、**この時**、反キリストは、世界に残る他の軍事力に対して圧倒的な優位性を持ち、世界の歴史上前例のない規模となる世界規模の軍事力を展開することができるということを念頭に置くべきです。さらに、獣が七つの王国を支配する際に成功の基盤となった国際的な運動は、この期間を通じて活発に行われ、南同盟に完全勝利した後に必然的な追従効果によって、世界中で大きく拡大することが予想されます。そして、結局、彼の「復活」のように見えることの結果として、全世界の(不信仰の)人々が彼を崇拝し([黙示録 13 章 12 節](#), [13 章 16 節](#), [16 章 9 節](#), [16 章 11 節](#); 参照. [黙示録 14 章 8 節](#), [17 章 18 節](#))、「東方の王」さえハルマゲドンに集まれという指令に従うようになります([黙示録 16 章 12-14 節](#))。このように、大艱難期の間、悪魔のメシアである獣の王国は、真のメシアの来たる王国に対するほとんど完璧な対照を形成し、それによって、神のご計画の成就によって、すぐに征服され、取って代わられる運命にあります([ローマ 9 章 17 節](#)を参照)。

(9)わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者(すなわち、父)が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。(10)彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。(11)わたしは、その角(すなわち反キリスト)の語る大いなる言葉の音がするので見ていたが、わたしが見ている間にその獣は殺され、そのからだはそこなわれて、燃える火に投げ入れられた。(12)その他の獣はその主権を奪われたが、その命は、時と季節の来るまで延ばされた。(13)わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の

子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者(すなわち、父)のもとに来ると、その前に導かれた。(14)彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることなく、その国は滅びることがない。(ダニエル 7 章 9-14 節)

その祝福された日まで、大艱難期の地上での生活は恐ろしいものとなるでしょう。信者にとって、後述の第 VII の主題である大迫害が、最後の 3 年半がこれほどまでに恐ろしいものとなる主な理由となるでしょう。しかし、全世界の人々は、程度の差こそあれ、反キリストが人類全体にその意志を押し付け、その支配を確固たるものとするために策定した極悪非道な政策の実施に、何らかの形で直面せざるをえなくなるのです。

このシリーズの [第 2 部 B](#) では、黙示録第 6 章の最初の六つの封印が、艱難期の独特の動向を示し、預言していることを見ました。最初の四つは艱難期の前半に始まり、前半全体を特徴づけ、第五と第六の封印は後半の三年半の期間の、大艱難期を指しています(第七の封印が解かれることは、全体としての艱難期の開始を意味します)。上記のように、この最後の三年半の恐ろしさを説明する上で、主の全世界的な怒りと神の不興の裁きは軽視できませんが(イザヤ 24 章参照)、反キリストの世界支配は、この神の裁きの流れと並行する悪魔の動向であり、この時代の苦難の激化の大部分を占めます。獣の世界支配の特徴は、悪魔崇拜という極めて抑圧的で強制的な世界宗教の設立と大迫害の実施に加えて、艱難期前半に見られた四つの封印の傾向が並行し、激化することが予想されます。

艱難期前半(四つの主要な傾向):

1. 白い馬:反キリストの征服:戦争と侵略の傾向。
2. 赤い馬:内乱:不法と政治的な不安定化の傾向。
3. 黒い馬:経済的制約:経済の混乱と飢きんの傾向。
4. 青白い馬:加速する死亡率:疫病と死の猛威の傾向。

大艱難期(2 大イベント):

5. 殉教者:大迫害(反キリストとその宗教による信者の迫害)。

6. 裁き:再臨(その前段階と付随する裁きを伴う)。

聖書は、大艱難期の間、最初の四つの封印の傾向の背後にある基本的な力学が大きく変化することを示唆していませんが、反キリストの帝国がこの時期に全世界をある程度支配するという事実は、これらの傾向が獣の権力強化の後に多少変化して現れる可能性が高いということを意味しています。獣の世界王国の成立により、1) 征服の傾向が冷酷な搾取と統合の傾向へ、2) 市民の不和の傾向が強制的な服従の傾向へ、3) 経済的抑制の傾向も同様に、状況によるというよりは政策や専断によるものとなる、4) 死亡率の加速化の傾向は、より一貫してすべて反キリストの抑制政策の直接的結果によるものとなる、と予想できます。大艱難期のこの側面に適用される聖句は、この評価と一致しています。

1. 政治的な搾取と統合(第一の封印):

(39) そして、あなた(ネブカドネザル)の後に、あなたよりも劣る王国が興り、その後第三の王国が興り、全地を支配する青銅の王国が現れます。(40) その後、第四の王国(すなわち復活したローマ)が現れ、鉄がすべてを打ち砕いて粉々にするように、鉄のように強くなります。そして、すべてを打ち砕く鉄のように、この第四の王国は、これらすべての王国を打ち砕きます。(41) その足と足指の一部が陶器の粘土で、一部が鉄であるのを見たように、それは分裂した王国となるでしょう。しかし、鉄が陶器の粘土と結びついているのを見ましたが、それは鉄の強さの一部を持つでしょう。(42) その足の指の一部が鉄で一部が粘土であることは、その王国(すなわち、七つの王国)の(字義どおりでは「終わりの」)ある部分は強力ですが、他の部分(すなわち、三つの王国)はもろいでしょう。(43) そして、鉄が粘土と結合しているのを見たように、人の子孫において、これらの(十の小王国)を結合しようとする(すなわち、その民を混合させようとする)試みがあるでしょう。しかし、鉄が粘土と結合できないように、彼らは互いに結合することはないでしょう。(英文からの訳:[ダニエル 2 章 39-43 節](#))

この箇所は、主に復活したローマを扱っていますが、十王国の中で試みられた統一方法が、大なり小なり世界中で試みられることも示唆しています(おそらく同様に疑わしい結果をもたらすでしょう)。その理由は、悪魔とその反キリストは、現時点ではあらゆる権力を有しているにもかかわらず、バベルでの民族の分裂の際に、神ご自身が植え付けられた人間の言語様式と民族主義への固有の傾向を変えることができないからで

す([創世記 11 章 1-9 節](#))。しかし、悪魔と獣が政治的に均質化された一つの世界「バベル」を創り出そうとする試みが引き起こす苦痛と苦しみを過小評価すべきではありません。さらに、白馬の騎士が「征服しに出て行き、征服した」([黙示録 6 章 2 節](#)のギリシヤ語)ように、反キリストは、たとえ最終的には失敗しても、最初の努力である程度の成功を収めることが予想されます。

2. 社会の均質化(第二の封印):

彼(反キリスト)は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒(すなわち、信者)はひと時と、ふた時と、半時の間(すなわち、大艱難期の間)、彼の手にわたされる。(ダニエル 7 章 25 節)

赤い馬に象徴される第二の大きな艱難期の動向は、市民の不和を生み出すことによって、地上から「社会の平和を奪う」ことです。第一の封印の動向が、外部からの征服から内部への強制と支配へと変化したように、この第二の動向も同様に変化し、反キリストの努力は、政治的機会を作り出すための対立の煽りから、支配領域の強制的均質化へと切り替わります。上記の[ダニエル 7 章 25 節](#)の各要素の組み合わせから分かるように、反キリストの「時と律法を変える」ことの大部分は、悪魔の宗教を世界に強制的に押し付け、信者を迫害することに直結します。しかし、人間の心に染み付いた神の法則を完全に根絶するという獣の本質的な目標は、上から押し付けられる厳格な手法や政策にもかかわらず、成功することはできません。神の基本的なルールは、人類の歴史における悪魔の活動を制限するものであり、御子イエス・キリストという神を選ぶか、あるいは神に逆らうことを選ぶかという各個人の選択権を維持することをその本質的な目的としているのです。それにもかかわらず、大迫害の過程で、真理の福音が利用可能であることと、その真理を通してイエスに忠実に従うことが、これまでにないほど、悪魔と獣によって攻撃されることになり、この本質的な原則を根絶するほどに迫るでしょう。イザヤは、人類がこの時「とこしえの契約を破る」([イザヤ 24 章 5 節](#))と預言して、この展開を説明しています。これは、福音の真理を聞いたり受け取ったり、御言葉で成長する機会が、前例のないほど大幅に除去されることを意味しています([第二ペテロ 2 章 21 節](#)を参照)。

唯一の世界的な前例は、ニムロデがバベルの塔を建設する際に、同様に排他的な普遍的宗教を組織したときに得られた状況です([創世記 11 章 1-9 節](#))²⁷。過去の歴史

がそうであったように、反キリストの宗教とその宗教が引き起こす大迫害においても、神はこのようなことが永遠に続くことを許さないでしょう。また、信仰が完全にこの世から消え去るような事態にまで至ることも許さないでしょう。この事実だけでも、これらのことを予期したり経験したりする信仰者は励まされるべきです。なぜなら、そのような悪には終わりが来るからです。その終わりは、信仰者が最後まで忠実でありさえすれば、自分の目で見ることができるようになります([ヨエル 2 章 30-32 節](#))。また、私たちの神の完全で恵み深いご性格であることを考えると、その時の信者たちに厳しい制約があっても、真にそれを望む個人が、救いや霊的な成長を奪われることは決してないということも確実です。なぜなら、私たちの神にとって不可能なことは何もないからです。([創世記 18 章 14 節](#); [ヨブ 42 章 2 節](#); [エレミヤ 32 章 17 節](#); [マタイ 19 章 26 節](#); [ルカ 1 章 37 節](#), [18 章 27 節](#))。

黙示録の記述にあるように、その将来の時代の人類の大部分は、人類史上かつてないほど心が頑なになり、御言葉の真理に否定的であり、大艱難期の中に蔓延する悪と背教は、サタンの影響が原因であると同時に結果でもあることを私たちは以前から指摘しています。このような理由から、時と法律の変更は、上記の[ダニエル 7 章 25 節](#)にある「終わりの日」の特徴である宗教的迫害の領域をはるかに越えるものになります。「時と法律」という言葉は、反キリストが慣習や法律法規をそれぞれ変更することを指しています²⁸。人類を均質化する試みとして、獣は、特に法律上の規範と慣習的行動のより一般的な規範(例えば、道徳その他)の両方を無効にするためにあらゆる努力を払うでしょう。彼の目的は、すべての人間に、それが達成できる限りにおいて、過去の伝統と決別させることです(カルトが、その犠牲者を支配し、忠誠を命じるために、犠牲者のそれまでの人間関係をすべて断とうと努力するのと同じように)²⁹。フランス革命のように、これらの変化のいくつかは、その実施において、さほど痛みを伴わなくても、厄介なものでしかないかもしれません。例えば、多くの欠点があるにもかかわらず、いくつかの分野では十進法が機能しているように(例えば、多くのものは通常、2、3、12 で割れる方が自然です。「フィート」や「ポンド」は非常に必要とされ、機能する単位ですが、それに対するメートル法の適切な代替単位がありません< 訳者註:フランス革命後にそ

²⁷ 『サタンの反乱5部:裁き、回復、そして置き換え』のIII.2.「人間の持つ自由に対するサタンの洪水期後の攻撃(バベルの塔)」を参照。

²⁸ 「律法」(ヘブル語: dhat, תּוֹרָה)という語は、一般的に制定法を指します。「時」(ヘブル語: 'itiym, עֵתִים)が、慣習法として確立され、しばしば「コモン・ロー」の効力を持つことを指すことの重要性については、[エステル記 1 章 13 節](#)「時を知っている知者」という句を参照してください。この節の文脈では、「法と正義」のあらゆる側面を明確に要約しています([エステル 1 章 19 節](#)、[4 章 11 節](#)、[4 章 16 節](#)、[1 章 15 節](#)、[歴代誌上 12 章 32 節](#)、[エレミヤ 46 章 17 節](#)を参照)。

²⁹ 『聖書を読む:カルトに対する防御』を参照ください。

れまでの単位制度が廃止され、メートル法が強制的に用いられるようになり、後に世界中で取り入れられるようになりました>)。その他の試みは、より負担が大きく、より実行不可能である可能性が高いでしょう(フランス革命時に日曜日を休日として廃止した結果、間もなくフランス全土で家畜が死に絶えたことを例に挙げることができます)。しかし、過去の例とは異なり、大艱難期の間、地上の人々は、イエス・キリストの再臨まで、反キリストの抑圧的な命令から解放されることはないのです。

この点については、反キリストが他者を利用することに長けていることから([ダニエル 11 章 24 節](#), [11 章 39 節](#))、このシリーズの最終回で見た獣とセレウコス朝の王アンティオコス・エピファネスの間の聖書の類似点が、この分野における反キリストの手法にもある程度当てはまることが予想されます。アンティオコス・エピファネスは、自らの政権を規定する要素に加え、その領域の住民に、異なる民族的背景を持ちながらも一つの国の一員であると感じさせるようなことを多く行いました。彼は積極的にギリシャ文化と制度を王国に広め、またこの文化的均質化政策を熱心に、心をこめて採用した人々に対して、非常に寛大な便宜を図ったのです。アンティオコスは、ギリシャ演劇・芸能、ギリシャ軍事訓練機関(特にエフェベート)、ギリシャ貨幣・経済基準、ギリシャ運動(体育館と闘技場を王国中に設置)を自由に利用し、彼の支持者(同様にヘレニズム元老院や議会に組織されていた)にはこの政策に対する彼らの忠誠心を表現する具体的手段と動機づけを提供したのです。同時に、これらの新しい制度は、ギリシャのやり方を支持して自分たちの伝統をあきらめたり妥協したりすることを嫌うすべての人々にとって、まさに試金石となりました(アンティオコスの迫害とマカベアの反乱の前と後のイスラエルで最も明確に見られた対立)。歴史において(ローマ帝国、ゴート族、大英帝国、そして特にひねくれた方法ではナチスと共産主義者など)、支配エリートが共通の文化的規範への忠誠を要求することで、先住民族や征服された社会の有用なメンバーを取り込むという他の例が見られます。しかし、反キリストの一派が要求する忠誠と変化の度合は、これまでに目撃されたどんなものも超える可能性が大きいでしょう。

このすべてにおいて、獣が復活したローマの 7 つの王国帝国を同化するパターンが、ひとつの原型となるでしょう。確かなことは言えませんが、この均質化計画の中核をなす「文化」の本質的な核がバビロンのものである可能性はあり、おそらくそうでしょう(そして、今日すでに、アメリカ文化の多くの怪しげな側面が世界中に広まっているのを見ることができます)。もしそうであるなら、メシアの王国の千年間の祝福の一部である人間の言葉の預言された「浄化」の中に、地のすべての住民に単一の「言語」を押し付けようとする反キリストの試みに対する神による逆転を見ることができるともいえるかもしれません。

ん([ゼパニヤ 3 章 9 節](#))³⁰。

最後に、七つの王国の中の民族の結合をできるだけ強化しようとする反キリストの試みは、ダニエルの大像の預言([ダニエル 2 章 39-43 節](#))に確かに現れています。この箇所には、異種族間の婚姻によって同質化のプロセスを加速させようとする試みが疑問の余地なく見られます(この点については、アレキサンダー大王の努力と比較してください)。そして、このパターンが大艱難期の中に全世界に適用されるのは、確かに道理にかなったことです。この試みは、社会制度に関するサタン³⁰の努力と相まって、全世界を「人の種において」([ダニエル 2 章 43 節](#))一つにしようとするもので、民族的・国家的区別や政治的体制だけでなく、文化・社会的区分の崩壊を加速させ、区分けない均質な背景の中で、サタンへの忠誠をはっきりと引き立つようにさせて、神に従う信仰の機会や場所をなくすというサタンの究極的な計画を促進するためです。

3. 経済的搾取(第三の封印) :

そして、[同じ]誘惑的な[方法によって]、帝国(復活したローマ)の最も強い地方(すなわち七つの国)に入り、自分の先祖もその先祖もしなかったことをするのです。彼は略奪、戦利品、富を自分の[従者]に分配し、その後、[残った]列強(=南方同盟の三つの下位連合)に対して陰謀を企てるが、好機を待つでしょう。(英文からの訳 [ダニエル 11 章 24 節](#))

彼(反キリスト)は、自分が大いに崇めている異邦の神(すなわち悪魔)の力を借りて、[卓越した]権力者たち(すなわち、軍事力と経済力のある国々)の間で[陰謀的な]協議を行い、これらの[者]を大多数の[民]の責任者にし、報酬として領土も[彼らに]配分するでしょう。(英文からの訳 [ダニエル 11 章 39 節](#))

[黙示録 6 章 5-6 節](#)(本シリーズの[第 2 部 B](#)で取り上げた)の第三の騎手に関する記述と、[黙示録 13 章 11-18 節](#)(以下の第 VI 節参照)の獣の刻印とその経済効果に関する記述と合わせて、これらの聖句は、反キリストがその領域を経済的にどのように世界的に管理するかを教えてください。これらすべての箇所から(そして、獣について一般的に分かっていることから)、大艱難の間に実現する経済体制は、反キリストの王国の軍事的な必要を満たし、彼の支持者を富ませ、他のすべての人々を、反乱の手段

³⁰ すなわち、バビロンの英語はシオンのヘブル語に置き換えられる。

が容易に手に入らないような自給自足の生存状態に追いやることだけを目的とした、単なる総搾取のものであることは明らかであるように思われます。特権階級のバビロンはこの規則の例外となりますが([ハバクク 1 章 11 節](#), [1 章 16-17 節](#), [2 章 6 節](#); [黙示録 17 章 1-6 節](#), [18 章 1-34 節](#))、しかし、この事実が、やがて彼女の破滅につながる嫉妬心の高まりに少なからぬ影響を与えることになるでしょう。([黙示録 17 章 15-18 節](#))。

4. 生命に対する冷酷で不法な無視(第四の封印):

あなたを見る者はつくづくあなたを見、あなたに目をとめて言う、『この人は地を震わせ、国々を動かし、世界を荒野のようにし、その都市をこわし、捕えた者をその家に解き帰さなかった者であるのか』。(イザヤ 14 章 16-17 節)

ちょうど、上の節で説明したように、艱難期の最後の三年半における獣の政治、社会、経済政策が、最初の三つの封印の流れ(黙示録 6 章)で預言されたパターンを継続するように、私たちは、第四の封印の流れに、反キリストが大艱難期に人間の生活全般に対して行う冷酷さと軽蔑が継続して加速することを見ることができます。上記のイザヤ書 14 章 16-17 節では、獣が「地を揺り動かし」、「王国を震え上がらせた」ことから、獣の方法による恐怖を読み取ることができます。獣が世界を「荒野のように」し、「都市をこわす」のは、反キリストが自分の領域を強化し、管理する過程で地上にもたらす破壊を明確に反映しています。最後に、「捕虜を家に帰らさなかった」という記述には、完全に殺されなかった現実の敵や潜在的な敵を広く虐待する政策も見て取れます。この言葉は、間違いなく住民の強制退去([イザヤ 23 章 6 節](#)参照)、大規模な人質獲得([ハバクク 1 章 9 節](#))、強制収容所や刑務所での集団収容([詩篇 79 篇 11 節](#), [102 篇 13-20 節](#); [イザヤ 14 章 2 節](#), [42 章 7 節](#), [49 章 9 節](#), [49 章 24-25 節](#), [51 章 14 節](#), [61 章 1 節](#); [ゼカリヤ 9 章 11-12 節](#); [ルカ 4 章 18 節](#) 参照)に及んでいるのです。

VI. 獣の預言者と世界的な反-キリスト教の宗教: 黙示録 13 章 4-18 節

1. 反-キリスト教の宗教とその世界的拡大: ヨハネの黙示録 13 章 4-10 節

(4) また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦う

ことができようか」。(5)この獣には、また、[神に敵対して]大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、[また]四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。(6)そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たち(すなわち、神の家族)とを汚した。(7)そして彼[獣]は、聖徒(すなわち、信者)に戦いをいどんでこれに勝つことを許され(すなわち、大迫害)、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。(8)地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めから[その書に]しるされていない者はみな、この獣を拝むであろう。(9)耳のある者は、聞くがよい。(10)とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。(黙示録 13 章 4～10 節)

人々は龍を拝んだ: 獣の見せかけの復活([黙示録 13 章 3 節](#))とその軍事的成功(結果として世界の実質的支配者となった)に対する世界の驚きは、この時点で、反キリスト自身への崇拝だけでなく、その父である龍(すなわち悪魔)への崇拝にもつながります。世界の人口の大半を占めることになるこれらの崇拝者たちが、自分が崇拝しているのがサタンとその反キリストであり、唯一の真の神とその真の救世主ではないということを本当に理解しているのかどうかというのは、ある程度は議論の余地がある点です。獣は確かに自分を後者<真の救世主>として表わすので、この世界的な宗教の中でサタンが「真の神」として表わされていることに疑いはないでしょう([エゼキエル 31 章 11 節](#); [ヨハネ 12 章 31 節](#); [第二コリント 4 章 4 節](#)を参照のこと)。しかし、反キリストが神の神殿からエルサレムを支配することは、警告のラッパの審判を仲介したモーセとエリヤという二人の神のしもべを事前に追い出した後に起こることなので、世界は明らかに知っているべきなのです([黙示録 11 章 1-13 節](#); [ゼカリヤ 4 章 14 節](#)参照)。

したがって少なくとも、反キリストだけでなく、その父である悪魔をも熱狂的に崇拝する世界にとって、この新しい「神」が誰であろうと、その者がそう呼ばれる権利や、そう崇拝される権利が、文句なしに与えられているわけではないことを知らないでいることは不可能でしょう。つまり、「天上の戦い」がこの時、地上に降りてくるのです。そして、この世界は今、急速かつ決定的に二つの陣営に分かれるでしょう。すなわち、反キリストとその力を与える「神」の神性を受け入れる人々と、それらを拒否して、代わりに唯一の真の神とその御子である私たちの主であり救い主であるイエス・キリストに忠実であることを選ぶ人々です。大艱難期が進むにつれて、この二つの陣営の間の本質的な対立はさらに顕著になり、最終的には、信じるイスラエルから始まり(12 章ですで見ました)、真のイスラエルが奇跡的に解放された後、世界中のすべての信者に急速に拡大する集団迫害として現れます([黙示録 12 章 17 節](#))。このように、「天の戦争」は地上で

も続き、ハルマゲドンの戦いで獣とその父である悪魔が全軍を召集して主と戦うときに、クライマックスを迎えます。しかし、ここで私たちが理解すべき根本的なポイントは、聖書がまさにこの問題を、「誰が本当に神で、誰が神の真のキリストなのか」を最後に決める戦いとして提示していることです。真理を信じる者としては、この問いはいささかナンセンスに思えるかもしれませんが、実際そうです。しかし、サタンは人類誕生以前から、自分が神とみなされるだけでなく、事実上その役割を担うために、あらゆる手段を講じようとするのを止めなかったのです。このような現実の完全な逆転は、悪魔が当初から望んでいたこと、すなわち、自分の思いだけでなく実際の実践においても神に取って代わり、神を宇宙から締め出し、神の支配と権威の役割を担おうとすることを見逃してはなりません。これは不可能なことですが、このような現実の完全な逆転こそ、悪魔が初めから切望してきたことであるという事実を見過ごしてはなりません。すなわち、神を自分の思いの中だけでなく、実際的にも置き換え、神を宇宙から締め出し、神の支配と権威の役割を自分が担うことです。艱難期半ばの出来事が成就した時、悪魔は、偽メシアの人物に、これらの荒唐無稽な欲望を避けられない真実として宣言させ、ハルマゲドンで私たちの神とキリストと最後の対決に備え、この新しい体制を完成させ、確立させようとするプロセスを開始します。このことが信者にとって意味するのは、もちろん、世界の歴史の中で最も困難な時期、大艱難期の始まりであり、私たちの場合、大迫害によって特徴づけられ、実際にそう定義されています。

龍とその反キリストが王国を強化するために用いる最も効果的で、最も劇的で、最も忌まわしい手段は、唯一の神への真の崇拝をすべて、獣とその父悪魔への崇拝に置き換えるために、強制的で世界的な宗教を設立することでしょう。[黙示録 13 章 4 節](#)が示すように、世界中の人々は、起こったばかりの出来事に驚愕し、それまで抱いていた疑問や不安を簡単に捨て去り、サタンと反キリストの崇拝を熱狂的に受け入れるようになるのです。彼らの理由と動機は単純明快であり、私たちにとって非常に明確です。龍は「獣に権威を与えたので」、反キリストは、1) その驚くべき人物(特に「だれが、この獣に匹敵し得ようか」と言われる見せかけの復活に象徴される)のゆえに、2) 彼の並外れた行為(特に、「そして、誰が彼と戦うことができようか」と言われることをもたらす二人の証人の「敗北」を含む世界の征服に象徴される)のゆえに、正当な崇拝の対象と見なされるようになるでしょう。

このように、悪魔に対する新たな崇敬の念と、彼を「神」として受け入れることは、反キリストが神の地上における神聖な代理人であるという信念が先行した結果です。今日、私たちが自宅でくつろいでいる間、これは真のキリストの信奉者にとっては信じがたい展開のように思えるかもしれませんが、しかし、私たちは主の言葉をよく覚えておくべきでしょう。

(10) そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう。
(11) また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。(12) また
[その時]不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えるであろう。(13) しかし、
最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ 24 章 10-13 節)

そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、
『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預
言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑
わそうとするであろう。見よ、あなたがたに前もって言うておく。(マタイ
24 章 23-25 節)

人々は龍を拝んだ：

獣と真のメシアの類似点は、意図的で、かつ数多く存在します。イエスが先の節で語っているように、選民でさえ、反キリストのしるしや不思議をメシアであることの証拠と解釈するように誘惑されるとすれば、イエス・キリストの真実を拒否した人々が、獣と、龍である悪魔の嘘に簡単に引っかかるのも不思議ではありません。この時点で、反キリストは、上記のしるしと不思議に加え、イスラムの圧制から「キリスト教とイスラエル」を解放するための「聖戦」で南方同盟の「不信仰な国々」を破り、何か月も世界の不信仰な人々を「苦しめた」モーセとエリヤという人物の「悪の力」を倒し([黙示録 11 章 10 節](#))、(世の人々の目には)死から蘇ったとき見え見えます。これらの前例のない徴候に続いて、彼はエルサレムの神の神殿に住み、自らを神と宣言し([第二テサロニケ 2 章 4 節](#))、戦争のない統一された世界をエルサレムから支配して、聖書に預言されている祝福の千年紀を始めようとするのです。未信者は、彼の偉業をその父の超自然的な権威に帰するとして(これは確かに十分真実です)、彼を神として受け入れるのは当然であるばかりか、このような状況を見る者は、全世界に強制的な礼拝形式を強制することが、あらゆる意味で合理的で良いことと思えるようになるのです。神を<自分の神として>知る者だけが、これから全世界に公開され、宣言される反キリストの宗教の新しい段階に参加するようという信じられないような圧力に抵抗することができるのです。また、真の神を「悪い神」、それに取って代わろうとするサタンを「良い神」として描く異教徒の時代から続く悪魔のプロパガンダが、もはや命の書に名前が記されていないすべての人々に容易に受け入れられることも同様に理解できます。ですから、死に至るまでイエスへの信仰を守ろうとするすべての人々に対して、これから繰り返される大迫害の恐ろしい皮肉の一つは、信者は、実際にサタンに自分を売っている人々から「悪魔崇拝」で告発されることなのです。この点に関して、主の言葉は覚えておくべき重要なものです。なぜなら、彼らは神の子自身である主を悪魔と結託していると非難するのですから([ヨハネ 8 章 48-59 節](#)[<48-50,51-53,54-56,57-59>](#)、[マルコ 3 章 22-30 節](#)[<22-24,25-27,28-30>](#)参

照)。主は私たちに世の憎悪と迫害を保証しておられます。というのは、世は最初に主を憎み、迫害したからです(ヨハネ 15 章 18-25 節<18-20,21-23,24-25>)。

[ダニエル 11 章 36-39 節](#)は、艱難期の始まりにおける反キリストの活動に関する同様の描写を私たちに示しています。ダニエル書にはさらに詳細が書かれているので、この箇所を[黙示録 13 章 4-10 節<4-6,7-10>](#)の解釈と一緒に考えることは助けになるでしょう。

(36)[大艱難の間]この王[反キリスト]は、その心のままに事をおこない、すべての神を越えて、自分を高くし、自分を大いにし、神々の神たる者にむかって、驚くべき事を語り、憤り(=大艱難期)のやむ時まで栄えるでしょう。これ[このすべて]は定められた事が成就するからです。(37)彼はその先祖の神々を(すなわち、主をも)顧みず、また婦人の好む者も、いかなる神をも[全く]顧みないでしょう。彼はすべてにまさって、自分を大いなる者とするからです。(38)彼はこれらの者の代りに、要害の神をあがめ、金、銀、宝石、および宝物[、あらゆる好ましい物]をもって、その先祖たちの知らなかった神をあがめ、(39)異邦の[彼の]神(すなわち悪魔)の助けによって、最も強固な城(すなわち、軍事力と経済力のある列強の国々; [エゼキエル 31 章 11 節](#); [ヨハネ 12 章 31 節](#); [第二コリント 4 章 4 節](#)参照)にむかって、[陰謀の]事をなすでしょう。そして彼を認める者には、栄誉を増し与え、これに多くの人を治めさせ、賞与として土地を分け与えるでしょう。(ダニエル 11 章 36-39 節)

36 節: 世界中のすべての軍事的、政治的抵抗が消え去ったことで、「王」である反キリストは、自らの意思を実行する自由裁量権を持つこととなります(もちろん彼を生み出した悪魔と区別がつかない)。したがって「その心のままに行う」でしょう。彼がこれまでにないほど自己を誇大視し、拡大解釈しているにもかかわらず、また、彼が真の王であり主である方をあえて軽蔑している(すなわち、「あらゆる神よりも自分を高め、拡大し、神々の神に対して驚くべきことを語る」)にもかかわらず、彼は「憤りのやむ時まで栄える」でしょう。これは神の意思に反したのではなく、神の意思に従ったことです。なぜなら、「(このすべての)定められた事が成就する」からです。

主が神の正義と聖なる裁きのために世俗の、それも悪の権化を神聖なるものとして利用されるのは、これが(これはもっとも極端な例ですが)初めてではありません。出エジプトのパロ(出エジプト記 3-14 章)、アッシリア([イザヤ 10 章 5-6 節](#))、歴史上のバビロン([エレミヤ 27 章 3-8 節<3-5,6-8>](#))などは、反逆のイスラエル(他の国も含めて)を懲ら

しめるために神が使われた際立った例です。以上のように、艱難期、特に大艱難期は、神の裁きの時です(冒頭の1.6で示した主な傾向の表参照)。私たちが見たように(「来たる艱難期」第3部B)、反キリストの予型であるパロは、当時、前例のないほど神に対抗することが許され([使徒行伝 12 章 21 節](#)参照)、しかし、神の許可なしにはなく、神の力と栄光を示す目的でのみ許された([出エジプト 9 章 16 節](#))ことは、特に示唆に富む類似点です。反キリストが世界中でその意志と支配を拡大するということが、実際に起こる何千年も前に聖書の中で予言されているという事実は、聖書を信じるすべての人にとって、獣とその父であるサタンが神による許可なしに、自らの努力によってこのような状況を作り出すことは決してできなかったことを示すのに十分であるはずで、す。それゆえ、これから起こる恐ろしい日々には、すべてが神のみ手の中にあるだけでなく、神が天地創造以前から定められた終末、すなわち、悪の根源とその行いを徹底的に滅ぼす過程で、神が悪を完全に撲滅することに重要な意味があり、極めて重大なことであることを、私たち全員が思い出すべきでしょう。([第一ヨハネ 3 章 8 節](#); 参照. [ヘブル 2 章 14 節](#))。

[ダニエル 11 章 37 節](#):しばしば「女の慕うもの(新改訳IV)」と訳されるこの句は、特定の異教の神への言及ではなく、サタンと反キリストのみを崇拝する新しい宗教によって、他のすべての異教の活動が置き換えられる、あるいは入れ替わることを表しています。ユダヤ人の経験では、外国人女性は夫を偶像崇拝に導くことが多かったので([民数記 25 章 1-3 節](#); [列王記上 11 章 1-13 節](#)参照)、この言葉は「先祖の神」と対比して、すべての異教徒の影響を表しています。反キリストは「その先祖の神」(すなわち主)を顧みないだけでなく、「妻たちが好んだ(神や宗教)」も敬わず、それどころか、「(全く)神を顧みず」、その代わりに「すべての上に自分を高く掲げる」ということです。唯一の真の神への崇拝と(悪魔の起源とその影響がある程度隠されているであろう)他のすべての異教徒の崇拝の両方は、反キリストの新しい宗教によって、悪魔の直接の崇拝(それと共に、その息子である獣の崇拝)と入れ替えられるようになります。

[38 節](#): 反キリストが好む偽神は、ここでは「その先祖の知らない神」と表現されていますが、これは、過去の時代にイスラエルの子らが異教的な不実な行為にふけたとしても、少なくとも、これらの異教的な神々の背後にサタンの天使たち、ひいては悪魔自身が立っていることは、彼らにははっきりと明かされなかったことを意味しています。反キリストとその宗教の出現とそのお披露目で、ごまかしの策略は終わりを告げます。獣と、獣と共にある世界の大多数の人が、「金銀や宝石や[あらゆる種類の]好ましいもの」の供え物でサタンを称え、新しいメッカであるエルサレムに巡礼するようになります。エルサレムは、反キリストが神殿で権勢を振るう限り、比喩的に言えば、「ソドムとエジプト」です。([黙示録 11 章 8 節](#); 参照. [ダニエル 8 章 10-14 節](#); [11 章 31 節](#); [マタイ 24 章](#)

[15 節](#); [マルコ 13 章 14 節](#); [第一テサロニケ 2 章 4 節](#))。

獣と不信仰の世界が崇拝する悪魔は、ここでは「要塞の神<英語からの訳: 諸々の力の神>」と表現されています。この言葉はサタンとその王国、そしてその手口について多くのことを明かしています。この「要害の神」という表現とは対照的に、私たちの神は「全能の神」です。つまり、唯一の真の神である私たちの神は、その言葉のあらゆる意味で全能であり、悪魔の力は、微小な人間の力と能力に比して大したものかもしれませんが、いかなる意味でも私たちの主のものとは比べものになりません。そして、私たちの神はご自分を愛と憐れみと義の神と表現されますが、サタンはこれらの真に素晴らしい資質をすべて欠いているので、自分の力を表現するのが大好きなのです。

(5)それから、悪魔はイエスを高い所へ連れて行き、またたくまに世界のすべての国々を見せて(6)言った、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。(7)それで、もしあなたがわたしの前にひざまずくなら、これ(権威)を全部あなたのものにしてあげましょう」。(ルカ 4 章 5-7 節)

主は[申命記 6 章 13 節](#)の「あなたの神、主を礼拝し、彼だけに仕えなさい」という言葉でこの申し出をきっぱりと拒否しましたが、反キリストは臆することなくこの申し出を受け入れるでしょう。なぜなら、以前の彼の父親のように、「権力」が究極の善であり、究極の目標であり、究極の目的であるからです。

この物質世界とその魅力に集中することは、それが権力や富や名声や財産やさまざまな快樂で表現されるものであれ、基本的には悪魔的であり、真の霊性とは本質的に敵対的であることを考える価値があります。なぜなら、便宜主義や物質主義によってこの世の安全やこの世の優先順位を求めることは、その最も本質的な形で偶像崇拜からです([エペソ 5 章 5 節](#); [コロサイ 3 章 5 節](#)を参照)。当然ながら(あまりにも当然ですが)、誤りを犯しやすい人間として、禁欲主義や世俗からの撤退という同様に危険な罠に陥ることなく、このような誤った価値観から自らを切り離す完璧な基準を採用することは簡単なことではありません。しかし、私たちが物、人、組織、運動、あるいは国家の力に解決策や慰めを求めるたびに、本質的に悪魔の術中に陥り、悪魔が最も尊ぶもの、すなわち霊的な解決策の代わりに肉的な解決策を尊んでいることに注意することが重要なのです。なぜなら、彼は「(霊的ではなく)物質的な「要塞の神」だからです。そのような考え方に注意することは今でも重要であり、私たちはむしろ、目に見えるものに関係なく、神が支配しておられることを思い出すのに苦心しなければならないこと

を考えると、大艱難期の驚くべき圧力、挑戦、試練の下では、そのことがどれほど真実ではないのでしょうか。

39 節：この節で言及されている「最も堅固な城」とは、世界の残りの権力の中心であり、ほとんどの場合、国家ですが、著名な組織や個人を除いたものではありません。聖書はここで、艱難期の半ばに成功した後、反キリストが世界的に権力を強化するために用いる方法を垣間見せているのです。獣は、その支配権を基本的に世界中に「フランチャイズ」し、特に、まだ獣の軍団が進軍していない遠く離れた場所で、その支配権を行使するのです。このように反キリストの支配を共有する特権の代償は甚大で、何の妨げもなく「思いのままにする」者の意志を遂行するための完全服従のみならず、サタン崇拝の新しい強制宗教(獣が「大いに崇める」者)を宣伝し執行する責任も含まれ、この世界規模の権力強化と反キリスト教の拡張は、悪魔からの継続的、積極的支援によってのみ可能です(すなわち、反キリスト教の宗教はこのようにして繁栄するでしょう)。「彼の異国の神の助けによって」です。しかし、人間の肉の力とこれらの「勢力」(ヘブル語では文字通り「強力な要塞」)を頼みとする獣とその軍隊は「塔が倒れる日」に神の子の口から出る恐ろしい剣によって一掃される運命にあります([黙示録 19 章 21 節](#); [イザヤ 30 章 25 節](#); [エレミヤ 50 章 15 節](#); [アモス 1 章 10 節](#); [ゼパニヤ 3 章 6-15 節](#)を参照)。私たちの目にどのように映ろうとも、私たちの信仰は、主が人類の歴史の過程を完全に支配しておられることを保証しています([イザヤ 37 章 26-29 節](#), [46 章 11](#), [48 章 3 節](#)参照)。

(8)全地は主を恐れ、世に住むすべての者は主を恐れかしこめ。(9)主が仰せられると、そのようになり、命じられると、[無から生じて]堅く立ったからである。(10)主はもろもろの国のはかりごとをむなしくし、もろもろの民の企てをくじかれる。(詩篇 33 篇 8-10 節)

黙示録 13 章の釈義に戻ると、先ほどダニエルの関連する聖書箇所から見たように、その時には、悪魔崇拝と獣崇拝を切り離すことは不可能になります。来たる暗黒の日に世界が悪魔を崇拝するのは、「悪魔が獣に権威を与えるから」です。つまり、サタンが「神」と信じられるようになる具体的な「証拠」は、彼の偽メシアである反キリストの数々の実績でしょう。そして、これらの実績こそが世界の賞賛を生むのです。彼の偽りの復活(「だれが獣に匹敵し得ようか」と、広大な南の同盟を打ち負かす偽りのハルマゲドン(「だれがこれと戦うことができるか」)の両方です。この二つの主要な欺瞞(とそれに続く世界の支配)が達成される前に、新しい宗教の本質を完全に明らかにすることも、それを世界中で義務付けることも、説得の観点からも、政治権力の観点からも不可能でした。艱難期中盤に起こる一連の出来事によって、反キリストの支配を地

域的なものから(「異邦の神の助けを借りて」)世界的なものに変えることが可能になります。この変化は、水平方向(地球全体が彼に忠誠を誓うまで地理的に拡大すること)と垂直方向(すべての政治団体と他のすべての権力の中枢において忠誠と支配の度合いを強めること)の両方で起こり、それに伴って彼が支配する人々への要求も強まるでしょう。彼の最初の権力強化の直後に、彼の正義と彼の宗教への忠誠と参加をより強く要求することが予想され、それは、そうした忠誠と参加を拒否するすべての人に放たれようとしている大迫害において最も顕著に現れることでしょう。

大言を吐き汚しごとを語る口(黙示録 13 章 5 節前半): このシリーズの前の回で見たように、このような大言壮語は、反キリストの顕著な特徴です([ダニエル 7 章 8 節](#), [7 章 20 節](#), [7 章 25 節](#), [8 章 25 節](#), [11 章 36 節](#); [第二テサロニケ 2 章 10-11 節](#); [黙示録 16 章 14 節](#); [第二ペテロ 2 章 10-12 節](#); [ユダ 1 章 8-10 節](#)を参照)。しかし、ここでは、獣が神のご性格を前代未聞のレベルにまで攻撃しています。宇宙の真の神のご性格を否定しておきながら、自分自身を神とみなすことは、[第二テサロニケ 2 章 11 節](#)に預言されている「惑わす力」に不信仰な世界が完全に降伏することを要求し、またそれを促進させることになるでしょう³¹。

四十二ヶ月(黙示録 13 章 5 節後半): このとき、反キリストが、自分の思いのままに行うことを制限するものはごくわずかなものとなるでしょう。その代わり、信者の破壊や信仰と誠実さの可能性を排除することを含む、世界統一という悪魔的な計画を実行するために、彼に自由が「与えられる」でしょう。[ダニエル 11 章 36 節](#)に書いてあるように、「彼は自分の思いのまま」行います。このように、神の寛容な意志によって抑制がなくなることで、艱難期後半は、(言葉の意味する負の意味で)「大いなる」ものになるのです。そのような恐ろしい日々を耐えるように召されているであろうクリスチャンとして、私たちは、神の許しがあつてこそ、そのようなことが起こり得るのであり、そして神が許されるなら、それらの日々において、一時的に「善」には見えない状態であったとしても、神は特に私たちの善のためにそうしておられるのだということを心に留めておかなければなりません([ローマ 8 章 28 節](#))。

創造の初め(文字通りには「永遠」)から、昔のことを思い出させよ。なぜなら、わたしは神であり、ほかに神は存在しないから。わたしは神[であり]、わたしのようなものは存在しない。初めから終わりまで、わたしは終わりを明らかにしてきた。永遠の昔から、まだ成されていないことを明らかに

³¹ この不信の心の硬化を促進する要因についての詳細な説明は、[『来たる艱難期: 第 3 部 A.II.3.a『不法の秘密』が解き放たれる』](#)参照。

してきた。わたしは「わたしの目的は達成される」と言い、「わたしはすべてわたしの喜ぶことを成し遂げる」と言う。(英文からの訳:イザヤ 46 章 9,10 節)

神の名、住まい、民に対する冒涇(黙示録 13 章 6 節): このように反キリストの冒涇の対象が列挙されているのは、彼の父である悪魔の命令で神に反対することが、今やあからさまな聖戦となったことを示しています。この時点で、獣は神ご自身(すなわち、神の聖なる「名」)だけでなく、「神の住まいと天に住む者たち」に対しても攻撃を開始します。この節の「住まい」と「住む」の両方に共通するギリシャ語の語根はスケン sken-(σ κ η ν-)で、文字通りの意味は「テント」です(ギリシャの演劇で「テント」やキャンバスの背景を変えることから、英語の「scene シーン」の語源になりました)。この用法は重要です。なぜなら、神は現在、第三の天で「天幕」を張っているだけで、「神と共に天幕を張る者」、すなわち神の永遠の家族もまた、一時的にそこにいるだけで、神と神に属するすべての者の正当な場所は地なのですから(七つのエデンの究極:黙示録 21 章-22 章)。³² 選ばれた天使と勝利した信者に対するこれらの言葉による攻撃は、反キリストが天国での彼らの存在を何らかの不法なものとして表現する方法であり、「神の住まい」に対する彼の冒涇は、彼とその父サタンが同様に「彼らの」宇宙での主の継続した物理的存在を不快なものに見なしていることを示唆しているのです。このように、正しいことをすべて覆す恐ろしい行為には、悪魔とその息子が陥れることのできる暴挙の深さだけでなく、彼らの抑えきれない傲慢さが生み出した本質的な狂気がはっきりと見て取れます。すべての嘘と誹謗中傷の根底には、虚偽を口にすることでそれを現実のものとする事ができるという誤った思い込みがあります。そのような積極的な中傷や欺瞞がもたらす損害にもかかわらず、神が何らかの手段(特に単なる言葉)によって影響を受けたり、弱められるという考えは、悪魔、獣、偽預言者が物理的な力によって主自身を打倒しようとするハルマゲドン作戦と同じ自己妄想性の狂気から生じるものとしか理解できません([黙示録 19 章 11-21 節](#)参照)。

聖徒らに対する戦争(黙示録 13 章 7 節前半): [黙示録 12 章 17 節](#)と同じように、これはもちろん大迫害のことを指しています。聖書はそれを「戦い」と表現していますが、それは信者が獣に対して武器を取るからではなく、その時の圧力の中でどう思おうが感じようが、私たちの苦しみはサタンの反乱が始まって以来続いている目に見えない大きな戦闘の現れとなるでしょう。私たちは確かにこの戦時中の兵士ですが、私たちの武器は霊的なもので、「神の武具」です([エペソ 5 章 10-17 節](#); [ローマ 13 章 12 節](#); [第二コリント 10 章 4 節](#); [第一テサロニケ 5 章 8 節](#)を参照)。ですから、地上で起こることは、私たちの目の届かないところで起こっている真の現実の反映に過ぎないのです。

³² [「サタンの反乱」シリーズの第 1 部 II.6「7 つのエデン」](#)を参照。

ですから、私たちは、(自分たちが主の軍隊の兵士であり、私たちの粘り強い信仰によって主が栄光を受けられることを忘れて)絶望に陥ったり、(神が私たちの強大な要塞、力、盾、剣であることを忘れて)物質的な方法で反キリストに対抗するなどの人間的解決にとらわれてしまうことを避けるために、その時が来る前に(物質的なものより、むしろ)信仰で身を固める努力をしなければならないのです。この聖句は、「(獣が)聖徒に戦いをいどんでこれに**勝つこと**を許された」と明確に語っています。つまり、大迫害は、あらゆる議論を超えて、神の許しの下において起こり、その結果生じる苦しみや殉教は避けられないのです。もし、私たちがその暗い時に主を信頼し、どんな犠牲や結果があっても、主に忠実であり続けるなら、このすべては主の喜びと偉大な栄光のためであり、永遠の王国の私たちの究極の祝福と継承のためであることを忘れてはなりません。

(21)わたしが見ていると、この角(すなわち、反キリスト)は聖徒(すなわち、信者たち)と戦って、彼らに勝った(すなわち、「**征服した**」)が、(22)ついに日の老いたる者がきて(すなわち、私たちの主の再臨において)、いと高き者の聖徒のために審判をおこなった。そしてその時がきて、この聖徒たちは**国を受けた**。(ダニエル 7 章 21-22 節)

あらゆる部族、民族、言語、人種を支配する権威(黙示録 13 章 7 節後半): ギリシャ語テキストでは、反キリストの「あらゆる部族と民族と言語と人種を支配する権威」は、信者の征服の直後に続き、またその征服と平行した言い回しになっています。彼は「自分に与えられた」ので、両方の権威を持っているのです。この二つの並列的な表現は、反キリストが大迫害を開始することと、彼が引き受けることになる世界的な権威とが相互に関連していることを示しているのです。これまでの世界の歴史では、迫害された信者が、神の助けを借りて逃げ込むことができる避難所が常にあり、それによって嵐から身を守ることができました。しかし、来たる恐ろしい日には、そのような避難所は存在しないでしょう。獣は、神の許しの下、ニムロデ以来誰も享受したことのないような世界を支配する権威を与えられるからです。ニムロデと同じように、反キリストも世界の人々を支配して、神に対抗するという明確な目的のために、(バベルの塔の場合のように)強制的な状況を作り出すでしょう。このコインの裏側は、もちろん、反キリストとその宗教と反神の計画を受け入れないすべての人々に対する容赦のない弾圧であり、獣が地上の生活のあらゆる側面を支配することによって、世界がまだ目にしたことのないような迫害を引き起こします(これは、非常に大きな意味を持ちます:[マタイ 24 章 21 節](#))。世界中の国々が急速に結束するようになるのは、反キリストが、信頼する仲間、すなわち「党派」や、新たに服従した国々の著名なグループや個人など、高度に組織化された指揮系統に体制強化の任務を委任することによって、その過程が促進されるでしょう([ダニエル 11 章 39 節](#))。しかし、私たちの神がそれを許可しない限り、このようなこと

は不可能であり、神がそうされることによって、すべてが私たちの益と神の栄光のために働くようになることを私たちは信じています。

いのちの書(黙示録 13 章 8 節)。このとき、世界の大多数の人々は、反キリストをメシアとして、その父サタンを神として受け入れ、そのように崇拝します。つまり、<これらの人達は>「世の初めから、殺された小羊のものであるいのちの書(帳簿)に名前が(かつて書かれていたのに)そのとき書かれていない[すべての]人々」です。この聖句はしばしば誤訳され、さらに頻繁に誤解されるので、読者は正確な翻訳に注意する必要があります。生まれながらの罪人である私たちは、誰一人として自分の功績によって永遠の命を得るに値しないし、したがって、すべての人が「永遠の命の書」に記されるに値しません。神のご介入がなければ、私たちは皆、自分の意志でこの世で犯した、そしてこれからも犯すであろう罪の記録に基づいて、正当な裁きを受けることになるのです。幸いなことに、神は御子というお方を介入させ、その尊い血によって私たちを贖い、これまで生きてきたすべての人の罪の代価をキリストの血という高価な代価で支払って**くださいました**。その結果、すべての人は、世の初めから「いのちの書」にその名が記されています。キリストの犠牲は、神の最初の宣言の時から定められ、有効だったからです([ローマ 3 章 25-26 節](#); [エペソ 1 章 4 節](#); [第一テモテ 2 章 6 節](#))。神とキリストとその働きによる神の解決策を**拒絶すること**によってのみ、名前が帳簿から「消される」のです。これは、獣を優先してあからさまに神を拒絶する人々の場合であっても、神を決定的に拒絶せずに地上での人生が終わる前に神のもとに来ることを拒絶する人々の場合のようなものであっても同じです([ダニエル 12 章 1 節](#); [ルカ 10 章 20 節](#); [ピリピ 4 章 3 節](#); [黙示録 3 章 5 節](#), [17 章 8 節](#), [20 章 12 節](#); [20 章 15 節](#)参照)。

彼らをいのちの書から消し去って、義人のうちに記録されることのないようにしてください。(詩篇 69 篇 28 節)

今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば——[結構です]。しかし、もしかなわなければ、[その時は]どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」。主はモーセに言われた、「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。(出エジプト 32 章 32-33 節)

現代でもそうですが、来たる時における不信仰者は、真のキリストが私たちの身代わりとなって屈辱と痛みを受けた背景に何があったのかを認識せず、その必要性も認めないでしょう。その結果、彼らは反キリストの栄光を簡単に(そして間違っ)て受け入れ、歓喜するのです。[第 2 テサロニケ 2 章 10 節](#)にあるように、「彼らは信じようとしない

ので滅びるのです」。これが、その時、獣に従う者たちの暗くなった心に強力に支配する「惑わす力」です³³。

「耳のある者は、聞くがよい。」(黙示録 13 章 9 節): この勧告は、以前、黙示録の 2 章と 3 章の七つの教会について学んだときに見ました。実は、この七つの教会に対するキリストのメッセージ(黙示録 2 章 7 節, 2 章 11 節, 2 章 17 節, 2 章 29 節, 3 章 6 節, 3 章 13 節, 3 章 22 節)には、ほぼ同じ表現で、この同じ勧告が現れています。これらは、すでに見てきたように、七つの教会時代を表しています(このシリーズの**第 2 部 A**を参照)。黙示録の**他の**場所で、このような勧告が見られるのはこの箇所だけで、これは非常に重要なことです。この言葉について理解すべき第二の重要なことは、ここでは過去ではなく、未来を扱っているということです。つまり、この勧告は艱難期の教会に対する迫害と、**10 節**で信者に与えられた忍耐の必要性に関する忠告を扱っているのです。この勧告が指し示しているのは、神ご自身の声によるこれらの言葉であり、特に(この表現が使われている他の七つの箇所との類似関係に基づいて)、艱難期半ばを迎える地上の教会に向けられたキリスト自身の言葉なのです。このメッセージはその時の信者にとって非常に重要なものであり、今日の私たちに向けられたラオデキヤへのメッセージ(黙示録 3 章 14-22 節)など、細心の注意を払うようにという勧告に匹敵する重要性を持っているのです。ちょうど主が教会の七つの時代の最も重要な特徴と失敗を概説し、それぞれに適切な是正措置を取るよう勧められたように、ここでは救い主が、その完全な見解において、最後の試練の時を経験する運命にある私たちへの最も重要な助言を与えておられ、私たちは確かにその言葉に「耳を傾け」たほうがよいのです。

聖徒たちの忍耐(黙示録 13 章 10 節): ここにあるのは、クリスチャンの視点から来たる大艱難期を予告しているだけではありません。この言葉は、イエス・キリストが私たちに直接言われているもので、主が私たちにその恐ろしい日々を耐え忍ぶように要求される際には、私たちが取り入れ保持すべき態度と視点を要約しています。この聖句でまず注目すべきことは、大迫害の時代に信者が経験する可能性が二つだけ提示されていることです。それは殉教と投獄です。これから待ち受ける火の炉の試練に直面する私たちにとって、他の可能性が全くないというわけではありません。しかし、私たちが迫害に遭遇する可能性を考えると、主がこの**二つの**可能性だけを示したことは非常に重要です。事実、殉教と投獄はごく普通のことであり、何らかの方法で「私たち」がどちらか一方、あるいは両方から逃れられると考えるのは愚の骨頂でしょう。私たちは免れ

³³ 「**来たる艱難期: 第 3 部 A**: 第七の封印から二人の証人まで」II.3.a「『不法の秘密』が解かれる」参照。

ることができるかもしれません。しかし、私たちの霊的健康と霊的生存のために、大迫害の坩堝(るつぼ)に備えて身につける最も必要な武具は、神の意志が何であれ、それに完全に服従し耐え忍んで従うという心構えであり、そのような従順と服従において反キリストの手による投獄や殉教を耐えなければならない可能性が非常に高いという**事実を前もって十分認識して受け入れていること**です。なぜなら、人類の歴史の中で、信仰者が自分の人生に対する神の意志に正しく同調していることがこれほど重要な時はないからです。そして、この試練を受けなければならない私たち全員が、その試練は主ご自身によって割り当てられたものであり、主の目的に適い、主を賛美し、私たちの失敗の結果ではなく、むしろ主が私たちのために犠牲になってくださったことへの愛と応答を示す究極の機会であると完全に理解していることが極めて重要です。

ペテロとヨハネの身に起こった出来事は、このことをよく表しています。二人とも小羊の使徒であり、偉大な信仰者であり、神の言葉の重要な部分の著者です。聖書がなければ、二人のうちどちらが殉教の候補になり、もう一人がその特別な運命を免れ、宣教を続けることができたかを推測するのは困難でしょう。しかし、[ヨハネ 21 章 18-19 節](#)には、主イエスが前もってペテロに、殉教して神を讃えることが彼の運命であることを告げられたことが記されています。それを聞いたペテロは、すぐにヨハネについて、「主よ、この人はどうなのですか」と尋ねました([ヨハネ 21 章 21 節](#))。それに対してイエスは、「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか。あなたは、わたしに従ってきなさい」と言われました。([ヨハネ 21 章 22 節](#))。同じように、主はここで私たちに、たとえ最終的にそのような運命を免れることになったとしても、私たちに訪れるかもしれない投獄や殉教を受け入れていなさいと言っておられるのです。確かに、生き残っている信者の中には「空中で主に会うために引き上げられる」([第一テサロニケ 4 章 17 節](#); [第一コリント 15 章 51-52 節](#) 参照)人もいますが、最後まで耐えるのが誰になるのか、特別な形で主を賛美する死によってこの世から追い出されるのが、誰になるのかということは、完全に主がお決めになることなのです。この点で、私たちは自分の運命がどうなるかを事前に知ることはできませんが、この聖句が明らかにしているように、一つだけ確かなことがあります。その時代の苦難に対処するためには、たとえそれが投獄や殉教、あるいは両方を伴うとしても、救い主の栄光のために神の御心を受け入れる正しい姿勢で事前に自分を武装しておかなければならないということです。[黙示録 13 章 10 節](#)は、[エレミヤ書 43 章 11 節](#)の引用または言い換えですが、エレミヤ書では、神の意思に背き、恐れから祝福の地にとどまらずエジプトに逃れた**不信仰者**に対する神の裁きの文脈であることが重要な意味をもっています。この聖句では、大艱難期が自然の摂理を一時的に覆し、悪人が受けるべきものを正しい人が受けているのがわかります。しかし、私たちは、私たちの神が決して私たちを見捨てたり見放したりしないこと、そして、このようなことが神の

意志を離れて起こることはなく、神の栄光のために、私たちの主イエスが間もなく戻って来られるときに、最も劇的な方法で私たちの運命を迅速に逆転させることを期待し確信しています。しかし、私たちはその日を辛抱強く待ち、反キリストの手下と戦ったり(それは主に任せなければならない)、彼らから逃げたり(主がそうするようにと指示しない限り)しないように努めなければなりません。ここに、主の「聖徒たち」の数に含まれるという祝福された私たち全員の「忍耐と忠実さ」があるのです。

新宗教の特徴： 先に進む前に、ここで強調しておきたいのは、反キリストの普遍的な悪魔崇拝の宗教が本質的に持つ恐ろしさや、それに屈することを拒むすべての人々を待ち受ける恐怖がありますが、このようなことが理由でほとんどの人が抑圧的だと感じ、嫌悪感を抱き、必要に迫られて許容していると思うべきではありません。このシリーズの[第3部A](#)で示唆したように、状況ははるかに逆と言えるでしょう。多くのカルトの場合と同様に、明らかなマインド・コントロールと集団強制のほかに、そのメンバーのほとんどとは言わないまでも、多くの人々の秘められた欲望に訴え、それを正当化する要素も常に存在するのです。悪魔を恐ろしい姿の生き物と想像するのが間違いであるように、実際には悪魔は美しく造られ([エゼキエル 28 章 12-13 節](#))、現在でも「光の使者」([第二コリント 11 章 14 節](#))ですから、悪魔を崇拝するために作られた世界的なカルト集団の場合、奇妙で過酷な儀式の嫌悪感を抱かせるようなものを想像するよりも、この新しい宗教を多くの人々が信じられないほど魅力的だと感じるものとして理解する方がよいでしょう([ナホム 3 章 4 節](#)と一般的に娼婦の例え：[黙示録 17 章 1-5 節](#), [17 章 15-16 節](#), [19 章 2 節](#)参照)。カルトはしばしば、歓迎され、友好的な社会を約束し、他では手に入らない「秘密の教義と神秘」に入り、「より深い」霊的關係を提供することによって、新しい信者を引き付けます。そして、その過程で、新しい入信者の隠れた欲望(それが禁欲的であれ放縦であれ)に訴えかけると、その魅力は抗しがたいものに思えるのです。獣の宗教の特徴は、これまで見てきたように、そのようなすべての要素が融合していることです。そのため、事実上すべての人間が、親しみやすく歓迎される環境の中で、「真の永遠の命」を得るために、「真実」を求め、「真の神」に仕えると確信しながら、自分の根底の欲望を宗教という覆いで覆い隠しています(反キリストが死からの復活を装う際に見せたようなものです)。

今日見られる傾向のひとつとして、性的な不品行に対してますます関心が薄れていく一方で、多くの人々が食事療法に対してますます細心の注意を払うようになってきていることが挙げられます。あたかも神が前者のことにはほとんど気を遣わず、後者のことには非常に気を遣っているかのようにですが、実際にはまったく逆です。獣の宗教は、この傾向を大いに利用し、聖なることについて「何かしなければならない」という根強いニーズを満たす一方で(すなわち、食事制限という偽りの聖性を実践することです)、

他方では自分の本当の罪や軽率な行動を免除し、正当化さえます(すなわち、獣の宗教は、この傾向を大いに利用すると予言されているのです。反キリストの宗教は、異教徒のカルトのように、あらゆる種類の性行為を「礼拝の行為」として含み、神によって認められた性行為である結婚が否定される可能性が高いのです)。

しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう。それは、良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のしわざである。これらの偽り者どもは、結婚を禁じたり、食物を断つことを命じたりする。(第一テモテ 4 章 1-3 節前半)

上記の節では、結婚が推奨されないという、神の自然な摂理の逆転であることが明白です。しかし、自然な行為であれ不自然な行為であれ、あらゆる種類の性的行為が推奨されるわけではありません。21 世紀のアメリカの都市に住む人々は、現代の慣習から見て、これはどのような大きな変化なのかと疑問に思うかもしれません。しかし、今見え始めている初期の傾向が本格的に広がり、国家と国教によって祝福され、反キリストの世界国家の忠実な市民全員に義務付けられるという、明白な悪化が起こるでしょう。そして、信者たちは、反キリストを受け入れることと同じくらい、この墮落した、そして墮落させるような行動を拒絶することに苦勞するでしょう。反キリストの支持者たちは、彼を支持するように、心の闇に導かれるままに、彼の宗教的教義を受け入れるでしょう。これは、神の真理をまず受け入れなかったことと切り離して考えることのできない現象です。

わたしは父の名によってきたのに、あなたがたはわたしを受けいれない。もし、ほかの人が彼自身の名によって来るならば、その人を受けいれるのであろう。(ヨハネ 5 章 43 節)

もちろん、この新しい悪魔的な宗教は、どこからともなく湧いてくるものではありません。獣がバビロンやその他の場所で展開した宗教運動の発展、拡大、完成であり、そもそも獣が権力者になるのに役立ったものです。このシリーズの[第 3 部 A](#)では、この宗教の初期段階と成長段階を見ましたが³⁴、13 章では、その実施段階に入り、獣の保護の下に水平方向(すなわち世界の隅々まで)にも垂直方向(すなわち世界のすべての住民の日常生活にますます入り込むようになる)にも広がっていることがわかります。世界が反キリストを神として、また彼の並外れた成功と個人的な「死からの復活」の結

³⁴ [「来たる艱難期: 第 3 部 A」](#): 第七の封印から二人の証人まで, II.3.c「偽りの教えの台頭」参照。

果としての真のメシアとして受け入れるこの論理は、全人類の普遍的強制改宗であり、参加し拒否するすべての人々を疎外し、排斥し、それから迫害し、そして処刑することに行きつくようになるでしょう。

一般論として、獣の宗教は、目に見えない霊性に対して、物質的で目に見えるものを強調するようになり、もちろん、それは完全に失われることとなります。そして、そのすべてのこの世の姿において、キリスト教の外見を模倣しようとし（ただし、これは、本物のキリスト教の信仰と実践とは対照的に、目に見える教会の「伝統的」な形式に、よりこだわるものとなるでしょう）。反キリストの「教会」から著しく失われるものの一つは、聖書です。偽りの宗教は、しばしば教義上の中心となるものがある一方で、真実とは無縁の組織が真実について「柔軟性」を維持することは有益だからです。つまり、嘘の上に成り立っている組織や運動は、矛盾を恐れずに嘘をつき続ける自由が極めて重要なのです。このような理由から、反キリストは神の子としての「啓示」をもって、自分の言葉が「神」からのものであり、完全に十分で権威あるものとして世界が受け入れることを求めることでしょう。そのとき、その＜聖書の＞著者と称する人物を直接礼拝することができるのであれば、時代遅れの古めかしい聖書に何の必要があるのでしょうか。この点で、事実上、私たちの現在のラオデキヤ時代の霊的ぬるま湯に、キリスト教の多くが浸かっているということは注目に値します。多くのいわゆるキリスト教会や組織は聖書に対して口先だけの奉仕を行っていますが（獣とその宗教もそうであると想像されます）、適用して実行に移すという点からして、しばしば娯楽、自己啓発、動機づけ説教、感情に訴えるもの、大衆心理学、そして「礼拝」によって、聖書はよく二の次に置かれています。したがって、多くのグループにとって、獣の宗教を名実ともに採用しても、悲しいかな、外見も内面もほとんど何も変わらないことでしょう。

1. 究極の崇拝の対象：[黙示録 13 章 4 節](#)の文脈から明らかのように、この新しい宗教では、「龍と獣」が究極的な崇拝の対象になります。サタンとその反キリストが全能の神とその真のキリストに代わって、不信仰の世が狂信的に行う積極的な礼拝の対象となるのですから、他の礼拝や崇拝の対象もありますが（例えば、宮の偶像崇拝の像や偽預言者）、世の人々は何の弁解もできないのです。サタンと反キリストは、全能の主なる神と真のキリストに取って代わり、不信仰な世界で今、夢中になって行われている熱心な礼拝を主導することになるでしょう。教会の三分の一が背教に陥り、聖霊の抑制が取り除かれ、[第 2 テサロニケ 2 章 11 節](#)で語られているような惑わす力が送られると、私たちがすでに学んできたように、世界は悪魔と獣を受け入れることへと全力で突進して行くことになることでしょう。

(10)それ[小さな角](すなわち、反キリスト)は大きくなって天の軍勢に達し、

天の軍勢(のいくつか)(すなわち、背教にそそのかされた信者)と星のいくつか(すなわち、反逆にそそのかされた天使)を地に落として、これを踏みつけ(即ち、連携による破壊)、(11)軍の長(=キリスト)に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所(=内庭)はくつがえされた。(12)背きの行いにより、軍勢(=信者)は常供のささげ物とともにその角に引き渡された(=大背教)。その角は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。(新改訳IVダニエル 8 章 10-12 節)

2. その究極の崇拜の場: 反キリストが自らを真のメシアと宣言し、「できれば」選民をも欺くような方法で主張するように([マタイ 24 章 24 節](#))、エルサレムと神の神殿は、偶然に最高の礼拝の場として選ばれるわけではありません。獣とその父であるサタンがこの点で行うことすべてにおいて、代替えという考えは明白です。神に取って代わろうとするのが悪魔の願いですから、彼の息子が神の王座につき、彼自身が被造物崇拜の究極の対象として祀られることは、多くの点で数千年来の夢の成就なのです。実際、サタンはこの期間中、この時代を「千年王国」の始まりとして表現することに苦心するでしょう。なぜなら、真の千年王国は、イエス・キリストが出現され、ハルマゲドンで敵を倒し、エルサレムの神殿に世界の支配者として祀られた後に始まるからです。不信心な世界にとっては、反キリストの偽の復活、南方同盟の征服、神殿とエルサレムの篡奪がこれに該当するのです。言うまでもなく、その後の三年半は世界史上最大の苦難の時であり、「千年王国」とは到底思えません。エルサレムを最高の礼拝所として選ぶことは、獣の主張の説得力を高め、不信心な世界に新しい普遍的宗教を受け入れさせることに寄与することになるでしょう。反キリストが彼の敵をすべて一彼を崇拜することを拒否した場合には一服従させるエルサレムからの統治を始めるときは、バベルの塔以来、はじめての政治的にも世界が完全に「統一」され、また統一された宗教の中心地と動機を持つことになるでしょう。

3. 究極の祭司: 獣の宗教の他のすべての最高権力者と同様に、「聖職者」の場合も、反キリストのシステムにおいて、真のキリスト教と伝統的キリスト教の両方が意図的に侵害されることが予想されます。もちろん、ローマ・カトリックの「教皇」は聖書に裏付けられているわけではありませんが、偽預言者は、反キリストの真の「代理人」または代替者となるでしょう。偽預言者は、反キリストと悪魔を体現する存在であり、反キリストに真のキリストであるかのように仕えることとなります。(例えば、偽預言者は「小羊のような二つの角」を持ち、「龍のように話す」のです;[黙示録 13 章 11 節](#))。これは、他の下位の「聖職者」にも当てはまるでしょう。特に、反キリストは既存の聖職者を利用して、自分の新しい普遍的宗教に取り込む可能性が高いので、そのため、獣の教会と「キリスト教の教会」との区別を世界が認識することは困難になるでしょう。(ほとんどの場合、

同じ建物の同じ人々が、今では「キリストとして」獣を崇拜するというだけのこととなるからです)。一般的に言って、反キリストの新しい聖職者は非常に説得力があると予想できます([マタイ 24 章 23-24 節](#); [コロサイ 2 章 16-23 節](#); [第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#); [第一テモテ 4 章 1-8 節](#); [第二テモテ 3 章 1-13 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-3 章 18 節](#); [ユダ 1 章 4-16 節](#)参照)³⁵

4. その一員であることの究極のしるし: イエス・キリストを信じる者は、聖霊の内在を彼らのしるしとし、それは神の所有権の印でもあります([第二コリント 1 章 21-22 節](#); [エペソ 1 章 13-14 節](#), [4 章 30 節](#); [ローマ 8 章 9 節](#); [黙示録 7 章 1-3 節](#) を参照)。反キリストは、この真の、しかし目に見えないしるしの代わりに、再び上記のパターンに従って、偽の、目に見えるしるし、「獣の印」(以下の VI.3 節で扱われます)を用いるのです。

5. 究極の約束: 獣が「生き返る」ことを考えると、特に反キリストが真のメシアであると主張する文脈では、彼の宗教を受け入れる人々に、同様の報酬が約束される可能性があります。しかし、この場合、正しい者の真の復活のように万人に約束されるものではなく、この偽りの復活の約束は、忠誠心において際立った少数の者にのみ提供され、「信仰者」をさらに墮落と狂信へと駆り立てる煽りとして使われることが予想されることに注意すべきです。さらに、提供される「永遠の命」の種類は、獣の宗教の他のあらゆる側面に見られる物質性と同じ線上にあります。つまり、真の変革ではなく、人間の運命である汚れた(神から離れて)無意味な現世生活の継続(または蘇生)なのです。世界中の多くの人々がこの提案に魅力を感じることは、特に反キリストがこの約束を一度も果たすことができないことを考えると、哀れなほどです。

6. 究極の生贄: 「悪魔との取引」をした者は「魂を売った」と描かれるのが文学では一般的である。そして、その将来の時代の不信仰な世界は、獣の宗教を受け入れることによって、同様に自分自身の刑罰を受け入れ、神が惜しみなく与えようとしていたイエス・キリストの恵みと憐みを、反キリストとその父サタンへの礼拝を通して故意に拒否することになります([ヨナ 2 章 8 節](#)を参照)。しかし、その「取引」の本質はこうです。彼らは、多くの場合、まったくうんざりするような短期間のわずかな物質的利益のために、永遠のいのちと計ることができないほどの霊的な豊かさを捨てるのです。つまり、エサウのように、その時代の不信仰な世界は、「生得権」を「一碗の食べ物のために」([ヘブル 12 章 16 節](#))すべて放棄してしまうことになるのです。当の本人にとっては、この取引は理にかなっているように思えるのです。なぜならその取引は、無形の利益の

³⁵ 「来たる艱難期: 第 3 部 A: 「第七の封印から二人の証人まで」の II.3.c.1 「人を虜にする艱難期の偽りの教えの説得力」をご覧ください。([日本語版「来たる艱難期: 第3部」](#) では 66 頁)

ために耐える現在の迫害(不信仰で盲目になった彼らの心は信じることができない)を今、具体的な「利益」と交換するものだからです([イザヤ 57 章](#)のパターンを参照)。

7. その究極の奉仕: 究極の犠牲の場合と同様に、反キリストとその宗教の信者のための究極の奉仕は、本物のキリスト教と異常なまでに平行するものを反映します。私たちの救い主のパターン(例えば、[ヨハネ 13 章 1-17 節](#))に従って、真のクリスチャンは、仲間のクリスチャンのために奉仕し、彼らの霊的成長と福利を何よりも求めます([ローマ 14 章 19-21 節](#))。しかし、獣の宗教の信奉者にとっては、「究極の奉仕」とは啓発ではなく破壊、すなわち、真のキリストの代わりに反キリストを受け入れることを拒むすべての人々を裏切ることです。

2. 偽預言者: ヨハネの黙示録 13 章 11-15 節

(11)わたしはまた、ほかの獣(すなわち、偽預言者:[黙示録 16 章 13 節](#), [19 章 20 節](#), [20 章 10 節](#)参照)が地から上って来るのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。(12)そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拜ませた。(13)また、[獣の偽預言者は]大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。(14)さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。(15)それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拜まない者をみな殺させた。(黙示録 13 章 11-15 節)

地上から上ってくる獣: 最初の獣が海から上がってきたのは、これまで見てきたように、その父性が人間ではないことを示すものでもあります。この第二の獣の起源が「地から」上ってくるという珍しい言葉で表現されていることも、同様に、彼も完全に人間ではないことを示すものと考えることができます(参照:[黙示録 19 章 20 節](#)、神によって、神のかたちに造られた者が受ける最後の審判という試練を受けることなく、両者は火の池に投げ込まれます)³⁶。しかし、この三者と真の三位一体との対照は、これ以上ないほど

³⁶ 興味深いことに、反キリストが他の多くの小「反キリスト」の卓越した反型であるように([第一ヨハネ 2 章 18-22 節](#), 4 章 3 節)、この第一の「偽預言者」の場合も、聖書は彼を他の小「偽預言者」のいわば典型として記述しています([マタイ 24 章 23-24 節](#); [第二ペテロ 2 章 1 節](#); [第一ヨハネ 4 章 1 節](#))。

に明白なのです。父、子、聖霊は一つの神の本質を共有し、三つの独自の個性的な位格ですが、悪魔の模倣版では、天使(サタン)、人間(地上の第二の獣、すなわち、偽預言者、参照:[黙示録 16 章 13 節](#), [19 章 20 節](#), [20 章 10 節](#))、上記のどちらでもない者、代わりにその二つを組み合わせた忌まわしいもの(反キリスト)であることがわかります。この三者のいずれも神でないことは言うまでもありませんが、だからといってそのような主張をしないというわけではなく、実際、世界はほとんどの場合、この三者に喜んで神の栄誉を与え、それを拒否する者を熱狂的に迫害することになります。

彼は[最初の獣のすべての権威をもって]行動する: 真の三位一体とサタンの模倣版三位一体とのもう一つの明確な対照は、父、子、聖霊が同格であるのに対し、模倣版三位一体には明確な階層が存在することです。最初の獣は悪魔から力と権威を受けていますが([黙示録 13 章 2 節](#), [19 章 20 節](#))、この文脈では、二番目の獣が最初の獣の明確な部下として力と権威を受けているのと同じです。この点でも、大祭司とユダヤ王制における国家首長との間に、意図的な(偽りの)類似関係が見られます。唯一の真の神を信じる私たちは、イエスが究極の王であると同時に「メルキゼデクの位による」究極の大祭司であり、私たちの罪を清めるのに十分な唯一の犠牲として、ご自分を十字架上で捧げたことをよく理解しています([詩篇 110 篇 4 節](#); [ヘブル 4 章 14 節](#), [5 章 5-10 節](#), [6 章 19 節](#), [7 章 1-3 節](#), [8 章 1-2 節](#))。しかし、反キリストは真の救い主の贖いの業を無視し、代わりに世界的な「天の王国」を制定する運命にあるメシアの威厳ある側面を強調するでしょう。イエスと十字架上の御業(すなわち、イエスの神権の真の機能)を拒否し、代わりに世界の正当な支配者であるという反キリストの主張を受け入れる人々にとっては、最初の獣とその父(悪魔)の崇拜を行うための新しい大祭司が存在することが合理的に思えることでしょう。

小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った: ここに、真の三位一体と悪魔の模倣版とのもう一つの違いがあります。父、子、聖霊はそれぞれ、神の計画の中で明確に定義され、明確に必要な役割を担っています。しかし、偽預言者の場合は、そのような明確な役割が見当たりません。悪魔が神の役割を、そのメシアの役割を反キリストが偽っている一方で、第二の獣は、真の三位一体の第三の位格である聖霊とはまったく似ても似つかないものだからです。そして、偽三位一体とそれを代表し、包含し、伝播する偽宗教は、完全に物質的な領域に固執しており、真に霊的なものには一切関わっていないので、そのような存在が欠けていても不思議ではありません。それが、偽預言者が、外見は小羊のようだが、話し方は龍のようだとされる一つの理由です。偽預言者は、反キリストのメシアとしての主張を立証し、支持しようとするのは事実ですが(それゆえ、小羊の角)、そうすることによって、サタンの計画を推進することになります(つまり、龍のように語ります)。この人物は、三位一体の他の二つのメンバーよりも

重要性が低だけでなく、完全に彼らに依存しています。この事実は、(少なくとも、まだ聖書に少しでも注意を払っている人たちにとっては)このトリオの神性に関するすべての誤った主張が嘘であるとわかります。

彼は地と地に住む人々に、先の獣を拝ませる： この聖句は、第二の獣である偽預言者が、反キリストの宗教の運営において主導権を握ることを示しています。その宗教は、拡大するという点でも、強制されるという点でも、拒否するすべての人に強制される大迫害を含めて、実施されるのです。この新しい宗教の管理および教団の中心は、多くの人が推測しているようなローマではなく、エルサレムです。獣が神の神殿に座って自らを神と宣言し、神殿の宮廷に獣の像、すなわち「(霊的) 荒廃をもたらす忌まわしいもの」が建てられるのはエルサレムだからです([ダニエル 11 章 31 節](#); [マタイ 24 章 15 節](#); [マルコ 13 章 14 節](#))。このように、神殿とそれに付随する偶像は、艱難期の半ば以降、新宗教の中心的な存在になります。そして、偽預言者は神殿とその偶像の前で奇跡を行い、反キリストの権威をもって「彼の前で」行動するのです([黙示録 13 章 12 節](#), [13 章 13 節](#))。第二の獣は、最初の獣の偽宗教を実行する際に、真の形式と慣習を偽造し、特に礼拝の中心がエルサレムの神殿に移ってからは、モーセの律法に従って、悪魔の嘘を宣伝しながらも真実に似せて作られた、一連の慣習を行うというパターンを見てとることができます：

1. 偽りの巡礼： 律法では、イスラエルのすべての男子は毎年三回、すなわち過越の祭り、初穂の祭り、仮庵の祭りに主の前に姿を現すように命じられています([出エジプト 23 章 14-17 節](#))。この文脈で語られている、偽預言者が「獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし」という証言から、多くの個人、特に著名な人が、この四十二ヶ月の間に、エルサレムに「巡礼」して、獣の足元に礼拝し、偽預言者の監視の下で獣とその偶像に敬意を払うことが予想されます(ネブカデネザルがバビロンのドラ平原に建てた金の偶像に対する行動を比較してください)。[ダニエル 3 章 1-12 節](#))。

2. 偽りの礼拝： 偽預言者は自分をイスラエルの大祭司と称し(聖書は彼にその称号を与えていませんが、実際はそうではないという正当な理由からでしょう)、この時期にエルサレムとその周辺で行われる儀式の多くは、正当ではなくても、歴史上の神殿儀式(例えば、祭司の部門の任命、アロン神権のすべての装具と道具の再建、様々な規則と規制の継続などです。しかし犠牲そのものではないようです：[ダニエル 9 章 27 節](#) 参照)に非常に似た儀式となることでしょう。このように歴史性を示すことは、本来の神殿礼拝、モーセとエリヤが再興した礼拝、真のメシアが再興する千年王国時代の神殿礼拝とは何の関係もないというのが真実です。しかし、反キリストをキリストとして受け入れるほど欺かれている人々にとっては、少なくとも何らかの形で神殿礼拝を回復す

ることは、驚くべきことではなく、エルサレムにやってきて「千年王国」の統治を始めるこの偽メシアに期待することとなるでしょう。

3. 偽りの食事制限：モーセの律法では、「聖なるものと俗なるものとを区別する」([レビ記 10 章 10 節](#))のために、食事規定が重要な役割を担っています。つまり、イスラエルが世俗の食事習慣から離れることは、はるかに重要な霊的分離の象徴であったのです([ローマ 4 章 13 節](#))。この関係を逆転させ、つまり、あらゆる側面における「律法の遵守」を基盤として、聖性や義を主張することは、新約聖書の読者であれば誰もがよく知っているように、律法の真の目的や恵みの真の意味とは正反対のものです。しかし、大祭司である偽預言者によって管理される反キリストの宗教の主な特徴は、伝統的な律法主義をさらに一步推し進め、積極的な菜食主義のシステムを導入することです。このシステムは、実践者が実際どんなに真に罪深い行動を取っていても、食事(すなわち、精神的な純粋さの代わりとなる肉体的な純粋さ)に基づく「神聖さ」と「純粋さ」の感覚を与えるのです。(第一テモテ 4 章 1-5 節; [コロサイ 2 章 16-23 節](#); [第二テモテ 3 章 5 節](#); [へブル 13 章 9 節](#) 参照)

4. 偽りの聖餐式：これらの日常的な食事制限と密接な関係があるのは、歴史的な異教徒の習慣に忠実に従った偽りの「聖餐式」です([ゼカリヤ 9 章 7 節](#)参照)。

「みずからを聖別し、みずからを清めて園に行き、その中にあるもの<英文訳:暴力をふるう者>に従い、豚の肉、憎むべき物およびねずみを食う者はみな共に(すなわち、再臨の時に)絶えうせる」と主は言われる。(イザヤ 66 章 17 節)

この聖句の文脈(前後両方、特に[イザヤ 66 章 18-24 節](#)<18-20a><20b-22><23-24>参照)は、描写されている行動がイスラエルの過去に前例がないわけではありません([イザヤ 65 章 3-5 節](#)参照)が、上記のような忌まわしい共同食事は艱難期に流行するものであることをはっきりと示しています。ですから、「暴力を振るう者」³⁷は、明らかに祭司のような役割を果たす人物で、偽預言者、反キリストの「大祭司」、偽宗教を指導する責任者だと考えるのが最も適切でしょう。この「聖餐式」では肉が食べられ、それ以外は菜食主義であることは矛盾ではありません。なぜなら、この忌まわしいものを食べることは「犠牲」を意味し、そのために、他では求められない、あるいは容認されない行為が必然的に含まれるからです。

³⁷ tavekh ではなく tokh と読む、発音の変化はあっても、MT マソラテキストの正書法は変わらない。

5. 偽りの敬虔さ：反キリストの宗教の「聖別された」行動は、食事にとどまらず、特に通常の結婚の一般的な禁止を含みます([第一テモテ 4 章 3 節](#))。本物のキリスト教は確かに結婚以外の性行為を禁止しています(例えば、[第一テサロニケ 4 章 3-8 節](#))が、決して正当な結婚を禁止していません([第一コリント 7 章 8-9 節](#))。このように、獣の宗教は真理の真逆を主張しているのです。偽預言者は、性的放縦を説き、奨励しながら([第二ペテロ 2 章 17-22 節](#)参照)、性的行為のための唯一の有効な場を禁止するように仕向けるのです。私たちは、罪を美德とし、その逆を行うこのような事例が多くあることを予期しています。偽りの敬虔さについて特によく記録されているのは、獣の崇拜者の額や右手に獣の名前(または数字)の刻印をすることです(VI.3 節で取り上げています)([イザヤ 44 章 5 節](#); [黙示録 3 章 12 節](#); 参照、[出エジプト記 13 章 9-16 節](#), [イザヤ 62 章 2 節](#), [65 章 15 節](#); [黙示録 2 章 17 節](#)参照)そこでは、過去と現在の聖書の慣習を模倣しようとする明らかな試みを見ることができます。([レビ記 19 章 28 節](#); [黙示録 14 章 9-11 節](#); 参照、[黙示録 16 章 2 節](#); [19 章 20 節](#), [20 章 4 節](#))

6. 偽りの千年王国計画：大艱難の間、反キリストは自らをメシアと名乗ります。ですから、彼の宗教がキリストの真の千年王国に関する預言を模倣して、それを利用しようとするのは、驚くべきことではありません。真の千年王国における主要なテーマの一つは、神によって定義され、主が直接管理する正義であり、それは人類史上初めて、エデンの園以来のことです([詩篇 2 篇](#), [9 篇](#), [24 篇](#), [45-48 篇](#), [50 篇](#), [68 篇](#), [72 篇](#); [イザヤ 11 章](#), [24 章](#), [25-27 章](#), [32 章](#), [34-35 章](#), [49-52 章](#), [62-66 章](#)を参照)。(千年王国の多くの物質的祝福よりもはるかに価値のある、しかしながら過小評価されている祝福である)神の世界統治による真の正義の代わりに、獣の宗教は無数の法的・社会的制約から前例のない「自由」を提供します([ダニエル 7 章 25 節](#); [第二ペテロ 2 章 17-22 節](#); 参照、[イザヤ 24 章 5 節](#))。しかしこの「自由」は、最も基本的な人権と、私たち人類が持つ最も重要な自由、すなわち、イエス・キリストを選び、現世で迫害を受けずにイエスに従い仕える権利に対する、最も非道な侵害を生み出すことになるのです。信者の視点から見ると、獣の偽りの千年王国は、「大艱難期」という神から与えられた名前によって最もよく理解できます。この最後の 42 カ月は、正義と安全の時代ではなく、「自由」の名の下に、正義と正しいこと、まっとうなことをすべて踏みじめる時代となるのです。反物質主義、ニューエイジ、ベジタリアン、リバタリアン、反商業主義にどんな良い点を見出そうとも、反キリストの疑似千年王国という文脈では、そのようなものはすべて、犯罪、無法、放縦、そして獣に反対する立場に立つすべての人々、特にその結果がどうなるろうともイエス・キリストに忠実であり続けることを決意した人々に対する司法的殺人キャンペーンを隠蔽するだけの単なる見せかけにすぎません。聖書がこの時代について述べている「自由の祝福」の一つは、反キリストが彼の支持者に代わって

行う富の再分配です([ダニエル 11 章 24 節後半](#), [11 章 39 節](#))。旧約聖書に沿った「ヨベルの年」としておそらく提示されるこの行動([レビ記 25 章](#), [27 章](#))は、貧しい人々を救いたいという動機からではなく、むしろ獣自身の支持基盤を固めたいという動機から行われるでしょう。

7. 偽りの奉仕：最後に、偽預言者である大祭司が率いる反キリストの宗教の、信者に求められる「正しい行い」とは何よりもまず、悪魔が全世界を獣崇拜に改宗させようとする試みに参加することを意味します。獣に仕えることを選んだ人々に要求されるその他のあらゆる悪徳に加えて、この最後の「十字軍」では、キリストを選ぶ自由意志の機会を強制的に侵害し、最も愛すべき人々を裏切るようなことまで行います([マタイ 10 章 36 節](#); [ルカ 21 章 16 節](#))。

大いなるしるし：偽預言者が吐く嘘よりも説得力があるのは、獣の名と悪魔の力で行うことを許された特別な「奇跡」です。聖書は、これらのしるしと不思議が最も印象的で、「地上に住む人々を惑わし」([14 節](#); [第二テサロニケ 2 章 9-10 節](#)参照)、「もしそれが可能なら」([マタイ 24 章 24 節](#); [マルコ 13 章 22 節](#))、選ばれた人々さえ惑わすことができるものであることを、ここでも、また他の箇所でもはっきりと述べています。これらの奇跡的なしるしを行うことで、私たちは再び、世の人々の目に神として映るために、神の驚異を模倣するサタンのおなじみのパターンを見ます([第二コリント 11 章 14 節](#))。さらに、第二の獣に与えられた特定の偽りの奇跡は、本物の神の力を示すものと直接的に並行しているため、特に欺瞞的です。モーセとエリヤは歴史的にも、さらに重要なことに、144,000 人の宣教活動を指揮するために地上に戻ってきたときにも、同じようなしるしと奇跡を行ったからです([黙示録 11 章 5 節](#); [列王記上 18 章 38 節](#); [列王記下 1 章 9-14 節](#)を参照)。しかし、パロの魔術師ヤンネとヤンブレが偽物のしるしと奇跡を起こすことができたものの、神がモーセを通してされた奇跡には及ばなかったように([出エジプト 7 章 11 節](#), [7 章 22 節](#); [第二テモテ 3 章 8-9 節](#)参照)、また悪魔が有史以前の創造物を操作できたものの、神の力には到底及ばなかったように、偽預言者のしるしと奇跡は、真の神の力に比べると哀れなほど欠けたものになるでしょう。しかし、未信者の世界に対する彼らの説得力を過小評価してはいけません。このような出来事を事前に考えている信者は、これらのしるしや奇跡が人間の目には本当に「本物」のように見えることを理解し、聖書の真理を理解することによってのみ、世界の他の人々のように、誤った信念を持つほど感銘を受けないようにすることができるのです。ですから、イエスを信じる者は、聖書からそうだとわかることは、私たちの目がたまたま見るものよりも常にはるかに重要であることを、いつでも(特にその時に)思い出すように努めなければなりません - 私たちがこの世界の海を航行するのは、神の真実に対する信仰によってであり、私たちがどう感じるか、何を体験するか、また私たちの目が何を見るかによつ

てではありません([第二コリント 4 章 18 節](#), [5 章 7 節](#))。どんなに印象的で説得力のあるしるしや不思議を見たとしても、それを行う者が真理に反し、私たちを迷わせようとするかどうかは真の「テスト」なのです([申命記 13 章 2-4 節](#))。

獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた：「[霊的な]荒廃をもたらす忌まわしいもの」³⁸である偶像の建設に、世界中の不信仰な人々が関わっていることは、この像が巨大で、おそらく非常に貴重な材料で造られることを示しています。この出来事の多くの側面が、バビロンの平原でネブカドネザルが高さ 90 フィート(27 メートル)の巨大な金の偶像を建てたことと密接な関係があることを考えると、この像も金で作られていると考えるのが妥当でしょう([ダニエル 3 章 1 節](#))。「獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた」とあるので、獣の宗教の大祭司である偽預言者は、この像を建てるための世界的な寄付金集めを監督するということが推測されます。偶像が設置されると、偽預言者は悪魔の力によってそれを動かします(すなわち、15 節:「獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにする」)。このように巨大で印象的な像を動かす能力は、世界の欺瞞に少なからず関与しており、エルサレムに来た多くの人々は、この前例のない光景に圧倒され、「信じる」ようになることが予想されます(ネブカデネザルは、華やかで多彩な伴奏によって同様の畏れを与えようとしたことを参照してください。[ダニエル 3 章 5 節](#), [3 章 7 節](#), [3 章 10 節](#), [3 章 15 節](#))。

その獣の像を拝まない者をみな殺させた： 獣の像の前にいる者だけが、獣の像を拝むかどうか試されるのは当然です。この節は、反キリストへの忠誠が疑われる者はすべてエルサレムに連れて行かれ、巨大な偶像の前に立たされ、その前で服従を拒否する者は直ちに死刑に処されることを示しています。処刑の方法は書かれていませんが、もし拒否した者に迫る死が、ハニヤ、ミシャエル、アザリヤ(シャドラク、メシヤク、アベデネゴ)が拒否したときに投げ込まれたのと同じような炉の中での恐ろしい火による死だとすれば、ネブカデネザルの像の時と類似するのは確かです([ダニエル 11 章 33 節](#)を参照)。この怪物のような動く巨像の恐ろしい光景と、それを拝むことを拒否したために生きたまま炎の中に投げ込まれるという見通しは、間違いなく誰にとっても耐え難いものでしょう。ただし、イエス・キリストへの信仰に堅く根ざし、この世で不忠実と証明されるよりは、火のような死でも彼に従う覚悟がある人は別です。

³⁸ [来たる艱難期：第 3 部 B:反キリストとその王国、VIII「荒らす憎むべきもの」と反キリストの「着座\(セッション\)」](#)を参照。

3. 獣の刻印 黙示録 13 章 16-17 節

(16)そして、彼(偽預言者は)は、小さい者も大きい者も、金持ちも貧しい者も、自由な者も奴隷もみな、右手か額に刻印を[その聖職者に]つけさせることを強要し、(17)その(最初の)獣の名かその名の数のどちらかの刻印を持つ者以外は、誰も売り買いできないようにした。(英文訳:黙示録 13 章 16-17 節)

この節を読むと、反キリストの大祭司である偽預言者が、「刻印」に関する政策の実行に責任を負っていることが改めてわかってきます。18 節の「獣の数」の議論に進む前に、上記の文章に含まれるいくつかの重要な点を考慮する必要があります。

1. 獣の普遍的な宗教は、世界的に強制して刻印を受けさせる: 反キリストの世界的な国家のもとで得られる市民権や市民としての利益は、すべて反キリストの普遍的な宗教への加入と参加と密接に結びついたものであると予想するのは正しいことです。なぜなら、この宗教を通してこそ、彼の「威光」が崇拜され、崇められるからです。従ってこの時期に、偽預言者が、全世界に「印をつける」目的で獣の従者全員に目に見える服従の印をつけるのを実施することは、驚くべきことではありません。この刻印を受けることが悲惨な結果をもたらすことを考えると、真の信者だけでなく、刻印を避ける未信者も不特定多数存在することになります。しかし、この刻印に抵抗することがもたらす短期的な悪影響を過小評価すべきではありません(すぐ下のポイント3を参照)。

2. 刻印をつけるのは、獣の宗教の聖職者である可能性が高い: 反キリストの宗教は、他のすべての宗教と意図的に融合しており、主に獣を神として普遍的に認めることによって区別されるので、その信奉者に印をつけるこの政策によって、そのための根本的な再構成や再編成を見出す必要はありません。おそらく、以前に反キリストの普遍宗教に組み入れられたすべての宗教とカルトの同じ司祭、牧師、イマームなどが、反キリストを信じる世界のすべての「信者」に刻印をする作業の先頭に立つことになり、この過程は本質的に民事よりも宗教的になります(しかし、それは明確な民事結果をもたらすことになるでしょう)。

3. 刻印を受けさせる圧力: 刻印はバベルの塔以来、世界が見たことのないような教会と国家の融合を達成します。刻印を受けることは宗教的な目的を持ち、宗教的な場で刻印されることとなりますが、生活の他のあらゆる領域への影響は、ほとんど無視できないものです。この文脈で述べられた刻印の拒否(つまり、刻印を受けない人は、本質的にあらゆる種類の商売を禁止される)による経済的困難に加え、獣の統治シス

テムの下では、そのような人はすべて、いかなる権利、法的手段、いかなる種類の対価も奪われた「非人間」となることが予想されるからです。17 節にあるように、獣が経済活動を重視するのは、人類を悪の集団に引き入れるという普遍的な徴兵制を進める上で、最も効果的な刺激として理解できます。法律問題、投票、各種登録などは、世界を強制的に加入させる過程で役に立つかもしれませんが、「売買」は、特に独立した農業に従事する者以外は、毎日とは言わないまでも、少なくとも毎週、必ず行わなければならない活動だからです³⁹。

したがって、日常生活の最も重要な機能的、実用的領域の一つとして、商業、特に無名の人々を商業から排除する圧力は、人類を反キリストの宗教に普遍的に加入させるための理想的な手段となるでしょう。生活必需品に加えて、商業は、悪魔の世界的な欲望システムの重要な側面のすべてに入る入口でもあるからです。

a. お金：通貨、現金、金、貨幣、あらゆる種類の腐敗しやすい資産が、過去に世界の人々の目から見て「重要」であったとすれば、このように激しい不安の時代である艱難期には、大量の流動資産の蓄積に基づく経済的安定と機会に対する双子の欲望がこれまで以上に激しくなると予想されます。明らかに、刻印の新しい強制の下で、お金を持っている人、お金を求めている人、欲している人は、お金に対する欲求、欲望の度合いに応じて、刻印を受けなければならないという圧力を、より強く感じることでしょう。刻印がなければ、金銭的な資産を得ることができないだけでなく、これまで蓄積してきたものを活用することもほとんどできなくなるからです。

b. 所有物：上述のように、獣の体制の一部として、富、特に不動産の再分配が行われます。刻印がない者にとって、新しい土地や財産を得ることは事実上不可能であり、同様に、実質的な財産を保持することも短期的には困難であり、長期的には本質的に不可能であることは、十分に想像できます。さらに、大きな固定資産のほとんどは、様々な種類と程度のメンテナンスを必要とし、そのプロセスにはある程度の商業活動も必要です。ですから、この世界が定義する意味での金持ちが、この期間、刻印を受けずにその富と財産を維持することは非常に難しいでしょう。

c. 快楽：大小、不法、合法にかかわらず、必要不可欠ではない快楽を満たすことが、現在の世界経済の大きな部分を占めています。必然的に、ほとんどの快楽を満たすために、人は商業活動に従事しなければなりません。したがって、他の理由から刻印の

³⁹ 『来たる艱難期』(The Coming Tribulation)：第2部 B: 艱難への天の前奏曲、第 IV.3 節「黒い馬：経済的制約」の「第三の騎手」についてを参照。

プロセスに抵抗することを望み、また抵抗することができる人(そうするほど頑固で大胆な人)であっても、この点では厳しい試練を受けることになります。悪魔の世界体制のこの特定の分野から、大きく締め出されることになるからです。

d. 名声: 栄光、有名になること、評判、大小さまざまな名声は、サタンの世界システムにおいて、欲望の重要な領域です。自己イメージと最終的な欲望がこの分野に結びついている人々にとって、「非国民」となり、あらゆる商業活動から締め出されることになるという見通しは、考えることさえ困難でしょう。大艱難期の間、反キリストは「名声」を事実上独占するので、刻印を受けなければ、どんな良い評判も「悪名」に変わることであり、人の見解より神の見解を重視しない人にとっては、つらい道となります。

e. 権力: 悪魔の世界システムにおける究極の欲望とは、(どのようなレベルであれ)権力欲であり、地位やその他の手段によって他者を支配するという虚妄です。一般に、これはまた(間接的であるにせよ)何らかのレベルで商業活動の基盤を持っています。しかし、いずれにせよ、大艱難期の間、権力者のその地位の保持を反キリストの恩恵によって被るので、彼らが最初に刻印を受けるのはほぼ確実です。

人間が神から離れて欲望するものはすべて、獣の刻印を拒否することによって危険にさらされるので、刻印を受けることは、直接的な「合法的」商取引を控えるだけで簡単に避けられると考えるのは、間違った考えです。その結果、地下組織に身を潜めたり、神への愛からではなく、一般的な原則に基づいて制度を回避しようとしたりしても、刻印を受けたくないとする多くの(つまり、自分の意思で入れたわけでもない大きな入れ墨を体に入れることは、クリスチャンに限らず、多くの人々を不愉快な気分させるに違いないのです)が、最終的に刻印を受けることになります。そうでなければ、世俗的な世界の多くの人々にとって「生きる価値のある人生」を追求し、楽しむことが全くできないか、少なくとも著しく妨げられることに気づくからです。

神を知る者にとっては、この世のものを失い、多くの者は自分の命そのものを失うこととなりますが、それは真の祝福であり、私たちのために死んでくださった主のための迫害と殉教の特権となります(世間はそのように認識しないでしょう)。しかし、信じていない人々にとって、刻印を受けることを拒否することのマイナス面は、明白な利益がなく非常に恐ろしいものであり、最も頑なな独立心の強い人たちだけが挑戦することになるでしょう。一つ確かなことは、この時点で、上記の五つの領域で定義された「何かを持っている」人は、刻印を受けると神の裁きが確実となるにもかかわらず、刻印を拒否してすべてを失う前によく考えることでしょう([黙示録 14 章 9-11 節](#), [16 章 2 節](#), [19 章 20 節](#), [20 章 4 節](#)参照)。大艱難期の間、サタンの世界システムの欲望を交錯させるこれら五つの主要な欲望の蜘蛛の巣の中心には、獣自身とその宗教、すなわち神への

崇拜よりも悪魔を崇拜するサタン主義があるからです。そして、これこそが悪魔の戦略であり目的なのです。神よりもサタンを選んだ証として、自らの「自由意志」で刻印を受けた者だけが住む世界を、神に見せつけることです。

4. 刻印は、永久的で目に見える入れ墨のような形をとります：ここで「刻印」として使われているギリシャ語はカラグマ(χάραγμα)で、一般的に銘刻や彫刻などの永久的な刻印をされたものを意味します(英語の派生語「character(キャラクター)」を参照のこと)。文脈とその論理は、確かに同じことを示唆しています。なぜなら、反キリストが簡単に剥がせる刻印を必要とする目的は、ほとんどないからです。要は、目に見え、かつもとに戻すことができない方法で、世界が反キリストを選ぶように仕向けることであり、永久的で簡単に目に見える入れ墨を要求することは、確かにこの目的を達成するのです。しかし、獣の忠実な者たちへの「刻印」は、私たちの主が私たちに施される印とはあまりにも異なるものなので、これに関してコメントする必要があります。私たちは聖霊によって封印されていますが、これは私たちのために神がなされた行為であり、あらゆる面で良い結果をもたらす目に見えない霊的な行為です([第二コリント 1 章 21-22 節](#); [エペソ 1 章 13-14 節](#), [4 章 30 節](#))。反キリストとサタンのために刻印を受けることを選ぶ人々は、短期間の物質的利益のために物理的に封印されており、いかなる霊的な良い結果ももたらさないのです。実際、刻印を受けることは断罪を保証するものです。[\(黙示録 14 章 9-11 節, 16 章 2 節, 19 章 20 節, 20 章 4 節 参照\)](#)⁴⁰。

5. 刻印の押される場所が二箇所あることの意味：なぜ、刻印の押される場所が二箇所あるのでしょうか。つまり、額に受けた刻印は、単に手に受けた刻印よりも「良い」と見なされると考えることができます。この区別は、各人がどこで受けるかを決めるということも可能ですが、より可能性の高いシナリオは、エリートだけが額に刻印を受けることを「許され」、刻印を受けた者は単に普遍的な強制に応じるのではなく、反キリストの宗教の熱心な会員であることを示す名誉のバッジとなることでしょう。この二本立てのシステムの危険性は、刻印を受けるよう圧力を受けている人々が、(神の警告に反して)(手の刻印は熱意というより黙認の態度を表すからというので)額の刻印だけが霊的に危険であると思いを違えることです。しかし、実際には、どちらかの場所に刻印を受けると、「神の怒りを飲む」原因になるのです([黙示録 14 章 9-11 節](#))。

6. 二つの刻印の違いによる意味：偽預言者が全世界に反キリストの刻印を押させるように要求した場合、もう一つの選択肢が与えられます。それは、名前の代わりに「その名の数」を受けるといったものです。[17 節](#)では、額の刻印が二番目に来るように、番号

⁴⁰ [「来たる艱難期」第 2 部 B: 艱難への天の前奏曲、V. 「144,000 人の封印」](#) 参照。

が二番目に来るという事実は、これが獣への深い関与を意味する「より良い」選択であることを示唆しています。18 節が獣の数の意味を説明することで占められていることも、この分析を裏付けています。名前と数字を額か手につけることができる以上、このシステムには、反キリストへの献身の四つのレベルの階層があると考えられます。

最高レベル: 最高位: 額に数字

二番目に高い: 額に名前

三番目に高い: 手のひらの数字

最低: 手のひらの名前

上記のように聖書は、神の目にはこの階層の最高位と最下位の区別がないことを明確にしています。なぜなら、この四つの印のどれかを取ることによって、その人は反キリストとその父である悪魔に故意に身を投じることになり、その過程で定義上、必然的に父なる神とその子、私たちの主イエス・キリストに故意に背を向けることになってしまうからです。ここで、もう一つ重要なことがあります。獣はあらゆる方法で真のメシアを模倣しようとするので、獣の「名前」が何らかの形でイエスの名前や称号を模倣する可能性が非常に高いのです。しかし、アルファベットが数字を表すギリシャの数字体系で計算すると、いくつかの神の名前が必要な「600と66」に非常に近くなることは注目に値します(注: 今日私たちが使っているアラビア数字の体系はずっと後になって開発されたものです)。例えば、ギリシャ語で救世主を意味する「メシアス(Messias)」(Μεσσίας)は、666 という数字から 1 文字(イオタ<この文字イオタ ι に相当する数(数価)は 10>)だけの差があるだけです(ギリシャ語の数字表記で 10 に相当する数字の文字を並べれば、この差は簡単に埋め合わせることができます) <訳者: このことに関しては次のセクションでもう少し説明があります>。もしこの言葉、または様々な方法で計算された他の正当な神聖な称号が、反キリストの名前であると判明した場合、少なくとも、強制下にある一部の信者が、印を付けることを主の名前であると理屈づける危険性があります。(なぜなら、少なくとも何らかの表向きの形でそうである可能性があるからです)。しかし、聖書は、刻印がどんなに無害に見えても、またどんな別の意味を持たせても、それは究極的に不忠実の行為となり、それまで信者であった人は、その行為によって信者でなくなるという事実を断固として表明しています。どの姉妹、兄弟であっても刻印を受け取ることは信仰の死を意味するのです([黙示録 14 章 9-11 節](#); [16 章 2 節](#) 参照; [19 章 20 節](#); [20 章 4 節](#))

4. 獣の数 黙示録 13 章 18 節

ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、[その時には]獣の数字を解く[計算する]がよい。その数字とは、人[の名前]をさすものである。そして、その[すなわち、獣の]数字は六百六十六(すなわち、666「通り」)である。(黙示録 13 章 18 節)

[17 節](#)では、刻印の代替形が「彼(=獣)の名前の数」であると明確に言われているので、ここで言われている「獣の数」は、その前の節で言及された反キリストの名前と同じ数字でなければなりません。つまり、「六百六十六」という数字は、獣の名前を表す数字であると同時に、刻印の代替(上位)形式としても機能するのです。

獣の数字そのものを検討する前に、獣の「名前」について少し触れておく必要があります。なぜなら、その名前は、数値と共に、他の刻印の形式にも登場するからです。ここで与えられている「知恵」は、決して神秘的なものではありません。その時、この問題について聖書が述べていることに「気をつけていて」、注意を払うだけで、提供された数式は、何が本当の「獣の印」であるかについてのすべての疑いを簡単に払拭し、信者がそれを識別するのに全く問題がない(そしてそれを避けるのに間違いない)ようにするのです。新約聖書の一部であるこの書はギリシャ語で書かれているため、その数値の「名前」を計算するために、ギリシャの数詞体系を採用しなければなりません(西洋でアラビア数字が普及したのは 15 世紀になってからです)。ギリシャ式では、アルファベット(一部の記号も含む)の各文字に数値が設定されており、最初の文字であるアルファは 1 に、最後の文字であるオメガは 800 に相当します。例えば、ヘブル語のメシア(「油注がれた者」の意)をギリシャ語<メシアス>に訳すと、次のようになります。

$$\text{メシアス } \text{M} \epsilon \sigma \sigma \iota \alpha \varsigma : \quad \text{M} = 40 \quad + \quad \epsilon = 5 \quad + \quad \sigma = 200 \quad + \quad \sigma = 200 \quad + \quad \iota = 10 \quad + \quad \alpha = 1 \quad + \quad \varsigma = 200 \quad \rangle = 656$$

アラム語の「来て!」という命令形の言葉(参照. マラナ・タ Marana tha!「主よ、来たりませ」)を加えることで、600 と 66 の数に満ちる一句となります(セータ θ とアルファ α はそれぞれ 9 と 1 なので、 $\theta \alpha = +10$ となります)。読者がこのことに興奮する前に、すぐにわかるはずのことを指摘しておきましょう。つまり、このような算出で、666 に相当する名前を作る可能性は、無限とは言わないまでも、計り知れないほど大きいのです。このため、[黙示録 13 章 18 節](#)に書かれている情報では、反キリストの名前を事前に知

ることはできないのです。なぜなら、仮に幸運にも実際の名前の正確な文字の並びを発見できたとしても、その並びが唯一正しいものであるかは、反キリストの到来前に判断する方法は全くないからです。ですから、[黙示録 13 章 18 節](#)に示されているのは、反キリストの正体を**事前に**把握するための鍵ではありません。そうではなく、獣の名前が確定した**後に**、その獣が本当に反キリストであるかどうかを評価するための分析ツール、あるいは「リトマス試験」なのです。あらゆる名前をギリシャ語に音訳するだけで、その名前が 666 という数字を持つかどうかを比較的容易に調べることができます。このような暗号は古代にはよく見られた(よく「ゲマトリア」と呼ばれています)もので、例えばポンペイから出土した落書きには恋人たちの名前がこの方法で隠されていたり、地中海のギリシャ語圏にある葬儀の記念碑には、亡くなった人の名前を文字数の合計に置き換えて謎を解くように呼びかけているものがあります。このような謎は、前述したように、大きな数字に当てはめることができる名前の数は無限であるため、手がかりがなければ解くことは不可能です。例えば、比較的小さな数字「10」は、単独のイオタ ι <10>、アルファ α <1>+シータ θ <9>、ベータ β <2>+イータ η <8>、などなど。そして、数字が大きくなればなるほど、その可能性は幾何級数的に大きくなります。

また、一旦、世界的に刻印が始まると、音訳の問題はあるにせよ、その時に発生する獣の刻印を正確に解読することは、かなり簡単なことであることにも注意しなければなりません。しかし、刻印に使用される彼の名前の正確な形が明らかになる前には、反キリストを発見するための最善のリトマス試験紙にはなりそうもありません。例えば、刻印には姓のみを入れるのか？ それとも名前だけなのか？ さらに言えば、反キリストがエルサレムの神の神殿に着座し、自らを神であると宣言する時点で、何らかの形で名前を変えるのか。要は、この特定の刻印に登場する名前の正確な形が一般に知られるようになるまでは、ここで推奨されている計算をする意味はほとんどないということです。聖書を信じるクリスチャンは、聖書がこの情報を与えるのは、実際に刻印が始まった時点だけであることに注意すべきであり、全世界的な刻印のプロセスが始まる前に反キリストを特定しようとする試みは無意味であることを明確に示しています。いずれにせよ、艱難期の半ばまでに、イエス・キリストを信じる真の信者で、少しでも霊的な識別力を持つ者が、世界を支配するようになり神の神殿そのものに侵入した独裁者が反キリストであることを知らないはずがありません。ここで本当に危険なのは、艱難期の初期に信者が獣を見分けられなくなることです。その理由は、**その時に**現れる獣の名前が、18 節で与えられた公式と一致しないように思われるからです。

666 の意味：ここでまず強調したいのは、私たちは必ずしも三つの連続した数字「6」、つまり、連続する数の 6-6-6 とは関係を持つ必要はない、ということです。私たちのアラビア数字(西洋の印刷機の発明からあまり時間が経っていない)のシステムでは、確

かに 600 と 66 という数字と 3 つの連続した 6 で表される数字の 666 との間に区別がありません。しかし、ギリシャ語では全く違います。黙示録の言語であり、したがってこの問題を正しく理解するために採用されなければならないシステムの基礎であるギリシャ語では、600 と 66 は二つの文字と一つの記号、すなわち χ 、 ξ 、 ς で表されます。このことが意味するのは、「獣のしるし」を三つの 6 が連続するものとする一般的な理論が、まったく間違っているということです。三つのアラビア数字の「6」が反キリストの名を表す本質的な刻印を構成する可能性は確かにありますが、そうでなければならぬ納得のいく理由は何もないのです。アラビア数字の 666 がギリシャ語体系では異なる表記になるように(すなわち、 χ ξ ς として)、また当時のローマ語体系(すなわち、ローマ数字 666 = DCLXVI)とヘブル数字 (666 = 𐤂𐤇𐤂) となるギリシャ文字に似たアルファベット文字) に対して、当時存在しておらず後に現れた西洋のアラビア数字に与えられたほどの考慮を、同等に向けるべきであることも指摘されています。さらに、反キリストが 666 という整数を表すために、例えば、2 進法(テクノロジーを強調)、12 進法(バビロニア神秘主義を強調)、あるいは他の数学的、幾何学的、神秘的象徴体系、おそらく現存しない彼自身の考案したものを採用しないとは、事前に言えるはずはないのです。要するに、識別力のあるクリスチャンは、アラビア数字の 6 が三つ(すなわち 666) でない刻印は、「獣の刻印」であるはずがないと思ひ込むわけにはいかないということです。

この数字自体の意味も、その外見と同様に長い間、様々な憶測を呼んできました。「円周率」のように、6 の繰り返しシステムは、反キリストが自分自身と悪魔崇拜のシステムを巡って作り出す神話にとって、何らかの意味を持っているのかもしれませんが。キリスト教徒として、私たちはむしろ、666 が単一の整数、6 の連続、または循環数として見られるかどうかに関わらず、どの観点においても、完全(すなわち、完全な数である 7) から「1 つ」、すなわち、道であり、真理であり、命である真の救い主イエス・キリストを拒絶することで、完璧さに欠けていることを指摘したいと思います。⁴¹ この種の議論において一般に理解されていないことの一つは、英語と違ってギリシャ語の数字は時として減少 < 666 に足りない数である場合も > 可能で、この事例もそのようなものです。具体的には、[黙示録 13 章 18 節](#)の「六百六十六」は女性格であり⁴²、この文章は「六百六十

⁴¹ 完全性と完結性を表す数字としての「7」の重要性について、天地創造の 7 日間、人類の歴史の 7 千年、神の 7 つの霊(すなわち、完全性の規範として記述されている聖霊: [イザヤ 11 章 2-3 節](#); [黙示録 1 章 4 節](#), [1 章 20 節](#), [3 章 1 節](#), [5 章 1 節](#)); 参照. [詩篇 12 篇 6 節](#), [119 篇 164 節](#); [箴言 6 章 16 節](#), [9 章 1 節](#))。さらなる参照および議論については、J.J. Davis 著『Biblical Numerology』(Grand Rapids 1968) 116-を参照のこと。

⁴² 私たちは、シナイ写本(ⲛ)とエフラエミ・レスクリプタス写本 Ephraemi Rescriptus (C) という、ギリシャ語テキストの最良の古代の検証資料となる二つの写本に、600 を意味する「hexakosiai (ἑξ α κ ὀ σ ι α ι)」という女性形の数字を見つけました。

六の(形容詞女性格)〇〇」という意味で、文脈から読者がその空白を埋めることができるようになっているのです。これはギリシャ語ではよくあることで(形容詞が変化しない英語とは違って)、形容詞の語尾に含まれる情報から、特定の名詞の出現や繰り返しが容易に推測することができるのです。もちろん、<この聖句の>文脈には<形容詞に続く>女性名詞は存在していません。このような状況であるからこそ、他の様々な版で語尾を男性格や中性格に変えたり、記号表記(前述の 666 に相当するギリシャ語: $\chi \xi \varsigma$)を用いてこの問題を完全に排除したりしたかったのでしょう。しかし、実際には、名詞を伴わない形容詞女性格のケースは、ギリシャ語では前例がないわけではなく、そのような状況でよく使われる普通名詞の短いリストが一般に理解されています。このような状況で用いられる最も一般的な名詞は、ギリシャ語で「道」を意味するホドス hodos ($\acute{o} \delta \acute{o} \varsigma$; 参照. 「オドメーターodometer」 = 「道路測定器 road-measurer」)で、これがここで用いられる名詞となります。666 は無限に繰り返される暗号を表すので、「666 とおりの道」とは、獣の宗教体系における「救いへの道」のすべてを含む、事実上無限の数と理解することができます。反キリストとその父である悪魔を神として崇拝することだけを条件として、他のすべての宗教的、伝統的、あるいはカルト的实践は容認され、個々の崇拝者を「救う」ために有効であるとみなされるのです。しかし、実は、この暗号は無意味な繰り返しを終わらせ、代わりに完成と成就をもたらす「一つ」を省いています。「一」とは、唯一無二の真の「道」である私たちの主、救い主イエス・キリスト([使徒行伝 9 章 2 節](#), [19 章 9 節](#), [19 章 23 節](#), [22 章 4 節](#), [24 章 14 節](#), [24 章 22 節](#); [第二ペテロ 2 章 2 節](#)参照)です。

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

VII. 大迫害 ヨハネの黙示録 14 章 1 節-15 章 8 節

1. 大迫害が、艱難期の後半を「大」いなるものにしていきます: このシリーズで、キリストの再臨前の人類史の最後の七年間を特徴づける「苦難」と「艱難」は、聖書ではまず第一に信者の立場にとってのものであるということを繰り返し指摘してきました([ダニエル 12 章 1 節](#); [マタイ 24 章 21 節](#), [24 章 29 節](#); [マルコ 13 章 19 節](#), [13 章 24 節](#)を参照)。確かに、これから起こる恐ろしい時代の出来事の多くは、神の民に重くのしかかるでしょう。しかし、信者はその最悪の事態(すなわち、不道德な者に向けられた神の裁き)からかなり保護されるのです。大迫害はその例外で、殉教が広まったために、かつてないほどの数の信者が、私たちが原理的に理解すべきこと、すなわち、私たちの

真の安全は、この一時的な肉体的生命にしがみつことではなく、イエス・キリストとの永遠の関係にあることを実践しなければならない最大のテストの時代となります([マタイ 16 章 25 節](#); [マルコ 8 章 35 節](#); [ルカ 17 章 33 節](#); [ヨハネ 12 章 25 節](#); [黙示録 12 章 11 節](#))。

反キリストの旗の下に地球が統一され、その結果もたらされる一つの世界の「平和」は、獣とその父悪魔の策略をけん制する対抗力を排除してしまうことによって、人類史上最悪の事態となるでしょう。このことは、反キリストが権力を握ってから間もなく始まる大迫害に関して、特に信者に当てはまります。世界が悪で統一されている以上、隠れる場所も逃げる場所もないのです。御心のうちに殉教に定められている者は殉教し、生き延びるべき者は主の再臨まで迫害に耐えなければなりません([黙示録 13 章 10 節](#))。

黙示録の 13 章と 14 章に書かれているように、大迫害は、艱難期後半である大艱難が始まって間もなく始まるのです。これまでの出来事を簡単に説明すると、南方同盟を完全に打ち破った反キリストは、すぐにエルサレムに首都を建設することに目を向けます。この時、獣は暗殺の標的となりますが、彼の目覚しい回復と勝利によって、世界の大多数の人々が獣に有利になるように仕向けるでしょう。この暗殺未遂を口実に、反キリストはモーセとエリヤを殺し、神の神殿を占拠して自らを神と宣言し、神殿の中庭に「[靈的]荒廃をもたらす忌まわしいもの」を建立するのです。二人の証人と 144,000 人の働きに応えたイスラエルの人々は、このとき荒野に逃げ込み、獣が彼らを捕らえて滅ぼそうとするのを神の介入によってかわすでしょう。このような試みに挫折した獣は、大迫害を開始します。これは、イエス・キリストを信じるすべての真の信者に向けられた恐怖の支配で、その実施は、反キリストの世界宗教体制の確立の一環となるのです。

龍は、女(すなわち、逃れるユダヤ人信者)に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。(黙示録 12 章 17 節)

暗殺未遂事件で信者がスケープゴート(悪者に仕立て上げられ、標的)にされることは、イスラエルと世界のすべての信者に対して強烈な反応を引き起こすという二重の効果があります。また一方で、不信仰な人々が、その刻印を受け入れることで、この問題に関して自分には非がないことを示そうと躍起になり、さらに、このリトマス試験によって「裏切り者を炙り出す」ことに熱心かつ意欲的になるという、猜疑心が蔓延する環境にもつながるでしょう。こうして、反キリストの世界支配のごく初期の段階から、来たる艱難期を最も明確にし、特徴づける出来事、すなわち大迫害の舞台が整えられるので

す。

2. 鍵となる聖句 : 「大迫害」という言葉は、前にも述べたように、この研究のために作られた造語です。しかし、世界が見たこともないような信者への迫害がこの時期に起こること(そして、その恐ろしい性質によって、艱難期の後半を「大」いなるものにする)ことは、特に黙示録にある、この出来事を扱う主要、かつ幾多もの箇所とその具体性から明らかです(ただし、これらに限るものではありません)。

(9)小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。(10)彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる主よ。いつまで[待っておられて]あなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」。(11)すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、「彼らと同じく殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように」と言い渡された。(黙示録 6 章 9-11 節)

コメント: この三年半の動向を扱う封印は第五と第六の二つだけであり(第七の封印は「巻物を開」いて、七年の期間そのものを開始する役割を果たします)、第六の封印はハルマゲドンとその関連事象に言及していることが思い起こされるでしょう。したがって、この封印が艱難期の後半の大部分を特徴づける唯一のものであることは、大迫害がその時代の決定的な出来事であることを示しています。

(9)その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、言語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立ち、(10)大声で叫んで言った、「救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる」。(11)御使たちはみな、御座と長老たちと四つの生き物とのまわりに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を拝して言った、(12)「アアメン、さんび、栄光、知恵、感謝、ほまれ、力、勢いが、世々限りなく、われらの神にあるように、アアメン」。(13)長老たちのひとりが、わたしにむかって言った、「この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか」。(14)わたしは彼に答えた、「わたしの主よ、それはあなたがご存じです」。すると、彼はわたしに言った、「彼らは大きな患難をとおってきた<英訳: 大艱難から出て来ようとしている>」人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。(15)それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で

神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。(16)彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。(17)御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいにとって下さるであろう」。(黙示録 7 章 9-17 節)

解説: 殉教した人は数え切れないほど多く、大迫害の規模をはっきりと示しています。さらに、これらの殉教者は「すべての国民、部族、民族、言語から出た」という事実が、迫害が全世界的なものであることを示しています。14 節で天使が言っているように、この殉教者は「大艱難から出て来ようとしている」ところ、つまり七年の期間の後半にいるのです。

(7)さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、(8)勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所[避難する所]がなくなった。(9)この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。(10)その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、

「今や、われらの神の救と力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえて彼らを訴える者は、投げ落された。(11)兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼にうち勝ち、死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。(12)それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちはわざわざいである。悪魔が、自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」。(黙示録 12 章 7-12 節)

解説: 11 節では、殉教者はこの時代に生きているすべての信徒とほぼ同じ意味で表現されており、大迫害の範囲を示しています。艱難の半ばでサタンを打ち倒し(9 節)、その残り時間が短いことを宣言している(12 節)ことから、大迫害の時期が最後の 3 年半であることがさらに明確になっています。最後に、この大艱難期の概要からも、信者の立場から大迫害がこの期間を支配する出来事であることが分かります。

龍は、女(すなわち、逃れたユダヤ人信者)に対して怒りを発し、女の残り

の子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。(黙示録 12 章 17 節)

解説： ちょうど竜であるサタンが、自分の息子である獣のもとに集まった世界の政治体制の新しい支配力を、イスラエルのユダヤ人信者の滅亡に利用しようとしたように、今度は、艱難期の中頃に、「残りの子ら」、つまり世界中の異邦人とユダヤ人信者の滅亡に目を向けるでしょう。この箇所は、大迫害の時期を確定し(つまり、獣の勝利とエルサレムへの本部移転の直後に、ユダヤ人信者が脱出する)、迫害が世界的になることを示し(つまり、対象は「彼女の子孫」の残りすべて、つまり特別な保護区に移されなかったすべての信者)、その恐ろしい性質を明らかにします(つまり、信仰者の消滅を目的とする「戦争」です)。

「とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。」(黙示録 13 章 10 節)

解説： 主のこの警告は、来たるべき大迫害の激しさについても、それを避ける可能性についても、一切の疑念を払拭するものです。死か牢獄かの二つの結果しか想定されていません。それ以外の結果も排除されているわけではありませんが、この箇所は、それが原則ではなく、例外であることを示唆しており、したがって、私たちがこれらの厳しい現実に対して事前に覚悟を決めることを促しています。

それから(偽預言者は)、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。(黙示録 13 章 15 節)

解説： ここで、大迫害が獣の世界的な宗教の設立の中心であることがわかります。真の信者が選別されるのは、反キリストを崇拝するかどうかというリトマス試験によるものだからです。この箇所は、殉教者の数が非常に多いことも明らかにしています。なぜなら、礼拝を拒否するという立場に「立たされることになった」信者は、すべての場合において死の宣告を受けることになるからです。

またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた、「書きしるせ、『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』。御霊も言う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。(黙示録 14 章 13 節)

解説: この聖句は、どのような形であれ獣の宗教を避けるようにという最も厳しい警告(すなわち、[黙示録 14 章 9-12 節](#)の第三の天使の宣言[これについては、以下の VII.2.c 節参照])の直後にあり、信者が自信と平安を持って殉教に立ち向かうように励ましています。このような慰めが必要なのは、大迫害がその範囲において普遍的で、主との密接な歩みなしには生き残れない恐ろしい体験になることを確実に示しています。

(14)また見ていると、見よ、白い雲があつて、その雲の上に人の子のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかまを持っていた。(15)すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、雲の上に座している者にむかって大声で叫んだ、「かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた」。(16)雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のものが刈り取られた。(黙示録 14 章 14-16 節)

解説: 後述(VII.3 節)するように、刈り取る者はイエス・キリストを表し、大迫害で殉教した信者は収穫物です。この箇所は、大迫害が偶然ではなく、神の栄光と証人の忠実に反映され、殉教者の究極的な利益のために計画された神のご計画の不可欠な部分であることを示しています。彼らは熟した作物のように、まさに正しい時期に取り除かれ、大艱難期の最後の裁きを免れる一方で、純粹にイエス・キリストのために殉教した人々に生じるすべての報いを受けることができます。大迫害が劇的で世界的なものになることは、上記からも明らかです。

(2)またわたしは、火のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った<英文訳:「勝利を勝ち取っている[過程にある]>人々、神の立琴を手にして立っているのを見た。(3)彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌って言った…(黙示録 15 章 2-3 節前半)

解説: この箇所は、大艱難期を乗り越えた勝利の殉教者を表すと思われがちですが、彼らが実際にガラスの海の上に立っていることから、地上の出来事が天から見える、いわば「覗き穴」であり、地上にいながら大迫害に耐える信仰者らの姿であることが分かります。このガラスの海は、4 章に記述されているように、「火が混じっている」⁴³と記述さ

⁴³ 「来たる艱難期」第2部B:「[艱難期の天の前奏曲](#)」I、黙示録4章1-11節参照。

れていますが、これは、その時代の信仰者が経験する試練の激しさを明確に、おぼろげなところがほとんどなく象徴されているものです(第一ペテロ 1 章 7 節, 4 章 12 節; ダニエル 11 章 33 節; ヘブル 11 章 34 節を参照)。この解釈は、忠実な人々の忍耐を表す分詞がここでは現在形が使われており、本来なら「勝利を勝ち取っている[過程にある]」と訳すべきで、彼らの状態がまだ激しい試練の中にあることを表現しているのです。⁴⁴ 上記の箇所は、信仰を保ち続けるすべての信者が、獣に対する「勝利を勝ち取っている[過程にある]」人々と同じ本質的な部類に属すると表現し、イエス・キリストへの信仰を保つ者は誰も火や戦いから(幸いにも、私たちが贖ってくださった主のための勝利の戦いの栄誉からも)免れることはないことを示唆しています。

また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた(=裁きの場に座った)。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また[すなわち]、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。(黙示録 20 章 4 節)

解説: 新約聖書の多くの重要で具体的な箇所(特に第一コリント 15 章 50-55 節と第一テサロニケ 4 章 13-17 節)から、かなりの数の信者が大迫害を生き延び、キリストの再臨の時にまだ生きているうちに復活することが分かっています。この聖句が、獣を拝むことを拒むことと処刑されることを同一視していることは、大迫害の激しさと殉教が広範囲に及ぶことを明白に示しています。

(21)わたしが見ていると、この角(すなわち、反キリスト)は聖徒(すなわち、信者)と戦って、彼らに勝ったが、(22)ついに日の老いたる者がきて(すなわち、私たちの主の再臨)、いと高き者の聖徒のために審判をおこなった。そしてその時がきて、この聖徒たちは国を受けた。(ダニエル 7 章 21-22 節)

解説: 黙示録 12 章 17 節のように、大迫害はここでは「戦争」と表現され、反キリストは主の再臨まで信者を「征服」(=処刑)し続けます。つまり、大迫害の影響を受けない

⁴⁴ この点については、各版で普遍的に誤解があり、例えば欽定訳では“that had gotten the victory”「勝利を得た者」; NASB では“who had come off victorious”「勝利を得た者」; NIV では“who had been victorious”「勝利を得た者」と誤って表現されています: <和訳においても、「うち勝った」(口語)「打ち勝った」(新改訳IV)>

中立の立場の信徒はいないということです。さらに、獣が再臨まで「勝つ」ため、犠牲者(殉教者)は恐ろしく多くなるでしょう。

彼(反キリスト)は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒(すなわち、信者)はひと時と、ふた時と、半時の間(すなわち、大艱難期の間)、彼の手にわたされる。(ダニエル 7 章 25 節)

解説: この箇所では、反キリストが信者を迫害する(字義通りには、「すり減らす」、「消耗させる」)期間が、大艱難の全期間(「ひと時と、ふた時と半時」すなわち三年半)にわたって続くと定めています。上記の V.2.2 節で述べたように、大迫害は、獣の宗教改革とそれと無関係ではない過激な社会改革の実施と直接結びついており、その結果、すべての信者が主の再臨まで「彼の手中に入る」(すなわち、迫害の対象になる)のです。

(10)それ[小さな角]は大きくなって天の軍勢(すなわち、神の家族、人間と天使の両方)に達し、天の軍勢(すなわち、反キリストが信者を誘惑して背教させる)と星のいくつかを地に落として(すなわち、サタンが天使を誘惑して反逆させて)、これを踏みつけ、(11)軍の長(すなわち、キリスト)に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基(すなわち、内庭)はくつがえされた。(12)背きの行いにより、軍勢(すなわち、信者)は常供のささげ物とともにその角に引き渡された(すなわち、大背教)。その角は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。(13)私は、一人の聖なる者が語っているのを聞いた。すると、もう一人の聖なる者が、その語っている者に言った。「常供のささげ物や、あの荒らす者の背き、そして聖所(すなわち、内庭)と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことか。」(14)すると彼は答えて言った。「二千三百の夕と朝が過ぎるまで。そのとき聖所の正しさが確認される。<口語:聖所は清められてその正しい状態に復する>」(新改訳IVダニエル 8 章 10-14 節)

解説: この箇所(参照 [ダニエル 8 章 23-25 節](#))は以前、大背教の説明で取り上げましたが⁴⁵、主に艱難期の前半で、信者をイエス・キリストから遠ざけるために、誘惑が主な手段になることを述べています。しかし、上記の節で明らかに予示されているのは、近い将来、勧誘が強制に変わり(つまり、12 節では「軍勢は引き渡された」、13 節では

⁴⁵ [「来たる艱難期」第 3 部 A:「第七の封印から二人の証人まで」II.「大いなる背教」](#) 参照。

「軍勢が踏みにじられた」になっています)、その状態は私たちの主が再臨される時のみ、終止符が打たれるということです。

(32)彼は[人々を]誘惑して契約を破らせようとするが、自分の神を知る民は契約を堅く守り続ける。(33)民の中で見識のある者は、剣(=殉教)、炎(=殉教に至る拷問)、捕囚(=投獄)、略奪(=財産没収)によってしばらくの間迫害される民に教えるであろう。(34)また、迫害されるとき、彼らは少しばかり助けを受けるが、多くの者は偽って彼らに味方する。(35)洞察力のある者たちの中からも、最後の終わりまで、磨き、清め、清くするために、迫害される者が出るであろう。終りはまだ、定められた時まで来ないからです。(英文訳:ダニエル 11 章 32-35 節)

解説: この聖句は、イエス・キリストを「堅く信じ」続ける人々が経験する苦難の時代について、最も明確に述べている箇所です。反キリストが忌み嫌われるものを設立し(31 節)、その試練が「最後の終わりまで」続くという文脈の中で、この箇所は大迫害の期間を本質的に大艱難期の最後の 42 ヶ月間にわたることを確立し、同様に「剣と炎と捕囚と略奪」という苦しみをその対象者全員にもたらすのです。

(8)しかし、すべて(3-7 節の)これらは産みの苦しみの初めである。(9)そのとき(=大艱難期の始まりに)人々は、あなたがたを<英文訳:裏切って>苦しみにあわせ(=大迫害)、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。(マタイ 24 章 8-9 節)(参照:[マタイ 10 章 16-33 節](#); [マルコ 13 章 9-13 節](#); [ルカ 21 章 12-24 節](#))

解説: 主のこの言葉は、ダニエルの過去の預言とヨハネの黙示録の後の預言を確かなものとし、前例のない規模と激しさを持つ艱難の第二段階、つまり最後の段階に前例のない規模と激しさを持つ迫害が起こるという現実を、確かなものとしています。それは「大」いなる、としか表現できないような迫害です。

上記は、大迫害を直接的に詳しく説明している主要な箇所に過ぎませんが、この一般的に過小評価されている教えが聖書では強調されていること、また「時代の終わりに臨んでいる」([第一コリント 10 章 11 節](#))私たち全員にとって絶対重要であることを示すには十分でしょう。また、大迫害について言及している箇所はこれだけではありません([イザヤ 24 章 16 節](#); [エレミヤ 31 章 2 節](#); [ミカ 7 章 1-7 節](#); [ヨハネ 16 章 1-4 節](#); [第二テサロニケ 1 章 6-10 節](#); [エレミヤ 9 章 4 節](#); [12 章 5-6 節](#), [31 章 2 節](#)を参照のこと)。例えば、艱難の終わりに地上に起こる神の怒りは、聖書では一貫して「聖徒の血」に対

する直接的な神の応答、すなわち、大迫害の直接的結果として反キリストとその王国とその手先に下る神の裁きとして特徴づけられています(例えば、[イザヤ 26 章 20-21 節](#); [第二ペテロ 3 章 10 節後半](#); [黙示録 16 章 5-6 節](#), [17 章 6 節](#), [18 章 24 節](#), [19 章 2 節](#))。結論として、世界史のどの時代にも信者に対する迫害が常にあったことを述べておきます。したがって、この一般的なテーマを扱っている多くの聖書箇所は、むしろ、来たる迫害の中核である大迫害の期間において、より重要で、当てはまるものとなります(参照: [エレミヤ 45 章 1-4 節](#); [ミカ 7 章 1-7 節](#); [マタイ 13 章 21 節](#); [ヨハネ 15 章 20 節](#), [16 章 33 節](#); [使徒行伝 14 章 22 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6-10 節](#), [3 章 3 節](#); [第二テモテ 3 章 12 節](#); [ヘブル 11 章 32-40 節](#); [第一ペテロ 4 章 12-19 節](#)^{<12-14, 15-17, 18-19>}⁴⁶)

3. 先立つ 144,000 人: 13 章の偽預言者、大迫害の実施、獣の印と数の記述のすぐ後に、14 章は 144,000 人に直接注意を促します。このユダヤ人証人たちが現れたのは、年代順に「大迫害」が始まった直後(ただし、殉教を目前にした人々への天使の祝福や、「大迫害」の一般的な経過を象徴的に描写したヨハネの[黙示録 14 章 14-16 節](#)の記述より前)であり、非常に重要な意味を持っています。この箇所については後で詳しく述べますが、ここでは、この並列した文章は、144,000 人の殉教が大迫害の幕開けとなる出来事であることを明確に示している、と述べるだけで十分でしょう。聖書はここで、彼らについて「神(み父)と小羊とにささげられる**初穂**として、人間の中からあがなわれた者」([黙示録 14 章 4 節](#))と表現していますが、これはこれらの証人が殉教によって艱難の試練から解放されたことを明確に表現しているのです。

ここで注目すべきは、殉教者 144,000 人のこの先立つ例は、並外れた名誉であり、それはまた、将来訪れる最も困難な時代に、私たちが殉教の可能性をどのように捉えるべきかを教えてくれているということです。イエス・キリストのために文字通り命を捧げる可能性を耐えなければならない恐ろしい悲劇と見るのではなく、私たちはそれを本当の意味で見ることを学ぶ必要があります。つまり、私たちが愛する方を称え、私たちに永遠に大きな報酬を保証する、大きな名誉と祝福となる解放なのです。これは、私たちが殉教を求めているという意味ではありません(選択は神の御心によるもので、私たちの意志によるものではありません)。また、その通過することが容易であるとか、苦痛を伴わないという意味でもありません。ただ、神の御心であれば、私たちは殉教という事態を、暗い諦めの気持ちではなく、確信と信仰、神が私たちの人生のために特別な方法で御心を成し遂げ、私たちの愛する救い主に特別な名誉をもたらし、私たちに究極的な利益をもたらすことを、神が成し遂げてくださるという喜びをもって受け入れる

⁴⁶ 特に[ペテロ・シリーズ#25「個人的な苦難」](#)参照

備えをしている必要があるということです(その過程で私たちが名誉ある行動を取ることができることを願って。そして、神の助けによってそうできますように)。

死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。(黙示録 2 章 10 節後半)⁴⁷

4. 殉教者の数:

(9)その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手を持って、御座と小羊との前に立ち、(黙示録 7 章 9 節)

すでに見たように、大迫害に関する多くの箇所では、イエス・キリストに忠実であり続ける人々の殉教する可能性が、ほぼ確実なものとして提示されています。この「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆」という表現は、彼らの数の多さを疑う余地が一切ないこと、またそれが同時に大迫害が世界的なものであることを強調しています。[黙示録 7 章 9 節](#)では、実際の人数は伏せられていますが、それ自体が重要な事実です。黙示録は、極めて大きな数字(例えば、[黙示録 9 章 16 節](#))であっても、具体的な数字がしばしば示されています。また、比率も示されていますが、これも黙示録の中でよく見られることです(例:[黙示録 8 章 7-12 節 <10-12>](#))。しかし、これらの殉教者が前例のないほど大勢であっても、大艱難期の終わりに主が戻られる時に、まだ生きている信者の数が相当なものであることを、私たちは分かっています([第一コリント 15 章 50-54 節](#); [マタイ 24 章 36-51 節](#), [25 章 1-13 節](#); [第一コリント 15 章 23 節](#); [第一テサロニケ 5 章 1-11 節](#); [第二テサロニケ 1 章 3-12 節](#)参照)。

(15)わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時(すなわち、大艱難期が終わる再臨)まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。(16)すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初に(復活して)よみがえり、(17)それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包ま

⁴⁷ 永遠の報いのレベルを示す冠については、ペテロ・シリーズ#18「永遠の報い」、および「来たる艱難期」第 6 部の 1.7「教会の裁きと報い」参照。

れて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。(第一テサロニケ 4 章 15-17 節)

殉教者が無数の群衆であるということは、大迫害が始まる時に、まだイエス・キリストに忠実な人々の大多数を占めるとは限らないということに注目すべきです(そうであるかもしれませんが)。上記の聖句に基づいて、確実に言えることは、事実上すべての信者がその間に迫害を受け、非常に多くの人々が殉教し、かなりの人が主の再臨のときに生きて復活して助かるということです。したがって、その比率はおおよそ「半々」と見積もるのが妥当でしょう。主の再臨まで生き残る人と殉教者のこの割合は、[マタイ 25 章 1-13 節](#)の「十人のおとめ」の譬えによって間接的に支持されています。この譬えでは、あかりの光は信仰を表し、花婿が到着する前にあかりが消えてしまった五人の処女は、大背教で墮落する人々を表しています。したがって、あかりが灯されてい続ける五人の賢いおとめは、艱難期の終わりまで信仰を維持する人々(墮落する人々とは対照的)を表しているのです。私たちは墮落した人々が教会の三分の一を占めていることが分かっています(第 3 部 A, II. 「大背教」参照)、このたとえ話には、再臨まで生き残る同数の信者のグループが登場しているので、このように三分の一の割合を維持するためには、墮落もしないし終わりまで留まらない人々、すなわち、たとえ話に登場する二つのグループと同数になるであろう殉教者を想定するしかないでしょう。

5. 一般的な迫害と投獄: 獣の刻印を拒否した信者は、最初から、社会的追放や経済的苦境を含む一般的な迫害を受けます([マタイ 10 章 17-20 節](#), [24 章 9 節](#); [マルコ 13 章 9 節](#); [ルカ 21 章 12-15 節](#); [ヨハネ 15 章 20-21 節](#), [16 章 2 節](#))。さらに、大迫害が勢いを増すにつれて、信仰者はより大きな圧力とより激しい迫害にさらされることが予想されます。その中でも一番容易ではないのは、投獄(そしておそらく拷問)に遭い、最終的に殉教に至ることでしょう。

(33)民のうちの賢い人々は、多くの人を悟りに至らせます。それでも、彼らはしばらくの間、やいばにかかり(すなわち、殉教)、火に焼かれ(すなわち、殉教に至る拷問)、**捕われ**(すなわち、投獄)、**かすめられ**(すなわち、財産の没収)などして倒れます。(ダニエル 11 章 33 節)

実際、大迫害の時代に信者が大規模に投獄されることを暗示する聖句は、さまざまな箇所でも多く見られ、直接的に言及されているか、または類推によって言及されているため、[黙示録 13 章 10 節](#)に基づいて、たとえ一部の信者がこの試練を免れることが神の御心であるとしても、投獄されることは当然のことと考えるのが、最も賢明な道であると思われます。(イザヤ [14 章 16-17 節](#), [42 章 7 節](#), [49 章 9 節](#), [51 章 14 節](#), [61 章 1](#)

[節; ダニエル 11 章 33 節; ハバクク 1 章 9 節; ゼカリヤ 9 章 11-12 節; マタイ 10 章 17-20 節; マルコ 13 章 9 節; ルカ 4 章 18-19 節; 参照.詩篇 79 篇 11 節, 102 篇 13-20 節; イザヤ 14 章 2 節; マタイ 14 章 3 節, 18 章 30 節, 25 章 36-44 節; 使徒行伝 5 章 19 節, 8 章 3 節, 12 章 4 節, 16 章 23 節; ヘブル 10 章 34 節, 13 章 3 節\)](#)

しかし、これら(=艱難期前半の混乱)⁴⁸のあらゆる出来事のある前に<英文では「あらゆる出来事より悲惨なことは」>、人々はあなたがた(=大迫害下の信者)に手をかけて迫害をし、会堂[宗教の会合]や獄に引き渡し、わたしの名のゆえに王や総督の前にひっぱって行くであろう。(ルカ 21 章 12 節)

あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、**獄**に入れようとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあうであろう。(黙示録 2 章 10 節前半)

6. **裏切り**: 信者が生命を維持することが困難であり、集会の礼拝に危険が伴うことは大迫害につきものですが、積極的に彼らを追い詰める効率的な方法なしに、預言されたような多数の人々が投獄や処刑のために検挙されるかどうか、あるいは検挙することができるかどうかについては、まだ疑問が残ります。しかし聖書は、迫害の「対象者」の多くが、最も落胆させられるような方法、すなわち、しばしば最も身近で親しい人々による裏切りによって捕えられるという事実について、疑いの余地は残していません。(ダニエル 11 章 34 節; ミカ 7 章 5-7 節; マルコ 13 章 9-13 節; ルカ 21 章 12 節; 参照.エレミヤ 9 章 4 節, 12 章 5-6 節; マタイ 24 章 23-26 節)。

(16)しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人にさえ**裏切られる**であろう。また、あなたがたの中で殺されるものもあろう。(17)また、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。(ルカ 21 章 16-17 節)

(10)そのとき、多くの人がつまずき、**また互に裏切り**、憎み合うであろう。
(11)また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。(12)また[その時には]不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えるであろう。(13)し

⁴⁸ (π ρ ò δ ε τ ο ú τ ω ν)というギリシャ語の前置詞 pro の用法は、よく翻訳の際、時間的なものと誤解されていますが、ここでは時間的な意味ではなく、程度の意味、つまり「より最近の」ではなく「より重要な」意味としてとらえるべきです(第一テモテ 2 章 1 節; ヤコブ 5 章 12 節; 第一ペテロ 4 章 8 節 参照)。要するに、信者にとって、大迫害は、艱難時代で有名な恐ろしく注目すべき裁きよりも、はるかに衝撃的なものなのです。

かし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ 24 章 10-13 節)

(34)地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、[分裂の]つるぎを投げ込むためにきたのである。(35)わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。(36)[その結果]そして家の者が、その人の敵となるであろう。(ミカ 7 章 6 節参照)(37)わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。(38)また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。(39)自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。(マタイ 10 章 34-39 節)

これらの箇所には、大迫害と大背教の密接な関係も見て取れます。迫害の圧力は、キリストを捨てる傾向を強めるからです(第3部A、II「大背教」参照)。何があってもイエスに忠実であろうとする信仰者にとっては、敵のペルシャ政府によって違法とされたにもかかわらず、神に祈りを捧げることを止めなかったために、ライオンの巣穴に投げ込まれたダニエルの例が思い浮かびます(ダニエル 6 章)。どんなに親しい間柄であっても、以前から知っていたほとんどの人たちから疑いの目にさらされ、敵意を持たれるのですから、イエス・キリストを信じる真の信者として、違法行為とみなされたり、迫害を受けずに生活し、礼拝することは不可能に近いことでしょう。しかし、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの証人として私たちが死ぬことは、神のご意志であるかもしれないという、この箇所を通して概説した非常に現実的な可能性を受け入れるとしても、神が人間の予想に反してダニエルを救い出すことができたように、私たちも同じように救い出される可能性を確信する必要があります(参照. [ダニエル 11 章 34 節](#)に約束されている「助け」)。(参照. [第二テモテ 2 章 11-13 節](#)。私たちは、私たちが本当に命よりも主を愛していることを世に示す用意をしておかなければなりません。)

兄弟たち[信者たち]は、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼[悪魔]にうち勝ち(すなわち、「殉教」し)、死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。(黙示録 12 章 11 節)

7. 殉教の段階的構図: ローマ皇帝トラヤヌスとの有名な手紙のやりとり(No.96-97)の中で、ビテュニア総督としてのプリニウスは、政府は誰がこの新しい「宗派」であるキリスト教の信者かそうでないかについて調査を始めてはならない、しかし一旦誰かがキリスト者として糾弾されたら、皇帝に犠牲を捧げないことは死刑と見なされなければならないと命じられていました。この「尋ねるな、話すな(ドント・アスク、ドント・テル)」政策は

厳しいものでしたが、大迫害の時の迫害体制に比べれば、穏やかなものに見えるでしょう。地球から信仰を排除することは、常に悪魔の関心の的であり、悪魔の切なる願いでもあるからです。全世界が反キリストの支配下になった時、キリスト教を完全に根こそぎにして滅ぼすためにキリスト教徒を追い詰める試みは、世界史上類を見ないものとなるでしょう。獣の刻印を持たない者に向けられた経済的な禁止事項、キリスト教の礼拝に対する禁止(確実に思われる)、(真のキリスト教団体への潜入:[ダニエル 11 章 34 節](#); [マタイ 24 章 23-26 節](#); [マルコ 13 章 21-23 節](#); [ルカ 21 章 8 節](#)参照)、友人や家族がまだキリストに忠実な同胞を裏切るように圧力をかけること(間違いなく、不作為に対する罰則と協力に対する報奨の説得力がある)、これらのすべてが相まって、囚われた信者が獣の政治・宗教組織の手に大量に捉えられることになるでしょう。反キリストの神性を宣言しながらキリストを放棄して即座に服従しない人々は、大迫害の犠牲者となるでしょう。大迫害の規模は過去のを凌ぐでしょうが、個々の面では、この世よりもイエスを真に選んだ者はしばしばそのような目に遭ってきたのです([黙示録 2 章 10 節](#); [2 章 13 節](#)を参照)。

…[過去において大いなる信仰者の]ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった(すなわち、復活は彼らにとって自分の命以上に価値あるものでした; 参照。[詩篇 63 篇 3 節](#))。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、(この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によって[この世に対して]あかしされたが(すなわち、殉教したが)、約束のものは受けなかった。(ヘブル 11 章 35-39 節)

疑いもなく、個々の経験は幾分異なっているとしても、聖書は、「<権力者の強制する宗教に改宗する>悔い改め」を拒否して裏切られ、逮捕された信者が、大迫害の中で耐え忍ぶべき典型的な段階を、基本的に図式化するのに十分な情報を与えています。以下の 3 つの段階は、無実であるのに死刑につながるような凶悪犯罪の嫌疑をかけられた人が直面する試練と全く同じであることに注意しなければなりません。

a. **監禁**: この期間における信者の投獄について聖書が頻繁に言及していることは、前述したとおりです。この時期に多くの信者を「宗教的犯罪」に基づいて大規模に投獄することは、「教会」と「国家」の分離が事実上ない世界国家において、聖職者と当

局が協力しなければ、間違いなく不可能であり、さらに世界の全信者を直ちに投獄することは、物流に要する事柄だけが阻止するものになると思われます。実際、神が悪魔の物流を制限されたことは、現時点では大きな意味を持つにせよ、地上から信仰を除去するというサタンの目的を達成するための努力の妨げになることを思い出すのは、祝福された励ましです([マルコ 13 章 20 節](#)を参照)。しかし、上述のように、多くの信者が牢獄に入れられ、聖書が再臨するメシアの手によって<監禁状態から>解放されることを強調していることから、一度逮捕され、処刑されなかった者のほとんどは、再臨まで自由を得られないと予想できます([イザヤ 14 章 17 節](#), [42 章 7 節](#), [49 章 9 節](#), [51 章 14 節](#), [61 章 1 節](#); [ゼカリヤ 9 章 11-12 節](#); [ルカ 4 章 18-19 節](#) を参照)。このような見通しは、間違いなく信仰が弱い人々の側に、背教の圧力を加えることになるでしょう。最後に、これらの大量逮捕が行われる雰囲気は、おそらく極端に醜いものになるでしょう。ネロが、ローマを破壊したのはキリスト教徒のせいだと言って自分への関心をそらしたように、反キリストも自分の暗殺未遂を信者のせいにして、獣の信奉者たち(その多くは名ばかりの「キリスト者」)が、実際に神の恩恵を受けていると思い込んで、反キリストに忠誠を誓わない「国家の敵」を一掃するために熱意と激情を持って取り組むようになることは、過小評価しないようにすべきです。

人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう。(ヨハネ 16 章 2 節)

b. 司法的審査: 主が、口実だけによる不当な逮捕、投獄、裁判を受けたように、([イザヤ 53 章 7-9 節](#); [マタイ 26 章 55 節](#); [マルコ 14 章 55-56 節](#); [ルカ 22 章 37 節](#), [22 章 52-53 節](#); [使徒行伝 3 章 13-15 節](#), [8 章 33 節](#); [第一ペテロ 2 章 22 節](#) 参照)、「主のみ足の跡に従い」([ヨハネ 13 章 15 節](#); [第一コリント 11 章 1 節](#); [第一ペテロ 2 章 21-25 節](#); [第一ヨハネ 2 章 6 節](#); 参照. [マタイ 11 章 29 節](#), [16 章 24 節](#); [マルコ 10 章 38-39 節](#); [ピリピ 2 章 5 節](#))、「主の苦しみを共にする」([ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ピリピ 1 章 29 節](#), [3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#); [第一ペテロ 4 章 13 節](#); [ガラテヤ 6 章 17 節](#) 参照)という特別な形で召された者は、司法・準司法審問とともに厳しい取調べ、圧力、虐待にさらされることになるでしょう。何らかの裁判を経験した人なら、一連の違法で虐待的な試練が、告発された人々にいかに大きな精神的圧力をもたらすかをすぐに理解できることでしょう。それに加えて、肉体的な虐待、鞭打ち、排斥、屈辱、そして持っているものすべての略奪([マタイ 10 章 17 節](#); [マルコ 13 章 9 節](#); [ダニエル 11 章 34 節](#) 参照)を受けると、この試練は膨大な信仰のテストとなり、テストを受ける人は、御言葉とその適用におけるあらゆる事前準備に非常に感謝するであろうことは明らかであるはずです。私たちが耐えなければならぬことは、どんなにストレ

スの多いことでも、どんなに恐ろしいことでも、主が耐えられたこととは比べものにならないことであるのは明らかです。しかし、この過程の困難さを過小評価して意気阻喪してしまったり、この過程が神の目にとっては大きな栄誉であることを過小評価して、涙の中でもあり得る、またあるべき大きな喜びを忘れてしまうようなことは、何としても避けなければいけません。多くの偉大な信仰者たちは、このような極限の信仰の試練に耐えてきました(この点で、ダニエルとその友人たちの例を研究することは非常に価値があります。ダニエルとその友人たち: [ダニエル 3 章 1 節](#)-, [6 章 1 節](#)-; ステパノ: 使徒行伝 6 章 8-7 章 59 節; ペテロ: 使徒行伝 5 章 17-42 節; 12 章 1-19 節; そしてパウロ: 使徒 21 章~28 章)。さらに、その試練の時に、私たちは神の「助け」を受けるので([ダニエル 11 章 34 節](#))、私たちが話す言葉も私たちのものではなく、聖霊を通して恵み深く与えられるのです。その結果、人前で話すのが得意ではない私たちも、事前に心配する必要はまったくありません。

(17)人々に注意しなさい。彼らはあなたがたを衆議所に引き渡し、会堂でむち打つであろう。(18)またあなたがたは、わたしのために長官たちや王たちの前に引き出されるであろう。それは、彼ら(すなわち、偽キリスト教の指導者たち)と異邦人(すなわち、一般の不信仰者)とに対してあかしをするためである。(19)彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。(20)語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中であって語る父の[聖]霊である。(マタイ 10 章 17-20 節)

(9)あなたがたは自分で気をつけていなさい。あなたがたは、わたしのために、衆議所に引きわたされ、会堂で打たれ、長官たちや王たちの前に立たされ、彼らに対してあかしをさせられるであろう。(10)こうして、福音はまずすべての民に宣べ伝えられねばならない。(11)そして、人々があなたがたを連れて行って引きわたすとき、何を言おうかと、前もって心配するな。その場合、自分に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。(マルコ 13 章 9-11 節)

(11)あなたがたが会堂や役人や高官の前へひっぱられて行った場合には、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しないがよい。(12)言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださるからである」。(ルカ 12 章 11-12 節)

(12)しかし、これらのあらゆる出来事(すなわち、8-11 節の出来事)[よりも

さらに悲しむべきことは、人々はあなたがたに手をかけて迫害をし、会堂[での宗教集会]や獄に引き渡し、わたしの名のゆえに王や総督の前にひっぱって行くであろう。(13)それは、あなたがたが[わたしのための]あかしをする機会となるであろう。(14)だから、どう答弁しようかと、前もって考えておかないことに[固く]心を決めなさい。(15)あなたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わたしが授けるから。(英文からの訳; ルカ 21 章 12-15 節)

c. 火による試練: これらの殉教者は主のみ足の跡をたどっているのです、もし彼らが友人や愛する者に裏切られ、その結果投獄されるのが、ユダに裏切られゲッセマネの園で逮捕されること([マタイ 26 章 48-49 節](#))とほぼ同じであるとすれば、この殉教者たちが受ける審問が、ヘロデ、ピラト、ユダヤの宗教指導者による一連の主の受けられた裁判と類似しているなら、その後の火の試練も十字架刑の宣告と試練と類似しているでしょう(もちろん、我々の罪のための死は除きますが)。私たちの主が十字架で私たちのためにしてくださったことは、他の地上の出来事と比較されるものではないことを理解してください。しかし、私たちは主に倣って歩むように召され([ヨハネ 13 章 15 節](#); [第一コリント 11 章 1 節](#); [第一ペテロ 2 章 21-25 節](#); [第一ヨハネ 2 章 6 節](#); 参照. [マタイ 11 章 29 節](#), [16 章 24 節](#); [ピリピ 2 章 5 節](#))、主の苦しみを共有するように召されています([ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ピリピ 1 章 29 節](#), [3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#); [第一ペテロ 4 章 13 節](#); [ガラテヤ 6 章 17 節](#)参照)。聖書が全体的に指摘している、主の通られたこととこれらの殉教者らを通ることになることの類似性を考慮する必要があります。実際、主は私たちのために間近に迫ったご自分の死と、主に従うことを選ぶ人々の高い召しとの間に明確な類似性を描いておられます(すなわち、私たちも「自分の十字架を背負って」主に従っていくということです。[マタイ 10 章 38 節](#); [16 章 24 節](#); [マルコ 8 章 34 節](#); [ルカ 9 章 23 節](#))。ですから、殉教と主の特別な犠牲を正確に比較することは望みませんが(主の死だけが私たちの救いを達成するのに十分なのです)、それでも、主のためのこれらの殉教者は、その類似した経験によって、主の唯一無二の証人となるでしょう。彼らは、御自分の命の血を注いで買い取ってくださった方を否定するのではなく、彼ら自身の命を捧げることで、主に対する絶対的な信仰によって、主の唯一無二の犠牲に人々の意識を向けさせるでしょう。

小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。
(黙示録 6 章 9 節)

前節で、これらの信者が受ける審問の過程を詳述した福音書の節は、最初に「法廷

＜新改訳IV:地方法院；口語訳:衆議所＞と「集会」に言及しています([マタイ 10 章 17 節](#)；[マルコ 13 章 9 節](#)；参照. [ルカ 21 章 12 節](#))。第二の単語はギリシャ語の synagoge の翻訳で、しばしば音訳でシナゴグ(会堂)と訳されています。この単語は、ユダヤ人だけの場所という誤解を招きやすいのですが、実は、ここで研究されている真の文脈から理解すべきことは、宗教的な場所であり、ユダヤ人よりも偽キリスト教的な場所の可能性が高いということなのです。大迫害の間に投獄された信者に対する準司法的な審査過程について述べられていることは、反キリストの宗教団体が信者たちに課しているさまざまな圧力のひとつです。これらの信者は、「もう一人のメシア」(すなわち、私たちの真の主であり救い主であるイエス・キリスト)に対する「誤った」信仰を「悔い改め」、代わりに獣の刻印を受けることによって、真のキリストとして反キリストを受け入れることを宣言するように命じられるのです。主がご自分を否定するよう求められ、十字架につけられる前に何度も試されたように、この過程にはさまざまな法廷での「試練」が伴うかもしれませんが、どの場合も、審査を行うのは獣の政治・宗教組織の信奉者たちでしょう。特に、上記で示唆したように、その時点で反キリストに完全に協力して仕え、崇拝するようになった多くの主要な宗教団体が、少なくとも最初は、まだ真の信仰を持っている人々に、命を救うために信仰を捨てるように圧力をかけるプロセスの先頭に立つと思われれます。それは「法廷」(シネドリア)、すなわち、イエスがアンナスとサンヘドリンの前で受けた最初の裁判に類似した宗教的役人の小さな審査機関(同じ単語の単数形であるシネドリオンに由来:[ヨハネ 18 章 12-24 節](#))を意味しています。一方、「集会」(シナゴガイ synagogai)は、カヤパの前での主の第二審のように、より多くの宗教関係者が主宰し、より多くの聴衆を持つ、より公的な会議を指します([ヨハネ 18 章 24 節](#) と [マタイ 26 章 57-68 節](#)；[マルコ 14 章 53-65 節](#) を比較して下さい)。

この点で、私たちは使徒ヨハネが教会時代に働いていた「多くの反キリスト」を識別し([第一ヨハネ 2 章 18-22 節](#)；[第二ヨハネ 1 章 7 節](#)参照)、その識別手段として「彼らは私たちから出て行った」という事実を挙げていることを思い起こす必要があります。私たちの現在の議論に当てはめると、このことは私たちがすでに見てきたように、反キリストとその重要な従者たちの多くが、かつて「キリスト教の指導者」であったことを明確に示しています⁴⁹。私たちはすでにここで、主の十字架前の火の試練と大迫害の殉教者の経験の間に、一貫した類似性が見られることを指摘しました。この点で私たちは、獣に操られた「キリスト教の指導者たち」の中に、同様に主の時代の様々な宗教的セクトと並行する、現代の同等な存在を予想することができます。これらのグループは、それ以前の年や世紀には間違いなく本物の信者を含んでいましたが、イエスの複数の試

⁴⁹ [「来たる艱難期:第3部 A:第七の封印から二人の証人まで」II.2「艱難期直前における見える教会の状況」](#)参照。

練の時には、同様に悪魔の仕事をするように操られていたのです。真理よりも伝統を一貫して重視する「律法学者」にとっては、正教会やカトリックのような伝統主義の教団が最も適しています。世俗主義のサドカイ派には、聖典よりも「理性」を好むようになった旧来のプロテスタントの教派や、他の関連団体(例えば、ユニテリアンやキリスト教科学者)がよく似ています。律法主義者のパリサイ人は、律法の裁きを用いて慈悲と信仰を排除しましたが、これは現在、様々なバプテストやその他の独立した教派など、多くの保守的なプロテスタントの教派に見られる傾向を想起させます(モルモン教もここに位置づけることができるかもしれません)。エッセネ派は、聖書よりも経験を崇拝する様々な「カリスマ」グループと類似していました。一方、熱心党には、左翼、右翼を問わず、神と神のご計画の代わりに極端な努力をし、暴力を受け入れる多くの末端グループと類似していると言えるかもしれません。これらのグループを支持している方々には、前もって陳謝します。しかし、ここで語られているのは、艱難期の坩堝の中で聖霊の抑制的影響が除去された後にのみ起こる、未来の出来事であることを忘れないでください。このような類似点は、現在の団体を非難するものではなく、主要なキリスト教(疑似キリスト教も含む)の団体が、真の信者を含まなくなった後、悪のために利用される可能性が非常に高いことを説明するためのものでしかありません。つまり、主の時代に起こった状況であり、反キリストが見える教会を自分の目的のために利用した後の、まさに艱難期の状況を想定しているのです。

このような圧力にもかかわらず悔い改める<改宗する>ことを拒否した人々の処刑を最終的に承認する前に、政治的権力者も意見を述べなければならないことでしょう。これらは上記の関連聖句([マタイ 10 章 17 節](#); [マルコ 13 章 9 節](#); [ルカ 21 章 12 節](#))で言及されている「総督と王」であり、ヘロデとピラトの主の裁判と類似しています。宗教関係者が反キリストの王国に取り込まれるように、当然、世界の政治関係者もすべてそうなります。獣の支配は世界的な支配になるからです([黙示録 13 章 1-9 節](#))。迫害されている人々にとってこれらの試練は、孤立状態で、肉体的、言葉による極度の虐待を受けているため、非常に大きな圧力となり、長期にわたる法的手続きを経験したことのある人であっても、その度合いを事前に把握することは困難です。ですから、このような試練に耐えるためには、事前の霊的準備が重要であり、主が私たちの罪のために十字架に架かり死なれる前に、私たちのために試練を受けられたことを理解することが、これらのことを学ぶ上で不可欠なのです。

[黙示録 6 章 9 節](#)によると、大迫害で死刑になった人々は、「神のことばと、彼らが守ってきたあかしのゆえに」処刑されるのです。また、偽預言者は「獣の像を拝むことを拒んだ者に死刑をもたらす」権威を与えられていることも見てきました。[\(黙示録 13 章 15 節\)](#)。さらに、黙示録の第 20 章に見られる復活した殉教者たちは、キリストとともに千

年間支配していますが、「獣やその像を拝まず、額や手に印を受けなかった」と言われています(黙示録 20 章 4 節)。処刑と殉教のためのリトマス試験紙は、一方では真のキリストを拒否することを拒否し、他方では偽キリストの獣とその像を崇拝し、その刻印を受けることを拒否するという二面性を持つことになるでしょう。

ここで、エルサレム以外の場所で、獣の像を拝むことを拒むと言えるかどうかという疑問が生じます。拒否する者に服従を強要し、死刑を執行する偽預言者は、反キリストと反キリストの忌まわしい像と同様に、エルサレムにいることは明らかだからです。主のために殺された人々の数と地理的な多様性を考えると、「あらゆる国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大群衆」(黙示録 7 章 9 節)であり、[マタイ 24 章 9 節](#)でイエスが「また、あなた方のうちのある者を死刑にする」と言っているのは、上記の地方の「統治者や王たち」のことだと思われます。ですから、獣の刻印が像を直接拝むことと関連するように語られているように(すなわち、[黙示録 14 章 9-11 節](#), [16 章 2 節](#), [19 章 20 節](#), [20 章 4 節](#))、刻印を受けることに同意した人が全員、エルサレムに行かなければならないことはあり得ないように思われるので、この場合は、何らかの衛星プロセス(おそらくテクノロジーによって強化)によって多くの殉教者が地元で死刑になるという推定が妥当と思われる。

タイミングとしては、獣の刻印をつける儀式と同時に迫害が起こり、一部の信者の強制、強要、処刑が最初から始まることが予想されます。しかし、獣を認めない者を告発し、逮捕し、調査し、処刑するというプロセスは、時間とともにスピードと勢いを増していかなければならないのは当然です。悪魔の最善の努力にもかかわらず、刻印に伴う新しく厳しい経済的現実への移行期間([黙示録 13 章 7 節](#))には、人間の能力的限界から幾らかの遅延は避けられないので、すべての信者がすぐに特定されるわけではありません(実際、これまで見てきたように、その時点で残っている人の半数は、主の到来まで生き残る可能性が高いのです)。それでも、獣はその移行期間をできるだけ短くするために全力を尽くすでしょうから、この政策の迅速な実施とそれに伴う信者の囲い込みが予想されます。このような速さを求めるならば、エルサレムでは、ある程度の有名人の、礼拝や刻印を受けることが行われるでしょうが(そのために、著名なクリスチャンの処刑も)、このプロセスは主に地方レベルで行われると思われます。地元の会場には、「荒廃をもたらす忌まわしいもの」の小さなレプリカが置かれるか、大きなスクリーンやその他の代用品が設置されるかどうか、私たちは確かなことは言えません。しかし、確かなことは、獣とその像を直接または遠隔で拝み、第二の獣自身からであれ、エルサレムから遠く離れた反キリストの聖職者の一人からであれ、刻印を受けるということは、確実に裁きを受けるということです。最後に、[黙示録 13 章 15 節](#)によると、偽預言者は獣とその像を拝み、その刻印を受けることを拒否する人々の処刑につながる審問を個

人的に指揮することになっているので、一部の殉教者は実際にエルサレムで、しかもおそらく多数の人々が殺害されることになります。そのような「選ばれた」人々にとっては、投獄された後の最初の圧力に耐えるだけでなく、長く困難なプロセスになるため、信仰の強さを維持する必要があることを意味します。地方で一時的な猶予を得ても、悪の総本山に運ばれて「特別扱い」されるのは、銃殺隊に二度直面するようなものであることは間違いないでしょう。

処刑の方法については、聖書は好みに任せて選ぶ根拠を与えていません(ただし、殉教者は首をはねられたと描写されている[黙示録 20 章 4 節](#)を参照)。[黙示録 13 章 10 節](#)にある「剣」は死刑の比喩としてよく使われています(参照. [マタイ 26 章 52 節](#); [ローマ 13 章 4 節](#))。十字架刑やもっと伝統的な現代的な処刑方法も確かに可能です(参照. [ヨハネ 21 章 19 節](#))。しかし、火は反キリストとその偽預言者と密接な関係があり([黙示録 13 章 13 節](#))、ダニエル 3 章でシャデラク、メシャク、アベデネゴがネブカデネザルの像を拝むことを拒否したことと類似しているので、艱難期の殉教者は火の試練で死ぬ可能性があります([黙示録 15 章 2 節](#)の火の海を参照)。ちょうど、この三人の偉大な神の人達が、目の前の恐怖に脅かされても神を捨てることなく、奇跡的な方法で正当性を証明したように、私たちも、世界の権力者が神を拒絶するように命じても、獣の従者たちが私たちを死刑にすることを「良いこと」だと信じていても([ヨハネ 16 章 2 節](#)参照)、またあらゆる恐ろしい状況で脅かされても、神を信頼し従うことに専念しなければならないのです。シャデラク、メシャク、アベデネゴのように火の燃える炉から出るのは艱難期の殉教者の運命ではありませんが、贖われた者の中で最初に天に挙げられ([第一テサロニケ 4 章 16 節](#)後半)、千年間イエスと共に支配するのが彼らの運命なのです。

また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。(黙示録 20 章 4 節)

8. イスラエルでの大迫害：上記の黙示録 12 章にあるように、イスラエルにいる大多数の信者は、神の命令に従って荒野に逃げ、その結果、信徒に対する普遍的な迫害から守られることでしょう。しかし、ダニエル書 11 章は、すでに詳しく説明しましたが、モーセとエリヤと 144,000 人とともに、ある数の信者がその地に残ることを示唆しているようです(これは、信者の逃避にもかかわらず、イスラエルの信者が引き続き問題を抱え

ることを示唆する他の多くの箇所にも示されています:例えば、[エレミヤ 30 章 7 節](#); [ダニエル 8 章 12 節](#), [12 章 7 節](#); [ゼカリヤ 10 章 11 節](#)など)。

(30)それはキツテム(すなわち、西のバビロン)の船が、彼(すなわち、反キリスト)に立ち向かって来るので、彼は脅かされて[死んだようになるが生き返り、][はるか南方からイスラエルに]帰り、聖なる契約に対して憤り、事を行う(すなわち、燔祭を終わらせ、忌まわしいものを設置し、神殿に自分の座を設ける)でしょう。彼は帰って行って、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう。(31)彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し(=モーセとエリヤの働きを終わらせ)、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。(32)彼は[聖なる]契約を破る者どもを、巧言をもってそそのかし、そむかせるが、自分の神を知る民は、堅く立って事を行います。(33)民のうちの賢い人々は、多くの人を悟りに至らせます。それでも、彼らはしばらくの間、やいばにかかり(=殉教)、火に焼かれ(=殉教に至る拷問)、捕われ(=投獄)、かすめられ(=財産没収)などして倒れます。(34)その倒れるとき、彼らは少しの助けを獲ます。また多くの人々が、巧言をもって彼らにくみするでしょう。(35)また賢い者のうちのある者は、終りの時まで、自分を練り、清め、白くするために倒れるでしょう。終りはなお定まった時の来るまでこないからです。(ダニエル 11 章 30-35 節)

艱難期中盤以降にイスラエルで起こった上記の迫害が、艱難期中間点の適切な時期に立ち去ることができなかつたのか、聖霊に導かれて留まったのか、それとも後から信者になったのかはともかく、ここで語られていることは、教会全体にも、世界のあらゆるところで起こる大迫害のパターンにも当てはまることは確かです(それは間違いなく、私たちが<イスラエルにおける迫害と世界大の迫害の間を>紡ぐべき重要で意義深い関係です)。一つ確かなことは、この期間、この地に残るすべての人々は、信者も未信者も共に、非常に困難な時を過ごすということです(例えば、[イザヤ 8 章 14-15 節](#))。

9. バビロンの役割 : ヨハネの黙示録は、大迫害について、バビロンに直接的な責任があることを非常に強く主張しています([黙示録 17 章 6 節](#), [18 章 20 節](#), [18 章 24 節](#), [19 章 2 節](#); 参照:[黙示録 16 章 6 節](#))。また、その背景にある獣の宗教「姦淫と魔術」という観点からも、バビロンに主な原因があるとしています([黙示録 17 章 1-5 節](#), [18 章 3-4 節](#); 参照:[黙示録 14 章 8-9 節](#), [16 章 19 節](#))。事実、大娼婦バビロンは[黙示録 17 章 6 節](#)で「聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている」と言われており、大迫害と、反キリストの宗教的・政治的基盤の本部としてのバビロンの間に、明確な関連性を与えています。もちろん、バビロンは世界で最も裕福な国ですから([黙示録 17 章 1-](#)

[6 節](#)と18章の記述を参照)、刻印のない者に対する商業的制限(それによって、多くの信者が識別され、投獄され、殉教する)は、間違いなくこの点でも彼女に起因していると理解されます。大迫害は、聖書ではバビロンとほとんど区別がつかず、バビロンが宗教、経済、政治力を持つ世界併合システムを通じて大迫害の主役になることを示しているのです。私たちはさらに、バビロンで反キリストが作り出した新しい偽キリスト教が、大迫害そのものを実行する上で重要な役割を果たすという結論に達するでしょう。私たちの主が、ユダヤ人のメシアである主を崇拝すべきユダヤ人の宗教会議の前に呼び出されたように、大迫害の間、信者はかつて同じ「クリスチャン」だった人々から非難され、責められ、断罪され、その事実が殉教の負担をより困難なものにするでしょう。

10. 大迫害のための簡単なクリスチャンの「行動規範」: 艱難期のクリスチャンの行動規範については、このシリーズの第7部で述べますが、ここでも簡単に述べたいと思います。艱難期の最も困難な試練は、大迫害に巻き込まれた人たち、特に殉教者に与えられるからです。以下の原則が、そのような試練に直面する人たちの助けになることを願っています(現在も同様です)。網羅されているものではありませんが、将来、困難な状況に直面する人々(あるいは、現在、同様のプレッシャーに直面している人々)にとって、多少なりとも助けになるでしょう。

a. 信仰の光を隠しておかないこと([マタイ5章15-16節](#)):キリストに召された任務とキリスト教の証しを勇気を持って継続すること([マタイ10章28節](#))。現代の多くのクリスチャンは、艱難期が来たら、私たちは「サバイバル・モード」に入るべきだと信じているようです。これは聖書が語っているすべてのことに反しているように思われます。使徒たちはイエスの名によって話し、教えることをやめるように言われたとき、鞭打ち、投獄、死を覚悟でそれを拒否しました(この三つの運命は、どんな犠牲を払ってでもイエスに仕えようとする彼らの決意によって、多くの人に待ち受けていたのです; 参照。[使徒行伝5章29節](#))。確かに、私たちはこの世での行動において、賢くあるべきであり、また素直であるべきだと言われています([マタイ10章16節](#); 参照。[ローマ16章19節](#); [第一コリント14章20節](#)参照)。誰も私たちが自らを処刑するよう志願したり、当局に殉教するよう「挑戦」したり、大迫害を行う人々の逆鱗に触れてキリストではなく自分自身が注目を浴びるよう志願することを勧めたりはしていません。(マタイ6章2節参照)。このような極端なことは、神が私たちに望んでおられることではありませんし、御子への信仰を告白するよりも、逃げ出すことを望んでおられるのでもありません。ダニエルと彼の三人の友人は、私たちがこの点でどのように振る舞うべきかの完璧な例を示しています。ダニエルはすぐに王の前に出て、自分に対して出された悪い命令に抗議し、主のために自分を殉教者にしてくれるよう王に求めることはしませんでした。しかし、彼は逃げて隠れることも、あるいは、いつものように神と歩むことを変えることもせず、過酷な

勅令が発せられる前とまったく同じように歩み続けました。同様に、ハナニヤ、ミシャエル、アサリア(シャデラク、メシャク、アベデネゴ)は、主のための殉教者になるために自分たちを燃える炉に投げ込ませるように、あえて王に対して自分の名を明かしたわけではありませんでしたし、またその日だけ逃げ隠れして、神への義務を反映する王への忠実な奉仕という普段のやり方を変えたわけでもなく、王の命令でドラの平原で参列していたのです。いずれの場合も、通常の霊的な、あるいはこの世で求められていた忠実さを継続することによって、彼らは殉教することになったのですが、いずれの場合も、神は奇跡的な方法で彼らを救い出されたのです。私たち自身がそのような状況に直面した場合、神には私たちを救い出す完全な力があることを覚えているとよいでしょう。もし、私たちが神の望まれるとおりに生きている過程で捕らえられ、その結果殉教したとしても、それは、それが私たちに対する神の御心であり、神のみ心に応えることによってのみ、神が私たちを通して栄光をお受けになるからにほかなりません([イザヤ 43 章 7 節](#); [エペソ 1 章 5-14 節](#))。その期間中、誰もがこの原則を自分なりに適用しなければならず、あることではより慎重になることが適切です(例えば、刻印を受けていないことが問題になるような商業的な場を避けるなど。[イザヤ 26 章 20 節](#); [マタイ 10 章 17 節](#); [マルコ 13 章 9 節](#))。一方、他の場合にはもっと大胆さが必要になることでしょう(信仰のために投獄された人々を訪ねるなど:[マタイ 25 章 39 節](#); [ヘブル 13 章 3 節](#); [黙示録 2 章 10 節](#)参照)。要は、この世と自分の置かれた状況を見て何をすべきか判断し、付け足しとしてのみ神のことを思うのではなく、今日私たちがすべきであるように、大迫害の間、私たちは祈りと御霊の力によって主と主の真理のみことばに導きを求め、困難な状況下で何をすべきかを知るべきです。

ここに、[しかし、獣の刻印を受けて拝む者たちとは対照的に](刻印を受けたり獣を拝んだりすることを拒否して) **神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある**。(黙示録 14 章 12 節)

b. 霊的に眠ってしまわないようにする([マルコ 13 章 32-37 節](#)): 霊的な成長とミニストリーの継続によって、常に警戒すること。先に述べたように、大艱難期の最も不愉快な皮肉の一つは、キリストを信じる真の信者が、この偽メシアを受け入れようとしないうちに、歴史上かつてないほどの迫害を受けるということです。ですから、反キリストとその偽キリスト教が少なくとも表面的には本物に似ていること、また「クリスチャン」と称する仲間、特に友人や家族から受ける適合と参加への圧力がどの程度のものかを過小評価すべきではありません(1 世紀のイスラエルでユダヤ人信者が受けたように:[ヘブル 10 章 23-39 節](#)を参照)。その日の疑似教会に「属する」ことの慰めは、ヘブル人への手紙に書かれている状況や、今日よりもさらに真理への信仰にとって致命的なものとなるでしょう(私たちが経験していることは、ほとんどの場合、悪魔への完全な崇拜と

いうよりは、聖書の真理に対する単なる表面性や生ぬるさなのです)。迫害という極度の圧力から背教を受け入れることは、信仰を死に至らしめ、いつでも、特に艱難の終わりの時期には、寸前に控える永遠の祝福をすべて失うということは明白です。(ヘブル 11 章 26 節, 11 章 37 節; 参照: 黙示録 14 章 9-11 節)。

c. 信仰の灯を消してはいけない(マタイ 25 章 1-13 節): 大迫害の間、信仰に対する多くの困難な試練があっても、信仰の善戦を続けましょう。信仰を持ち続けるには、その時の真の状況について聖書から得た正しい霊的視点が必要です。モーセでさえも、イスラエルの子供たちへの圧力が増す中で、パロが肯定的な反応をしないことに心を痛めました(出エジプト 5 章 22-23 節)。しかし、私たちには聖書からの後知恵があるので、主のご計画が最初から何であったかを知ることができます。度重なる困難と試練にもかかわらず、主がすべてを働かせて益としてくださることを、私たちは聖書から知っています。そして、残念なことに、人々が多くの驚くべき奇跡を目撃したにもかかわらず、主を信頼することができなかったことも知っています。これから起こるかもしれないことを経験する信者として、私たちはこの例を覚えておく必要があります(第一コリント 10 章 1-13 節参照)。私たちは、地下室の缶詰ではなく、心の中に聖書の真理を持って、主が前もって聖書を通して私たちに語られたことに耐えるように準備する必要があります、これらの恐ろしい時代と出来事を個人的に受け止めるのではなく、私たちの主イエス・キリストの再臨前の、歴史の最後の出来事に関する神の御計画全体の奥義を正しく認識することです。⁵⁰ その時に信仰を持って生き残った信者は、国に対して立つ用意ができていた人です(参照: 黙示録 18 章 4 節)、家族(マタイ 10 章 36 節; ヨハネ 16 章 1-4 節参照)、教会(ヨハネ 16 章 2 節参照)、そして経済的安定(黙示録 13 章 17 節)に対して立ち向かった人たちです。大迫害は最初からひどいものですが、主が戻られる前に、だんだんひどくなっていくと予想されます。

d. 信仰よりも自分の命を大切にしない(マタイ 16 章 24-27 節): 心を尽くして主を愛しなさい。本当に大切な霊的なものよりも、物理的なもの、それも最低限の生存に必要なものを優先してはいけません。結局のところ、神のために命を失う方が、神なしでこの世での成功を手に入れ、神にある永遠の命を失うよりもはるかにましです。(マタイ 10 章 37-39 節)。一般的な艱難期と特に大迫害は精錬過程であり(ダニエル 11 章 35 節; 参照: ダニエル 7 章 18-27 節)、主は誰が本当に主のものか示すだけでなく、この試練において忠実であることを証明した人々が、神の名のために進んで苦しむことによって、神の栄光が称えられることにもなります。人類の歴史はすべて「神の脱穀場」

⁵⁰ 『サタン⁵⁰の反乱: 艱難期の背景』第 4 部「サタン⁵⁰の世界システム、過去、現在、未来」の第 I 章「悪魔の領域におけるよそ者」参照。<日本語「サタン⁵⁰の反乱」印刷本においては 175 頁～>

([マタイ 3 章 12 節](#))であり、私たちが何を選択し、どれだけそれを強く追及したか(信者の報酬の根拠)を疑う余地なく示すために、神が用いられるものです。大迫害の時ほど、このことが当てはまる時はないでしょう。もし私たちが本当に神のように考えるなら、大迫害の圧力、不便、試練、苦難、損失に落胆するのではなく、この世とあの世を隔てるベールの向こう側を見て、辛抱強く耐えて主の御心を喜んで受け入れることによって得ることになる報酬は、今受けているどんな困難とも比べものにならないことに気づくでしょう。たとえそれが私たちの肉体の命を数年の間縮めることになったとしても、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストが、私たちのために死んでくださったことへの信仰と誠実さから離れては、その命はまったく無意味なものとなってしまいます。[\(ローマ 8 章 18 節; 第二コリント 4 章 17 節\)](#)。

e. 恐れるな([ルカ 12 章 32-34 節](#)):現在の不幸に目を向けるのではなく、来たるべき御国の栄光を待ち望みながら、希望と喜びに心を支配されるようにしましょう。獣とその父である悪魔とその従者たちは、肉体を殺すことができるだけで、霊を殺すことはできません([マタイ 10 章 26-31 節](#))。そしてそれは主が許される場合にのみできることです。私達の死は彼の目に尊く、この前代未聞の殉教の期間においては、倍にもまして真実です。先に見たように、大背教を生き残った人々の半分が、大迫害の間、主のために殉教者として栄光のうちに死ぬ可能性があることを考えると、永遠の命と永遠の報いにおける喜びに対する希望を持つには、殉教の可能性が現実にあることを踏まえ、地上での生き残る見込みを常に控えめに見るべきです([ゼパニヤ 2 章 3 節](#); [エレミヤ書 45 章](#)参照)。そして、常に私たちに忠実であられるお方への忠実さを示すことを最優先すべきです。

だから、神の御旨に従って苦しみを受ける人々は、善をおこない(ながら)、そして、真実であられる創造者に、自分のたましいをゆだねるがよい。
(第一ペテロ 4 章 19 節)

死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。(黙示録 2 章 10 節後半)

このように、艱難期は神のご計画の本質的な部分であり、神の特定の御心でなければ、そもそも起こりえないことであることを心に留めておく必要があります([第二テサロニケ 2 章 6-8 節](#); [黙示録 5 章 1-5 節](#))。それは世界的なレベルでも、個々のクリスチャンの場合でも、主が私たち個人に何を用意されているかに関係なく、同じことです。艱難期の傾向の比較(冒頭の図参照)で見たように、艱難期は、一方ではサタンの完全な悪と究極的な無力さを、他方では神の義と信仰を示す重要な部分です(その後に

続く千年は、悪魔が支配する世界と神が支配する世界との対比として究極の対極となるものです)。このように艱難期は、神のご計画全体とサタンに対する神の反撃において重要な役割を担っています。なぜなら、この最後の七年間で悪魔が世界を荒廃させようとするとき、決して人類の「ため」ではないことが、これまで以上にはっきりと分かるからです。同時に、悪魔が完全に支配する世界にもかかわらず、神が聖なる残りの者を奇跡的に保護して下さることを見ることができます。それだけでなく、艱難期は人類史上最大の圧力、前半の驚くべき誘惑(大背教で多くの人々が一掃される運命)や後半の前例のない圧力(忠実な人々の半数が殉教する)にもかかわらず、主に忠実であり続ける人々が本当にいることも実証することになるのです。要するに、これからの暗黒の時代には、終わりのないような「わらなしでのレンガ作り」を強いられるかもしれませんが、出エジプト前の時代の例えで言えば、反キリストの予型であるパロが、この迫害では本当に主を問題にしていたことを思い起こすべきです([出エジプト 5 章 17 節](#)を参照)。大迫害の間に虐待された人々は、同様に、最も確実に**イエス・キリストのために**迫害されるでしょう。これは同時に、信者の信仰に対する最大の賛辞であり、その信仰を示す最大の機会であり、岩に落ちた種と良い土にある種を全世界に見分けさせるものです。

次の言葉は確実である。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」。(第二テモテ 2 章 11-13 節)

1. 144,000 人の殉教。ヨハネの黙示録 14:1-5

(1)なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。(2)またわたしは、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のような声が、天から出るのを聞いた。わたしの聞いたその声は、琴をひく人が立琴をひく音のようでもあった。(3)彼ら(すなわち、十四万四千人)は、御座の前、四つの生き物と長老たちとの前で、新しい歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができなかった。(4)彼らは、女にふれたことのない(すなわち、女性に誘惑されなかった)者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間

の中からあがなわれた者である。(5)彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった。(黙示録 14 章 1-5 節)

144,000 人:大迫害の最初の殉教者は、上で見たように 144,000 人でしょう。モーセとエリヤと並んで、これらのユダヤ人伝道者はイエス・キリストを信じる最も目立つ信徒であり、それだけに反キリストの前例のない大迫害の最初の標的であることは明らかです。このように殉教の先陣を切っているからこそ、4 節で「初穂として、人間の中からあがなわれた者」と表現されています。[マルコ 13 章 9 節](#)で最初に預言された世界的な福音の宣教は、今取り上げている箇所ですぐ後の[黙示録 14 章 6 節](#)で実際に行われているのを、私たちは見ることができるのです。ですから、[マルコ 13 章 10 節](#)以降に書かれている審問の経験は、144,000 人に特別に適用されるものと理解することができます。獣がモーセとエリヤに戦争を仕掛け、神殿の儀式を止め、信者のユダヤ人を砂漠に追いやった後、大迫害が本格的に始まり、世界中の 144,000 人が集められ、マルコや他の福音書に書かれているような一連の大々的な「公開裁判」にかけられ、その結果、伝道者たちは公に注目を集めて死刑になると予想できます(例えば、次のとおりです:[マタイ 10 章 5-42 節](#), [24 章 4-28 節](#); ルカ 9 章 1-27 節, 10 章 1-24 節, 21 章 12-36 節)。⁵¹ 144,000 人の殉教者の数が大きすぎてその全体がそうならないとしても、実際にイスラエルに運ばれて、正式に有罪判決を受け処刑される前に、エルサレムの神殿の山で「荒廃をもたらす忌まわしいもの」の前に立たされるということは十分考えられます。ですから、この試練の期間中、主が語られた言葉をしっかりと心に留めておくことが非常に重要です(同じような状況で後に続くように召された人々にとっても同様です)。特に、答える言葉を聖霊に委ねるようにという主の命令に関してはそうでしょう([マタイ 10 章 17-20 節](#); [マルコ 13 章 9-11 節](#); [ルカ 12 章 11-12 節](#), [21 章 12 節](#))。上に述べたように、モーセとエリヤが奇跡的に天に移された今、獣とその偽預言者はラッパの裁きの結果として、世界に降りかかったすべての問題を 14 万 4 千人のせいにしようとするでしょう(モーセとエリヤが、実際にこれらの裁きとそれに似た裁きを執行したことを私たちは知っています)。そして、この正当化は後に大迫害全体に拡大され、すべての信者が同様に、警告としてこれまで不信者の世界に下された裁き(しかし、迫害そのものに対する神の報復として、間もなく下されるであろう鉢の裁きの激しさには及びません)だけでなく、獣を暗殺しようとする陰謀的な企てのスケープゴートにされるなることも予想されます。144,000 人とすべての殉教者はこのように中傷され、不当な責任を負わされるので、イエスが彼らに聖霊である神に弁護を任せるように言われた理由は、より一層理解できます-イエス・キリストにおける神の権威が、ここでは真の問題で

⁵¹ [144,000 人に関するこれらの問題については、『来たる艱難期:第 2 部 B:天の前奏曲』V. 「144,000 人の封印」参照](#)

す(参照:サムエルに、民が王を求めても「彼らが拒絶したのは私である」から、動揺しないように主は言われました。[サムエル記上 8 章 7-8 節](#))。

[黙示録 14 章 1-5 節](#)では、144,000 人が地上での殉教の直後、復活する前の暫定的な状態にあることが分かります。これは、時折想定されるような再臨の予兆ではないことは、次の事実によって明らかです。1)ヨハネは「天から」聞こえてくる歌声を聞きます(2 節)、2)「地から」贖われた(3 節)、つまりこの時彼らは地上にはいない、3)神の御座、四つの生き物、天使の長老など、天国の物や人がいる(3 節)。ですから、1 節で言及されているシオンの山は、地上のシオン山ではなく、天のシオンの山です([ヘブル 12 章 22-24 節](#); [ガラテヤ 4 章 14 節](#); [黙示録 3 章 12 節](#), [21 章 10 節](#)を参照)。実際、私たちはすでにこの天のシオンの山に神殿と契約の箱があることを見えています([黙示録 11 章 19 節](#), [14 章 15-17 節](#), [15 章 5-8 節](#), [16 章 1 節](#), [16 章 17 節](#) 参照)が、そのことは、反キリストによる地上の神殿の丘の冒涇と対照的な、真の天国の現実を明確に示すものと一致しているのです。この対比は 144,000 人の描写にも見られます。彼らは最も困難な状況下で殉教したばかりですが、今は想像を絶する至福の中で、小羊の前に立っているのです。彼らは殺されて、筆舌に尽くしがたい祝福に与ることになったに過ぎないのです。

またこの箇所から、主への特別な奉仕は特別な報酬を必ずもたらすことに間違いはない、という原則を観察することができます。これは 144,000 人に当てはまることであり、大迫害に巻き込まれたすべての人に計り知れない励ましとなるはずです(もちろん、歴史上のどの時代にも個人的な苦難があることは言うまでもありません)。なぜなら、この殉教者たちには、三つのユニークな特権が与えられていることがわかるからです。第一に、彼らはイエスと密接で親密な交わりを持っているのが見られます。[ヘブル 2 章 13 節](#)は[イザヤ 8 章 18 節](#)(シオン山にも言及している)を引用して、父からキリストに与えられたすべての「子供たち」が、将来集まることをキリストにはっきりと認めています。これは、人の子を信じるすべての人に共通する祝福された運命ですが、ここでは 144,000 人が復活と再臨の前に、その永遠の交わりを特別に予見していることがわかります(非常に特別な栄誉です)。第二に、7 章において彼らが額に受けた聖霊の印は、今や御子と御父の名として判読できるようになっています。イエスに選ばれた者は皆、「わたしの神の名と、わたしの神の都、(わたしの神から天から降りてくる)新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名」([黙示録 3 章 12 節](#))を受けますが、ここでは 144,000 人が、神ご自身の唯一無二の所有物であるという永遠の証し(極めて特別な慰め)の、特別な先行体験を楽しんでいるのがわかります。第三に、ヨハネは彼らが御座の前で特

別な賛美歌(すなわち、「新しい歌」)を歌うのを聞きます⁵²。私たちは皆、永遠にわたって主への賛美を歌いますが(黙示録5章13節参照)、ここでは144,000人が他の誰にも真似できない方法で、この特別な歌を合唱している⁵³のが見えます。これは、言葉を覚えられないというよりも(今でも私たちのためにここに記録されています)、この独特の歌を歌唱するための特別な音楽の才能(極めて特別な祝福)が全員に与えられていることを示唆しています。なお、144,000人は「ハープ」や「豎琴」を持っていないことに注意してください。ギリシャ語の副詞「*hos* ホス(～のように)」は、このメロディーを歌う彼らの歌唱力は、ヨハネに言わせれば、まるで楽器を使っているかのようなものであるということです。

最後に、144,000人の「女に触れたことがない」と「傷がない」に関しても説明が必要です。私たちはすでにこのシリーズの第2部Bで、これらの人々が確かに全員童貞であったことを示しましたが、これは彼らのユニークな使命を果たすために捧げられた特別な犠牲です(参照:「神の国のための独身者」:[マタイ19章12節](#))、明らかに、主以外には、これまで罪のない人間はいなかったのです。⁵⁴ 小羊の前で御座の前に立っている彼らの現在の状態は、間違いなく罪がなく、また、どんなごまかしもありません(実際、私たちは皆、その時にそうなり、今もそうならうと努力すべきなのです。[エペソ1章4節](#), [5章27節](#); [ピリピ2章15節](#); [コロサイ1章22節](#); [ユダ1章24節](#))。彼らの以前の生活について、「傷のないもの」とは、罪のない完全さを意味するものではありませんが、彼らが行った特殊な任務において、重要な要素である、彼らの生活様式の驚くべき完全性を示しています。「彼らの口には偽りがなく」という言葉は、真理を一切曲げることなく生きてきたことを意味しませんが、地上での活動を通して、真理であられる主の真理を聖別して証した、彼らのメッセージの絶対的な完全性を物語っています。この二組のフレーズでは、ギリシャ語の接続詞ガー($\gamma\alpha\rho$)が、最初のフレーズの根拠を導くために使われています。つまり、144,000人が完璧なメッセージの完全性を持っていたと結論付ける根拠は、彼らの潔白さであり(すなわち、彼らの良い行いが彼らのメッセージを支えていたのです;[ヤコブ3章2節](#)を参照)、同様に144,000人が不

⁵² 参照:詩篇33篇3節, 40篇3節, 96篇1節, 98篇1節, 144篇9節, 149篇1節; イザヤ42章10節; また、このシリーズの第2部Bでは、黙示録5章9節に出てくるこのフレーズの扱ひも参照してください。

⁵³ 私たちの最も優れた聖書写本であるシナイ写本(批評版では α と表記されることが多い)には、数のほかにミアン($\mu\iota\alpha\nu$)という語があります。これはギリシア語の整数「一つ」の女性名詞(accusative)ですが、ここでは副詞的に「一つのように」という意味で使われています(コイネ碑文に類似した用法)。

⁵⁴ [「聖書の基礎」第3部B:ハマルトロギー:罪の聖書的研究 II.2「罪の普遍性」](#) 参照
<英文>

正なセックス(明らかに反キリストの新宗教で広く行われています;民数記 25 章; [第二ペテロ 2 章 15 節](#); [ユダ 1 章 11 節](#)参照)を慎んだという記録を持っていると結論付ける根拠は、彼らの童貞の事実(すなわち、童貞性が証拠)なのです。144,000 人が主の前で立って歌うという祝福された描写から明らかなことは、彼らの人生と死の困難にもかかわらず、誰もそれ以外の道を望んでいなかったということです。

これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してから、「わたしに従ってきなさい」と言われた。(ヨハネ 21 章 19 節)

2. 三つの天使の宣言 ヨハネの黙示録 14 章 6-13 節

七つの懲罰的な「鉢の裁き」が始まる前に、神は大きな憐れみのうちに、不信仰な世界が悪から立ち返り、イエス・キリストと救いに向かう最後の機会が与えられます。この最後の警告は、天使の宣教によって世界中に伝えられ、私たちの神の恵み深く、赦しに満ちた性格を明らかに示しています([イザヤ 18 章 3 節](#)参照)。まず「永遠の福音」が語られ、「神の裁きの時が来た」ので「神を畏れなさい」という警告が付け加えられます。次に第二の天使が、世界で最も強大で裕福な国であるバビロンが滅びることを警告しています。最後に第三の天使が、唯一のまことの神ではなく、獣を拝むことに固執する者を待ち受ける恐ろしさについて詳しく述べています。[黙示録 16 章 9 節](#)と [16 章 11 節](#)には、来るべき鉢の裁きを前にした世界の大多数の人々の頑なな拒否が示されています。異邦人の時代([ルカ 21 章 24 節](#); [黙示録 11 章 2 節](#) 参照)の終わりの日に、「異邦人の頑なさ」がイスラエルの「部分的な頑なさ」([ローマ 11 章 25 節](#))に取って代わります。モーセとエリヤ、そして 144,000 人の働きによってユダヤ人のリーダーシップが再び確立され、教会以前の状態の役割の逆転が、すでに肯定的に目撃されているのです。

a. 救いの道の宣言：黙示録 14 章 6-7 節

(6) また、私は、天の上方で飛んでいる一つの御使いがいたが、この御使いには永遠の福音(すなわち「福音」)が与えられていたのを見た。「地の民、すなわちあらゆる国民、部族、言語、民族に福音を宣べ伝えよ。(7) 大声で、また、聞こえるように、彼らに告げなさい。『神を畏れ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源とを造られ

た神を拝め』⁵⁵ ([黙示録 14 章 6-7 節](#))

世界の隅々まで(主にユダヤ人たちに)福音のメッセージを伝えた 144,000 人の殉教の直後、ここでは艱難期の最後の福音伝道の試みがなされます。それは、主が終末の到来を予告するものとして自ら予言されたもので、信仰を持たない世界が、悪から離れ、真理に応える最後のチャンスです。

そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。(マタイ 24 章 14 節)(参照:[マルコ 13 章 10 節](#))

この時点から、この良い知らせを拒否し、将来可能であったであろう悔い改めを不可能にするほど、心を頑なにする人々には、世の光ご自身が戻ってくるまで、霊的な暗闇([ヨハネ 9 章 4 節](#) 参照. [イザヤ 21 章 12 節](#))だけが続くのです。ここで重要なのは、良い知らせを伝えるようにという命令がこの天使から出されていること、しかし、その命令を実行するのは彼一人ではないということです。この天使は高位の天使であると想定されます。聖書には具体的な記述はありませんが、この文脈で七人の天使が言及されている事実は(すなわち、[黙示録 14 章 6 節](#), [14 章 8 節](#), [14 章 9 節](#); [14 章 14 節](#) [私たちの主を表す天使]; [14 章 15 節](#), [14 章 17 節](#), [14 章 18 節](#))、これらは大天使であることを強く示唆しています(この推測は、他の、大多数の天使を要する命を下していることと確かに一致します)。⁵⁶ここに書かれている福音のメッセージは、主が地上での宣教開始時に与えたメッセージと非常によく似ています。「天の国は近づいたので、悔い改めなさい」([マタイ 4 章 17 節](#))。当時も今も、そして未来のその時も、まず不信仰な世界の人々の視線を神に向けさせ(それぞれ神を恐れる必要性和御国の近さを説き)、そして基本的な態度を変えさせる(それぞれ「悔い改め」「礼拝」する)ことが重要な任務です。主の時代には、主ご自身がメッセージを与える側であったので、イエスの問題は個人的なものでした。この箇所では、三位一体で世界を物理的に創造(維持も含む:[ヨハネ 1 章 3 節](#), [1 章 10 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#); [コロサイ 1 章 16 節](#); [ヘブル 1 章 2 節](#)) された方であるイエスご自身が、生命の与え主であり、「天と地と海と水の出るところを造られた」方であることに注意しなければならないのですが、これは最も冷淡な不信心者も認めざるを得ない、人間の基本生活にとって必要なものです。

⁵⁵ この訳はシナイ写本(または「アレフ」)のテキストに従っています。この写本には「言っている」という分詞は含まれていませんが、「福音を宣べ伝えよ」という意味の動詞が、命令法または命令口調で、不定詞ではなく含まれています。この天使が他人に命令を下しているという事実についての混乱が、後の版でテキストの混乱を招いたようです。

⁵⁶ [聖書の基礎：第 2 部 A：天使論、II.9.3 「大天使」](#) の項を参照<英文>。

人々は、良い知らせの要点を、彼らの母国語で、はっきりと、聞くことになります。それは、からし種ほどの信仰で従うなら命につながる、命の言葉です。その時の世界は、今日よりもさらに、悔い改めないで永遠の命のためにイエス・キリストに立ち返らないことへの言い訳ができないでしょう。(ローマ 10 章 13 節参照)。

(22)地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ。(23)わたしは自分をさして誓った、わたしの口から出た正しい言葉は帰ることがない、『すべてのひざはわが前にかがみ、すべての舌は誓いをたてる』。(24)人はわたしについて言う、『正義と力とは主にのみある』と。人々は主にきたり、主にむかって怒る者は皆恥を受ける。(イザヤ 45 章 22-24 節)

b. バビロンへの裁きの到来を宣言する。黙示録 14 章 8 節

また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する(神の)激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」。(黙示録 14 章 8 節)

黙示録 17 章から 18 章に鮮やかに描かれているバビロンの陥落については、次回の第 5 部で詳しく紹介する予定です。この次の警告も、世界中で聞かれ、三連続警告の第二回目ですが、反キリストの本国であるバビロンの滅亡が迫っていることを世界に警告するものであることをここで述べておけば十分でしょう(第 3 部 B、II.1.c 項「[反キリストの国の起源](#)」参照)。この時、バビロンに住んでいるすべての不信心者はこの警告に反応するのが賢明ですが、他の地域に住んでいる人々も、神が世界の最も強い国を低くされるのを目の前にして、自らも注意するのが賢明でしょう。大迫害の間、バビロンの手によって最も苦しんだ信者たち(上記 VII.9 項参照)にとって、彼女に対する差し迫った裁きは、励ましでもあるのです。主は間もなくバビロンにその怒りを飲ませられるからです(黙示録 16 章 19 節, 18 章 3 節; 参照. [黙示録 14 章 10 節](#), [14 章 19 節](#), [15 章 1 節](#), [15 章 7 節](#), [16 章 1 節](#), [19 章 15 節](#))。この宣言の二つの文の間のアシンデトンは、バビロンに対する神の裁きが、彼女が世界の国々に及ぼした腐敗した影響(「売春」)の直接的結果として起こることを示しています⁵⁷。すでに見たように、バビロンの最大の罪の一つは、反キリストの宗教を醸成し後援したことです(本質的に彼の悪い政治経済体制と絡み合っています;すなわち、バビロンは「偶像の地」です; 参照:[エレ](#)

⁵⁷ すなわち、通常ギリシャ語では、後に続くものに特別な注意を促すために使用される接続詞がありません。最良の写本では、関係代名詞 he [ñ] が欠落しています。

[ミヤ 50 章 38-39 節](#))。その宗教が生み出し、実行した大迫害です(上記のセクション VII.9 を参照)。この大迫害の激しさと世界的な性質、そして大迫害が黙示録のこのセクション全体の主要テーマであることを考えると(すなわち、[黙示録 13 章 11-18 節](#), [14 章 1-5 節](#), [14 章 9-13 節](#), [14 章 14-16 節](#), [15 章 1-8 節](#)はすべて直接的または間接的にこのイベントに焦点を当てています)、地球の諸国が共有しようとしている神の「怒り」は主にバビロンによって引き起こされる信者への迫害に彼らに加担していることから来るものだと確信することが出来ます。バビロンだけでなく、全世界のキリストの体への扱いに対して、すぐに厳しい代価を払うようになるからです([黙示録 14 章 10 節](#), [14 章 19 節](#), [15 章 1 節](#), [15 章 7 節](#), [16 章 1 節](#); [19 章 15 節](#)参照)

c. 迫害における不屈の精神の必要性が宣言されています。黙示録 14 章 9-13 節

(9)ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、(10)神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと[そして聖徒たちと]⁵⁸小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。(11)その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。(12)ここに、(獣の刻印と崇拜を拒否して)神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」。(13)またわたしは、天からの声がかう言うのを聞いた、「書きしるせ、『今から後、主にあつて死ぬ死人はさいわいである』。御霊も言う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。(黙示録 14 章 9-13 節)

三番目の大天使の宣言(同じく彼の部下達によって世界中に伝えられる)は、二番目の宣言を補完するものです。最初の宣言は神に立ち返るようという最終的な肯定的な呼びかけの目的を果たしましたが、第二と第三の宣言は、悔い改めをしない場合を示すもので、すなわち、第二の宣言は国家的な視点(大迫害をもたらしたバビロンの運命)から、第三宣言は個々人の観点から見た問題が(獣の宗教に参加して大迫害を支持した世界中の人々に下される速やかな裁き)明確になります。世界中の誰もがこの宣言を聞くことになるので、ついに神の裁きの座の前に立つとき、誰も知らなかった

⁵⁸ ギリシャ語本文では、「天使」と「聖なるもの」の前に定冠詞がないため、ここでは形容詞が実体として使われ、復活した信者を指している可能性があります。この描写されている状況において信者が除外される理由はありません([黙示録 20 章 4 節](#)参照)。また、「聖なる天使」という表現は聖書の中では比較的珍しく、新約聖書の中で二度だけ出てきますが、どちらの場合も定冠詞を伴っており、ここではそれがありません([マルコ 8 章 38 節](#); [使徒行伝 10 章 22 節](#)を参照)。

と主張することはできないでしょう。艱難期の前半に神の強力な警告のさばきを目撃し、これから下されようとしている懲罰のさばきについての一連の警告を自分の耳で聞いたにもかかわらず、反キリストとその父悪魔に従うことから離れようとしなないのでから、この時の不信仰な世界の状態を考えると、身の引きしまる思いがします。そして、その最後の恐ろしい裁きの圧力の下でさえ、彼らは悔い改めようとはしません([黙示録 16 章 9 節](#), [16 章 11 節](#))。実際、彼らは神の憐れみに身を委ねる代わりに、神を呪うようになります([黙示録 16 章 21 節](#))。この反応は、容赦ない反逆者たちに対する神の怒りが、状況から見て完全に正当化されるだけでなく、十分に正当化されることを示すものです。なぜなら、彼らは神の明確な警告を何度も受けたからであり、また、その怒りに直面したときの彼らの頑なな態度は、獣の宗教への参加が、大迫害の指揮に最も積極的に関与した人々と同罪であることを疑う余地なく証明しているからです。

火と硫黄の中の苦悩：この第三の天使の警告は、真のキリストではなく反キリストを選んだことによる地上の(そのための一時的な)結果に焦点を当てるのではなく、獣を支持するすべての者の永遠の将来を、前面に押し出しています。神と御子を拒絶する者の永遠の状態は、ある人々が主張するように忘却の彼方ではなく、むしろ永遠の罰を意味することに間違いありません。ここで述べられている火と硫黄の中の苦しきは、火の池([マタイ 25 章 41 節](#); [黙示録 19 章 20 節](#), [20 章 10 節](#), [20 章 15 節](#), [21 章 8 節](#); 参照. [イザヤ 66 章 22-24 節](#); [マルコ 9 章 48 節](#)) のことで、最後の審判が行われた後に不信仰者が最後に住む場所です。この裁きは艱難期の終わりではなく、千年王国の終わり、永遠を前にした人類の歴史の終わりに(このシリーズの第6部で詳細に説明する予定)行われます。これらの聖句は、「獣を拝む者があれば」(9 節)、「刻印を受ける者があれば」(11 節)、この恐ろしい永遠の天罰を受けると極めて明確に述べているのです。このように聖書は、紛れもない言葉で問題を提起しています。反キリストの宗教に積極的に参加することは、取り返しのつかない決断であり、必然的に火の池に導かれることとなります。これは、神の恵みや憐れみに欠けるからではなく、艱難期、モーセとエリヤ、144,000 人の働き、ラッパの裁きなどの先行する出来事によって、その結果が非常に明確になったからなのです。そして、特にこの三つの普遍的な宣言によって、真理に背を向ける結果が非常に明確であるにもかかわらず、悪魔と反キリストの崇拜を受け入れるほど真理に背を向けるすべての人は、出エジプトのパロのように、取り返しのつかないところまで心を頑なにしているからなのです。このような永遠の刑罰は、キリストの犠牲、神の恵み、神の憐れみ、そして彼らの人生に対する神の最初の、最善の御心をあからさまに無視して、自分の意志で選んだものとなります([エゼキエル 18 章 23 節](#); [マタイ 18 章 14 節](#); [ヨハネ 12 章 47 節](#); [第一テモテ 2 章 4 節](#); [第二ペテロ 3 章 9 節](#))。自分の自由意志によって獣を拝み、その刻印を受けることに同意した者は、小羊の命の書から名前が消されます([マタイ 22 章 1-14 節](#))ではなく小羊に対する反応と

して>二つのカテゴリーを提示し、そのうちの一つである、結婚式の披露宴にふさわしい服装を着ずに出席することは、信仰によって神の義の清い衣を受け取らない消極的な拒絶を表します：[マタイ 22 章 1-14 節](#)参照；[ダニエル 12 章 1 節](#)；[黙示録 13 章 8 節](#)，[14 章 9-11 節](#)，[黙示録 16 章 2 節](#)，[17 章 8 節](#)，[19 章 20 節](#)，[20 章 4 節](#) 参照）。

ここでさらに一つ、言及しておく必要があります。獣の刻印を受ける人々の運命についての記述は、彼らの究極の状態を予告するものですが、獣を崇拜し、刻印を受けることを許した人々は、イエス・キリストの千年王国に入ることが許されないということもまた事実であるということです。「火のバプテスマ」と呼ばれる（洗礼者ヨハネの言葉：[マタイ 3 章 11 節](#)；[ルカ 3 章 16 節](#)；[マルコ 1 章 8 節](#)参照）この再臨後の出来事は誤解されがちです。不信仰者の地上からの火による排除は、「主の日」の始まりと終わりの両方で起こります（[列王記下 1 章 9-15 節](#)参照）⁵⁹。しかし、ここで問題となるのは、不信者が最終的に追放されて最後の裁きを受けることではなく、千年王国の初期段階から、すでに意図的に不可逆的にその王を拒絶した者たち、すなわち、ハルマゲドンの戦いの後もなお生きている獣の刻印を押された者たちすべてが、追放されることなのです。（[黙示録 19 章 11-21 節](#)；[ゼカリヤ 14 章 12-13 節](#)；[黙示録 14 章 17-20 節](#)を参照）。

(10)斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ。(11)わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。(12)また、箕を手にとって、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう。（マタイ 3 章 10-12 節）

解釈：良い実を結ばない木とは、再臨の際に獣の印をつけた不信仰者（およびメシアの治世下でも、救いの申し出に応じなかった千年王国末期の不信仰者）のことです。古代世界では穀物を挽く前に、穀物の粒の有用な部分を籾殻から分離するため、何度も空中に投げ上げて籾殻を風で飛ばし、重い実の部分は脱穀場の中央部、丘にある平らな岩の上（風が妨げられずに吹き抜ける場所）に落としました。そして、穀物は集められ、貯蔵され、加工されます。籾殻は燃やす以外には何の役にも立ちません。獣を崇拜する不信心者が受ける「バプテスマ」の火は「消えない」と言われているので、こ

⁵⁹ 私たちは以前にも、このシリーズの第一部、セクション IV.1.b の『主の日』パラダイム』において、この現象を研究しています。

の箇所も、刻印を受けたすべての人の、究極的な永遠の終末である火の池を予示しているのです。

(6)すなわち、あなたがたを悩ます者には患難をもって報い、悩まされているあなたがたには、わたしたちと共に、休息をもって報いて下さるのが、神にとって正しいことだからである。(7)それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。(8)その時、主は神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、(9)そして、彼らは主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受けるであろう。(10)その[大いなる]日に、イエスは下ってこられ、聖徒たち(すなわち、復活した信者)の中であがめられ、すべて信じる者たちの間で驚嘆されるであろう——わたしたちのこのあかしは、あなたがたによって信じられているのである。(第二テサロニケ 1 章 6-10 節)

解釈: [マタイ 3 章 10-12 節](#)と同様に、「その日」とは主の日のことです(したがって、この預言はその開始と終了の両方に当てはまります)。さらに、これらの不信仰者の永遠の状態を具体的に説明すると、「主の御前とその力の栄光から離れて」(9 節)おり、最後の審判は確かに主の前で行われますが(先述の[黙示録 14 章 10 節](#)の「天使と聖徒と小羊の前で」参照)、火の池自体は、正しい者が主と共に永遠に栄光の中に住む祝福の新天地から、遠く離れていることを明確に示しています。

(15)見よ、主は火の中にあられて来られる。その車はつむじ風のような。激しい怒りをもってその憤りをもらし、火の炎をもって責められる。(16)主は火をもって、またつるぎをもって、すべての人にさばきを行われる。主に殺される者は多い」。(17)「みずからを聖別し、みずからを清めて園に行き、その中にある[暴力が特徴である]ものに従い、豚の肉、憎むべき物およびねずみを食う者はみな(再臨の時に)共に絶えうせる」と主は言われる。(イザヤ書 66 章 15-17 節)

解釈: ここには、主の栄光の再臨(15 節)と、主に逆らう不信仰者の剣による滅亡(すなわちハルマゲドンの戦い:[黙示録 19 章 21 節](#))と火による滅亡が、二重に描かれています。17 節には「忌まわしい教団の活動」が述べられていますが、これは獣を崇拜し、大迫害(「暴力によって特徴づけられる」)を含む獣の宗教的儀式と活動に参加する人々のことで、火の破滅は獣の印を持つこの人々に向けられる火のパプテスマであることがわかります。

わたしは彼らの中に一つのしるしを立てて、のがれた者をもろもろの国、すなわちタルシシ、よく弓をひくプトおよびルデ、トバル、ヤワン、またわが名声を聞かず、わが栄光を見ない遠くの海沿いの国々につかわす。彼らはわが栄光をもろもろの国民の中に伝える。(イザヤ 66 章 19 節)

解釈：イスラエルの生存者から異邦人へ伝道者が送り出されること(すなわち、キリストの再臨の際にキリストに改宗する者たちのことです。[ゼカリヤ 12 章 10-14 節](#)；[黙示録 1 章 7 節](#)；[ローマ 11 章 25-27 節](#)参照)は、大艱難期の圧力にもかかわらず獣の刻印を受けず、獣を拝まない不信仰者が異邦人にもいることを示しています([イザヤ 2 章 2-3 節](#)参照)。

わたしはわが強い手と伸べた腕と注がれた憤りとをもって、あなたがたをもろもろの民の中から導き出し、その散らされた国々から集め、もろもろの民の荒野に導き入れ、その所で顔と顔とを合わせて、あなたがたをさばく。すなわち、エジプトの地の荒野で、あなたがたの先祖をさばいたように、わたしはあなたがたをさばくと、主なる神は言われる。わたしはあなたがたに、むちの下を通らせ、数えてはいらせ、あなたがたのうちから、従わぬ者と、わたしにそむいた者とを分かち、その寄留した地から、彼らを導き出す。しかし彼らはイスラエルの地に入ることはできない。こうしてあなたがたはわたしが主であることを知るようになる。(エゼキエル 20 章 34-38 節) (参照：[エレミヤ 31 章 2 節](#))

解釈：再臨に続く再集会の後、地に入る者と入らない者が区別される根拠は、やはり獣の刻印の有無である可能性が高いです。なぜなら、「むちの下を通る」ときに排除される人々は「わたしに従わぬ者、わたしにそむく者」と呼ばれていて、取り返しのつかないサタン崇拝のしるしを受け入れること以上の、主に対する反逆はないのです。ですから、ここでも火のバプテスマによってメシアの王国から追放される人々が、イスラエルの中にさえいることがわかります。モーセの律法の具体的な教え(例えば、[申命記 11 章 18 節](#))とこの忌まわしい行為が厳密に対照的であることを考えると、ユダヤ人は異邦人よりも刻印を受けることに対する弁解の余地が少ないことでしょう。

その時あなたの民を守っている大なる君(すなわち、大天使)ミカエルが(あなたがたを守るために)立ちあがります。また[その時は](すなわち、大艱難期)[地上において]国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの[いのちの]書に名をしるされた者(現在と将来の信者)

は皆救われます。(ダニエル 12 章 1 節)

解釈：先述の箇所 VI.1 で見たように、いのちの書にはすべての人間の名前が書かれています。これらの名前は、罪と死の問題に対する神の解決策、すなわち私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストの人と業を、積極的または消極的に拒否することによってのみ、その書から消されるのです。この節では、刻印を受け、獣を拜んでイエスを**積極的に**拒否しなかったすべての人が、復活(再臨の時の信者)か、(獣の刻印を拒否したことによって;[黙示録 13 章 8 節](#), [17 章 8 節後半](#); 参照.[ヨハネ 6 章 25 節](#); [マタイ 25 章 37-40 節](#))火のバプテスマが免除されて、千年王国に入るとあります。このことから、獣の刻印を受けることは、十分な情報を得た上での決断、つまり大人としての決断であり、このことから火の洗礼を免れる者の多くは、まだ獣の宗教に正式に入信していない子供であると考えられます([イザヤ 2 章 2-3 節](#), [66 章 17 節](#)を参照)。

艱難期の厳しい状況、ラッパと鉢の裁き、ハルマゲドン、火のバプテスマのために殺された人々の総数は、主が人類を「オフルのこがねよりも少なく」([イザヤ 13 章 12 節](#))し、「その期間を縮めてくださらないなら、救われる者はひとりもない」([マルコ 13 章 20 節](#))という預言が、真実であることを物語っています。このように、信者は主の再臨の時に主に会うためによみがえり、復活してメシヤの新しい千年王国に入りますが、主の再臨の時に主に会うためによみがえり、王の到来まで生き残った者が、主のために殉教者や証人として死んだ者に先立つことはありません([第一テサロニケ 4 章 15-17 節](#))。この箇所に関連する、火のバプテスマの最大の悲劇的な皮肉があります。不信仰な世界が、自分たちの命を守るために獣に身を任せたのに、彼らは自ら炎の最期を確実にしてしまっただけで、一方、そうするよりも命を失うことを望んだ信者は、永遠の命を得ることになるのです([マタイ 10 章 39 節](#), [16 章 25 節](#); [マルコ 8 章 35 節](#); [ルカ 9 章 24 節](#), [17 章 33 節](#))。信者はこの世の欲望、鏽、塵、現世を越えることのできない富に心を置かず、その業を携えて([黙示録 14 章 13 節](#))、永遠の報酬を得るのです([第一ペテロ 1 章 3-9 節](#); 参照.詩篇 49 篇)。これこそ、これから訪れる困難な日々を耐え抜くために必要な忍耐の基盤となるべき、神聖な視点です。([黙示録 14 章 12 節](#))。

またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた、「書きしるせ、『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』。御霊も言う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。(黙示録 14 章 13 節)

3. 殉教者の収穫 ヨハネの黙示録 14 章 14-16 節

(14)また見ていると、見よ、白い雲があつて、その雲の上に人の子のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかまを持っていた。(15)すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、雲の上に座している者にむかって大声で叫んだ、「かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた(直訳:乾いた)」。(16)雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のものが刈り取られた。(黙示録 14 章 14-16 節)

これは、これから起こる出来事をわかりやすく予告することを目的とした三つの寓話の最初のもので、これらはすべて、大迫害に関連しています。[黙示録 14 章 14-16 節](#)では、殉教者の収穫が描かれています。これは、イエス・キリストのために命を捧げる人々に関する天の視点からの大迫害の描写です。[黙示録 14 章 17-20 節](#)には、迫害者たちの末路が描かれています。獣を支持し、迫害を支持した者たちに降りかかる、ハルマゲドンの戦いにおける悲惨な結末が描写されています。最後に、[黙示録 15 章 1-8 節](#)は、大迫害を耐え抜くすべての信者([2-4 節](#))の苦難の中の勝利について記述しています。これは、サタンと反キリストによる聖徒への恐ろしい虐待に対する神からの予備的な回答、すなわち、これは、再臨と火の洗礼という、さらに強調された決定的な神の裁きを予告するものです。

聖書では、神の恵み深い取捨選択を表現するために、収穫という比喩がよく用いられます。(例:[イザヤ 17 章 5-8 節](#), [27 章 12 節](#); [マタイ 9 章 37-38 節](#), [13 章 39 節](#); [マルコ 4 章 26-29 節](#); [ルカ 10 章 2 節](#); [ヨハネ 4 章 35 節](#))。ここでは、大迫害で殺された信者を、刈り取りの準備が整っていると表現しています。彼らは地上での主の目的を果たし、今まさに適切な時、主の完全な選択の時に、主によって取り除かれようとしているのです。ですから、私たちは、この信者たちに関して心配したりせず、自分自身の人生においてこうしたことが起こる可能性を考えるとときには、物事は本当に世が見ているようなものではないということを忘れてはならないのです。反キリストとその父である悪魔は、信者たちの大虐殺を喜ぶでしょう。しかし、神はすべてを善きに導いておられます。神は、永遠の昔にこの世に定められた人々を栄光のうちに迎え入れ、彼らが愛する人、すなわち、カルバリで彼らのために死んでくださった方に特別な栄光をもたらす方法でそうされます。すべての聖徒の死は常に主にとって尊いものですが([詩篇 116 篇 15 節](#))、艱難期の信者の殉教は特別なケースであることは、ここで用いられている特別な象徴からわかります。上記の聖句では、殉教者を地上から収穫する象徴的な大天使は、天使ではない人間の姿や、頭の上の金の冠、座っている雲からわかるように、主イエス・キリストを表しています(これはイエスの再臨を予告するものです。[ダニエ](#)

[ル7章13節](#); [マタイ24章30節](#); [マルコ13章26節](#), [14章62節](#); [第一テサロニケ4章17節](#); [黙示録1章7節](#))。ここで冠は王冠やディアデーマ *diadema* ではなく(参照:[黙示録19章12節](#))、勝者の冠、またはステファノス *stephanos* で、これは、[黙示録2章10節](#)で「死に至るまで忠実な」信者に約束された命の冠に使われた言葉と同じで、このように死んだ者に与えられる大きな報酬の象徴です⁶⁰。ここにあるのは、大迫害の間に殉教に直面するかもしれないすべての人のための祝福された特別な寓話であり、これらの殉教者の死が主イエスにとってどれほど貴重であるかを、主が適切な時に適切な方法で彼らを集めることにどれほど個人的かつ密接な関心を持っておられるかを前もって示すためのものなのです。

4. 迫害者たちの刈られる時： ヨハネの黙示録 14章17-20節

(17)また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた。(18)さらに、もうひとりの御使で、火(すなわち、裁き)を支配する権威を持っている者[天使]が、祭壇から出てきて、鋭いかまを持つ御使にむかい、大声で言った、「その鋭いかまを地に入れて、地のぶどうのふさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから」。(19)そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ。(20)そして、その酒ぶねが都の外で踏まれた。すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁(約一四三マイル=およそ230キロメートル)にわたってひろがった。(黙示録14章17-20節)

[黙示録19章15節](#)では、同様に主が「全能の神の怒りの葡萄畑を踏みつぶす」様子が描かれており、上記の箇所がハルマゲドンの予告であることは明らかです。葡萄の「血」は、その偉大な日の虐殺で主の衣に飛び散る、文字通りの血や主に逆らう者たちの死([黙示録19章13節](#); [イザヤ63章1-6節](#)と[創世記49章11節](#)を参照)であるとされています。収穫は集会の肯定的な比喻ですが、収穫と「ぶどうの血」の象徴は常に神の裁きに関係しています(例えば、[エレミヤ25章30-31節](#); そうでなければ、鎌はぶどうを集める道具として不適切でしょう)。

かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれ

⁶⁰ 永遠の報いのレベルを示す冠については、[ペテロの手紙#18「永遠の報酬」](#)、および「来たる艱難期」第6部のI.7「教会の裁きと報い」を参照。

ている。彼らの悪が大きいからだ。群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(ヨエル 3 章 13-14 節)

上記の[黙示録 14 章 20 節](#)で言及されている都は、ハルマゲドンの戦いの焦点であるエルサレムであり、(多くが、より信頼性の低い写本の慣習に従って 190~200 マイルとしていますが、)143 マイル<約 230 キロメートル>(190-200 マイルではなく)という距離は、居住地域である、イスラエル国家の北の国境から中央ネゲブまでの、おおよその範囲です。このことは、エルサレムがこの作戦の中心である一方、主による反キリストの軍隊の破壊は、イスラエルの全地域に洪水のように押し寄せることを示しています。この二人の天使のうち、最初の天使が「火に対する権威」を持っていることも、来たるべき裁きの兆候です。そして、イスラエル侵略に参加しないまでも、反キリストを支持しその刻印を受けた者を地上から排除する火の洗礼を予示するものです。前に見たように、祭壇は香の祭壇で、この困難な時代の聖徒の祈りが本当に答えられることを示すために、黙示録で以前使われました([黙示録 8 章 3-5 節](#))。ですから、この第二の寓話の中に、この時代に地上にいるすべての信者が長い間熱心に祈ってきた究極的な解放の心強い成就を見ることができるのです。

5. 殉教者のあがない：黙示録 15 章 1-8 節

(1) また、私は天に別の印を見た。それは、大きく、驚くべきものであった。七つの最後の災害を携えた七人の天使である。(最後の)災害であった。なぜなら、それによって神の怒りは完遂するからである。(2) また、私は、火の混じったガラスの海のようなものを見た。獣とその像と、その名の数字とに[打ち勝つために戦っている]者たちは、神である主の豎琴を手に、ガラスの海の上に立っていた。(3) 彼らは神のしもべモーセの歌、小羊の歌を歌い、こう言った。「全能者、主なる神よ、あなたの御業は偉大で驚くべきものです。永遠の王よ、あなたの道は正しく真実です！」(4) 主よ、あなたを畏れず、御名をあがめる者がいるでしょうか。あなただけが聖なる方です。すべての国々があなたの御前に来て、ひれ伏すからです。これらの裁きはあなたの御前で明らかにされたからです。(5) この後、私が目を向けると、天にあるあかしの神の幕屋が、開かれた。(6) すると、七つの災害を携えた七人の御使が、光り輝く亜麻布をまとい、腰に金の帯を締めて、神殿から出てきた。(7) 四つの生き物(すなわちケルビム)のうちの一つの生き物が、七人の御使に七つの金の鉢を渡した。鉢には、永遠に生きておられる神の怒りが満たされていた。アーメン。(8) すると、神の栄光と神の力の現れから煙が神殿に立ち込め、七人の天使による七つの災害がすべ

て終わるまで、誰も神殿に入ることができなくなった。(英文訳: 黙示録 15 章 1-8 節)

ここでは、大艱難期の試練の坩堝(るつぼ)の中で苦しむ信者たちの苦悩がリアルタイムで描写され、怒り、裁き、そして(信者たちの)義を証明する最後の七つの災いの準備の過程における神の応答が描かれています。この最後の七つの災いは、1 節で宣言されているように、神の怒りを完成させるものです。なぜならその七番目の災害は、ハルマゲドンやキリストの再臨に先立つ一連の裁きと同義であり、そこでは、サタン、反キリスト、偽預言者、そして彼らの悪行に加担した者たちが、すべて地上から一掃されるからです(黙示録 16 章 17-参照)。ヨハネがこれらの出来事を大いなる驚くべきしるしと表現したことは、前の二つの箇所と同様に、ここで扱っていることが部分的には比喩的であることを示しています。ヨハネは黙示録 12 章 1-3 節で同じような(龍の)「しるし」を見ましたが、そのしるしは大迫害の始まりを預言し描写していたので、恐ろしいという意味で「大いなるもの」でしたが、このしるしは本当に「大いなる」だけでなく「驚くべき」ものでもあり、神が迫害されている人々を、力強く救い出すことを預言し、描写しているのです<黙示録 15 章 1 節>。怒り、裁き、正当性を立証する最後の災いを司る七人の天使は大天使で、前の二つの比喩で信者の収穫と悪人の収穫を描いたのと同じ七人の天使です(つまり、ここでは「あの」七人の天使と表現しています: 黙示録 15 章 7 節)。彼らの階級は、メシアの服装に似ていることから分かります(同じく金の帯を締めています: 黙示録 1 章 13 節参照)さらに、彼らは天使の序列で、最高位であるケルビムの一人から直接命令を受けます⁶¹。彼らに託された使命は非常に劇的なものであるため、彼らが任務を受けた後、天上の幕屋、すなわち天にある神の神殿が煙で満たされるのを目にします。これは、神ご自身が今、出来事を積極的かつ決定的に支配し、聖徒があがなわれ、救出され、敵に裁きが下されるまで、神の目的を妨げるものは何もないというしるしです。この最後の災いが行なわれるまで、誰も神の前に出ることはできません(出エジプト 40 章 34-35 節; 列王記上 8 章 10-11 節; エゼキエル 10 章 3-5 節; イザヤ 6 章 4 節参照)。

モーセの歌: モーセの歌は救いの歌で(出エジプト 15 章 1-18 節)、不信仰な迫害者の手から、歴史的類推ではパロ(私たちが見たように反キリストの予型)とエジプト人から、私たちの文脈では反キリストとその刻印を持つ者からの救いとあがないを謳ったものです。モーセの歌は神とイスラエルの子らを解放した神の栄光の力と善意、そして彼らが奇跡的に解放されたことと、それに対する感謝の念の両方から賛美しています。上記の箇所はそのようなものです。しかし、この箇所には決定的な違いがあり、それは

⁶¹ 聖書の基礎: パート 2A: 天使論、II.9.3「選ばれた天使の組織」を参照。

誤読・誤訳のために誤解されがちな点です。先に指摘したように(VII.2 節「大迫害の重要箇所」)、これはまだ地上に生きていて、大迫害の坩堝の中で苦しんでいる信徒を描いたものであり、ガラスの海は地上で起こっている出来事を見る天の「鏡」ですから⁶²、これは、まだ地上に生きていて大迫害の坩堝の中で苦しんでいる信徒を描いたものなのです。したがって、信徒が海の上に立っているという描写は、彼らがまだこの時点では地上にいと明確に教えているのです。モーセとイスラエルの民は、海を通しての解放を神に賛美しました。[ダニエル 3 章 25 節](#)参照)、主が彼らのためになさろうとしていること、すなわち、国々を屈服させ、反キリストの支配から彼らを解放することを賛美しているのです。彼らにとって、これは、あたかもすでに起こったことのように確かなことなのです。信仰の目を持って、今ここにある悲しみ、恐怖、苦難を越えて、地上の目には見えなくても、輝かしい未来に目を向け、事の起こる前から主の確実な解放を喜ぶことができる時、ここに信仰と誠実さの真の証があるのです。

これらの人はみな、信仰をいだいて[歩みながら]死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれ[これらの約束]を望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、[全世界に]自ら言いあらわした。そう(信仰を)言いあらわすことによって、彼らが(今通っている世界以外の)ふるさとを求めていることを示している。もしその出てきた所の(国の)ことを考えていたなら、帰る機会があったであろう。しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。(ヘブル 11 章 13-16 節)

その都は新エルサレムで、そしてこれらの艱難期の信仰者たちは、歴史上最も激しい迫害の中で、神を賛美しており、間違いなく、私たちの神が恥じることのない人々の数に属しているのです。私たちもその数に入るにふさわしく、これからの困難な試練の日々を、勇気を持って行動する覚悟を持てますように。

また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い、人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が[強烈に]揺り動かされるからである。そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう。これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだ

⁶² このシリーズの第 2 部 B、「海」参照。

から」。それから一つの譬を話された、「いちじくの木を、またすべての木を見なさい。はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。(ルカ 21 章 25-31 節)

[「来たる艱難期第 5 部:ハルマゲドンと再臨」に続く]